



讀切 講談
高杉 晋作

特219
524



吉中



始



時219
524



高杉晋作

桃川東燕演



次	目							
東 <small>とう</small>	公 <small>こう</small>	蒲 <small>か</small>	長 <small>なが</small>	お	新 <small>にい</small>	江 <small>え</small>	松 <small>しょう</small>	晋 <small>しん</small>
行 <small>ぎやう</small>	使 <small>し</small>	田 <small>で</small>	崎 <small>さき</small>	う	婚 <small>こん</small>	戸 <small>と</small>	下 <small>か</small>	作 <small>さく</small>
法 <small>はふ</small>	館 <small>くわん</small>	の	の	の	時 <small>じ</small>	遊 <small>ゆう</small>	村 <small>むら</small>	の
師 <small>し</small>	焼 <small>やき</small>	梅 <small>うめ</small>	假 <small>か</small>	ゝ	代 <small>だい</small>	學 <small>がく</small>	塾 <small>じゆく</small>	幼 <small>よう</small>
.....	打 <small>うち</small>	敷 <small>しき</small>	宅 <small>たく</small>	事 <small>こと</small>	時 <small>じ</small>
.....
三	五	二〇	一五	二	一〇	七	四	一

目次



目	唐詩選で引導	四〇
次	坂本の關所	四五
	輕井澤の峠	四七
	お經の稽古	五三
	聞多に邂逅	五五
	晋作還俗	五六
	奇兵隊	六六
	遊撃隊の來島	六九
	野山の牢屋敷	七三
	井上の歸國	七七
	聯合艦隊の來襲	八三

目	長州征伐	九〇
	博多入り	九四
	深夜の客	一〇〇
	髮結喜八	一〇八
	平尾山莊	一一三
	高杉と西郷の會見	一二五
	高杉の奇計	一二三
	送別の宴	一二七
目	筑前の使者	一三〇
	高杉の旗あげ	一三五
次	旗の威力	一三八

目馬關開港論	一三九
日柳燕石	一四五
次故郷の使ひ	一四八
近所の噂	一五八
吞象樓の密談	一六〇
燕石の召捕	一六七
薩長聯合	一七三
高杉の最期	一八二

【目次終】

高杉晋作

晋作の幼時

維新の英傑高杉晋作の傳記を申し上げます。此の晋作といふ方は、天保の十年八月二十日に、秋の城下菊屋横丁といふ處で生まれました。父は高杉小忠太と言ひ、母は同藩大西將曹の娘で、道子と申しました。

晋作には、妹が三人あつて、竹子に榮子に光子と云つて、それ／＼同藩士へ嫁きました。此の高杉の中興の祖先と申すのは、出雲の尼子氏の旗本で、藝州西浦に住してゐた武田元繁といふ人、それが毛利元就と戦つて破れ、伴の春時が毛利へ降つて、備前の三谿郡高杉城を貰ひ、それ以來武田姓を捨て、高杉と改めました。

さういふ譯で、高杉家は、代々毛利の重臣……といふ程でもないが、相當の地位にあり、父の小忠太は若殿長門守のお傳役を勤め、後には直目附を致し、又明治以後は山口藩の大參事を勤めました。

晋作は幼少の時から却々の利かん坊で、友達と喧嘩をしても負た例がない。十一の時でした。お正月家の前で凧を揚げてゐますと、年始に來た人が、過つて凧を破りました。普通の子供ならワーツと泣く處ですが、晋作は泣く處か、大人に向つて掛合を始めた。その人も弱つて、
 『どうか坊や、勘辨してお呉れ、此の糸が置てあつたのを、知らずに引掛けたのだから』
 『小父さん、そんな詫り方があるかい。それぢやア恰で坊が糸を置たから悪いといふやうだ。小父さんだつて眼球が二つあるのだらう。糸があるかないか、見たら分るだらう』
 『それだから私の粗相だといふのだ。斯うしやう、凧を私が買てやるからそれで勘辨して呉れ』
 『ぢやア何かえ小父さん、代りの凧を買へば、詫らないでも宜いと云ふのかえ』
 『さういふ譯ぢやアないが、代りの凧がなかつたら、坊が遊ぶのに困るだらう』
 『大きにお世話だよ、凧なんか幾らでも坊が買ふ、坊は何も凧の代の償ひをしると云つてるのぢやアない。粗相をしましてお大切の凧を毀して申譯がございませんと云つて、チャンと詫れと云つてるんだよ』
 『さうかく、それでは私が悪いから詫る、どうか勘辨して貰ひたい。是で宜いだらう』
 『厭だ。口先で詫ると云つても勘辨は出來ないよ。眞正に悪いと思つたら、大地へ手を突いて詫れば勘辨して上げる』

『馬鹿ッ、そんな事が出来るか』
 『詫らないと云ふんなら、お前の着物を汚してやる』
 と泥を一掴み掬ひ取て投げ附けやうとしたから、その人は驚いた。
 『コレ、馬鹿な眞似をするな、此の衣類は、勿體なくも殿様拜領の品だぞ、コレ見ろ、殿様のご紋の附いてゐるのが貴様には分らんか』
 『殿様から拜領の物であらうと、お前が着てゐるからはお前の着物だらう。お前の着物を汚して凧を破られた代りにするのだ』
 『そんな眞似をして、後にお咎めを受けたらどうする』
 『坊よりも小父さんお前の方が猶困るだらう』
 成程是は理窟です。汚した者も罪のある事は勿論だが、汚された方も罪がないとは云へない。況て對手が子供の事だから始末が悪い。
 『困つた奴だな、では詫る』
 『大地へ手を突いて詫るか』
 『仕方がないから大地へ手を突いて詫るが、此處は通りだから勘辨して呉れる、その横丁へ行て詫らう』

『よし〜』
遂々その武士に大地へ手を突いて詫らして終つた。子供の時から晋作は、こんな風な負す嫌ひの男でございました。

松 下 村 塾

父の小忠太は、師を選んで、晋作に文武の兩道を仕込んでをります内に、早や晋作が十八歳となりました。

此の毛利藩には、明倫館といふ藩立の學校があります。今日で申せば學習院といふやうなもので、學業優等の秀才でなければ此の學校へ入る事は出来ない。と同時に、相當の格式のある武士の子でないと入れません。晋作の家は毛利家譜代の武士で、殊に父の小忠太が若殿のお傳役を勤めてゐるから、選ばれて此の明倫館へ入つた譯です。

ところが萩の城下には、松下村塾と云つて、吉田松陰先生の開いてゐる塾がありました。是は明倫館へ入る事の出来ない輕輩の者の子弟が多く上つてをります。松陰先生の學徳を慕ふ者は明倫館へ入れる程の者も、此の松下村塾へ通つてをります。晋作も矢張り明倫館へ通ふ傍ら、松下村塾へ通つて、松陰先生の教へを受けてをりました。

松陰の家は、代々毛利家に於て、兵法を教へる事が勤めでした。先生は幼名を大次郎、後寅次郎となりまして、矢張り山鹿流兵法の指南をしてをりましたが、一度お暇を頂いて、本來なら武士だから武藝修業といふ譯だが、松陰は學問の修業をして歩きました。

その頃江戸へ出て、有名な大學者佐久間象山の門を叩いて教へを受けた事もあります。象山は蘭學に秀でてゐて、その門下には勝安房などをりました。

處が此の象山が海外留學の獻策を幕府へ出した處から謹慎を命じられて頻りにふさいでゐた。それを松陰が聞いて、

『では先生、密航をなすつたら如何です』

と、松陰が大膽な事を勧めた。流石の象山も目を丸くして驚いた。

『イヤそれは出来まい。うまく行けば宜いが、失敗をすると自分ばかりでなく、ご主人の身に及ぼす事になる』

象山の主人といふのは、松代の城主の眞田幸貫でございますが、象山は幸貫の知遇を得て今日の身分になつたのだ、その主人に禍ひが掛つては相済まぬから、そんな危険の事は出来ないといふ。スルと松陰が、

『先生、それでは私が参りませう』

『ナニ、貴公がお出でなさる』

『私が外國へ行つて、勉強をして参ります』

松陰の決心を聞いて象山も大きに喜んだ。そこで萬事の打合せを致しました。丁度此の時伊豆の下田に亞米利加の軍艦が來てゐた。その軍艦に乗せて貰つて、洋行をしやうといふ事になり、或る夜、吉田松陰が密かに小舟に乗てその亞米利加軍艦へ乗込み、何卒本國へ連れて行て呉れろと頼みました。幕府の許可を受けずにそんな事をする、後日面倒が起るからと云つて斷られて終ひました。

松陰大きに落膽をしたが、そればかりでなく、松陰の乗て行た小舟から足が附いて、浦賀奉行に召捕れ、猶その船の中にあつた行李の中に、象山から松陰に當た手紙が入つてゐたので、一人は密航者、一人は教唆者といふので、二人ながら幕府に處分をされる事になりました。然し松陰は大藩の毛利の家來、象山の方は白河樂翁公の孫に當る眞田幸貫の家來といふので、双方死罪だけは免れて、各々その主人に引渡され、謹慎を命ぜられる事になりました。

そんな譯で吉田松陰は、萩の城下へ護送されて、一旦野山の獄に入れられたが、後に親類預けといふ事になり、そこで始めて松下村塾が起されました。

松陰が松下村塾を開いたのが二十八歳の時で、再び幕府の咎めを受けて、長州を立退き、江戸

へ送られたのが三十歳であるから、正味二年間。しかもその僅か二年の間に取立てた門人が三百人だといふのだから大したもの、それも今日の學校のやうに、時間割で十束一からげにして教へるのではない。一人々々膝組で教へるのだから容易の業ではありません。尤も松陰の教へ方は、本を前に置いて文字の講釋をするといふよりは、精神修養に重きを置いたやうです。それなればこそ門下の内から、木戸孝允、高杉晋作、久坂玄瑞、入江九市、寺島忠三郎、野村靖、山縣有朋、伊藤博文、井上馨、品川彌二郎、山尾庸三、有地品之丞などといふ偉人が澤山に出ました。

江戸遊學

高杉が松下村塾に入つて間もない或日の事、塾の高弟である桂小五郎、後の木戸孝允が、師の吉田松陰に向つて、

『先生、高杉といふ男は頗る秀才で、將來大したものになりさうですが、一步踏外すと飛でもない失敗をする恐れがあると思ひます。その點に就て、能く先生から戒めて置いて頂いた方が、當人の爲になるだらうと思ひます』

と云ふと松陰が、

『成程君の云ふ通り、高杉といふ男は、秀才で、しかも非常に氣性が勝てる代りに、奔放に過

る處があるやうだけれども、人間が馬鹿でないのだから、自然と己れの短所に心附いて、改める時が来るだらう。あゝいふ男は捨て置いて、自分の思ふやうに延びさせた方が宜いのではないかと云つて、何をしても叱言を云はずに置きました。

スルと此の塾の中でも、最も秀才と云はれたのが久坂玄瑞といふ人物、此の人は大體長州家の醫者の家に生まれまして、勤皇の志し厚く、大いに天下の爲に活躍しましたが、後に蛤御門の戦ひに二十六歳で戦死をいたしました。此の玄瑞は、温厚にして、暇さへあれば讀書をしてをります。それに反して高杉の方は餘り本などは讀まない。やゝともすると口論をしたり、人を殴つたりする。そこで松陰先生が、

「高杉、私は幸ひにして、多くの秀才を門人にしてゐるが、就中て尊公と久坂とは、左右の腕とも思つてゐる」

斯う云ふと晋作が、

「それは先生恐れ入ります。私などと違つて、久坂は豪い男でございます」

「久坂は豪い男だ。能く勉強をして感心な男だ。然し尊公とても、決して久坂に劣る男ではない。私は此の二人の門人が、同じやうに伸びて呉れる事を願つてゐるので、何に致せ、久坂は勉強家で豪い奴ぢや」

と、頻りに先生が褒め立てた、馬鹿でない高杉晋作は、先生の腹の中がスッキリ分つた。

「ハ、ア、是は先生が私に勉強をしろとご意見をなさるのだな、それは兎も角として、久坂と乃公とが並び稱されて見ると、久坂に負るのは残念だ」と、負じ嫌ひの男だから、それより一生懸命勉強を始めて、餘り亂暴な事もしなくなつたので、愈々松陰門下の双壁と云はれるやうになりました。久坂と高杉とは競争對手だが、お互ひに對手を尊敬して美しく交際をしたといふのは、一つには勤皇攘夷といふ大きい望みの上に於て全く志しを同じうしたからでもございませう。

然るにその翌年、即ち安政四年、晋作が十九歳の時に、江戸へ遊學する事になりました。長州家の上屋敷にゐる親戚の處にゐて、是から學問と武藝の稽古を始めた。劍術は當時名代の劍客者齋藤彌九郎の道場へ通ひ、學問は大橋訥庵に就て學びました。又航海術、機械學などを學んだのも此の當時でございます。尤も晋作は私費で學んでゐる譯ではない。藩から「萬一、異變の節、お雇ひ」といふ辭令を貰つてゐるのだから、幾分か手當も貰つてをりました。公認の學生でございます。

晋作が江戸にゐる事三年でございますが、丁度此の頃、亞米利加のハリスが日本へ來て條約を迫り、大老井伊掃部頭が是に應じる、そこで諸國の攘夷派が反對の氣勢を揚げる。それを幕府が壓迫するといふ、所謂安政の大疑獄の起つた時代、恩師の吉田松陰先生も江戸に曳かれて、刑罰

に處せられるといふので、國許では大分松下村塾の門生達も騒いでゐた。その騒ぎをよそにして晋作は江戸で只管學問武藝の勉強をしてをりましたが、萬延元年、藩の命に依つて、長州萩へ立戻る事になりました。晋作が萩へ歸つて來ると、豫て親達の間を下話があつたと見えて、直ぐに縁談が整つて妻を貰ふ事になりました。

新 婚 時 代

萬延元年正月二十三日、同藩井上平右衛門の二女雅子と云ふのを、晋作が妻に娶りました時に晋作は二十二歳雅子は十七歳でございました。

此の雅子は、小町娘と云はれる位の美人で、又頗る貞節、此上もない良妻であつたけれども、晋作は國家の爲に東西に奔走をしてゐたので、氣の毒にも空聞を守る方が多かつたやうでござい

ます。晋作は歸藩すると、早速召出されて、若殿の近習を仰せ附けられました、尤も晋作は大殿様のお覚えも目出度く、東邦第一の人物になれよと云つて、東一といふ名前を下すつた程でござい

翌二年の半ばまでは別段にお話もなく、新婚の夢圓かな譯でございましたが、此の當時、幕府が役人を上海へ視察に遣はす事になりました。それを聞いた長州藩では、誰か藩の者をその一行に加はらせて、共に視察をさせたいといふので、種々選擇の結果、高杉晋作にそのお鉢が廻つて來ました。喜んだのは晋作で、早速お受けをしましたが、それにしてもお氣の毒なのは、師の吉田松陰先生、外國へ行きたさに密航まで企て、遂にそれが爲に罪を得て、生涯を不遇の内に終り、三十歳の若さで死んで終はれた、自分は今藩の命に依り、假令短日月にせよ外國へ行く事が出来るは何といふ仕合せだらうと思ひ、佛壇に灯を點じてその靈を葬ひました。藩では晋作から内諾を得て置て、表向きの命令書が下りました。

高杉晋作

右此度御内々思召之旨有之公儀御役人へ隨從外國被差越候に付ては不容易事柄辛勞之至候得共外國之事情形勢尙制度器械等迄可成丈け及見分歸國之上申出候は、一廉國家之御稗益に可相成候條何に不依心を留め記憶仕候、様精々心掛肝要に候此段之旨可申聞事

正月二日 文久二年壬戌

此の命令書に添へて時服一襲ね、旅費として金五百兩を賜はりました。當人の面目は申すまでもなく、親達の喜びも一方でございませぬ。藩中の人々是を聞いて暇乞ひを兼ねて祝ひに参ります。

高杉の家でも捨置けないから、一晚親戚と友人を招いて別れの宴を開く、松下村塾の舊友は高杉の爲に送別會を開いて、大に行を盛んにして呉れました。その年十二月に長崎を出帆するといふ豫定であります。種々準備もあるだらうといふので、十月に萩の城下を出發して、長崎へ向ひました。

おうの事

晋作は下關の長門屋といふ旅館に草鞋を脱いで、此處は却々繁華な町ですから、先を急ぐ旅でもないので、一日緩り見物をしやうと、宿の履物を借まして、ブラリと表へ出ました。ご承知の通り、此の下關は、以前赤間ヶ關と申しましたのを、いつか赤馬ヶ關と改まりそこで馬關なども申しました。

先づ下關で、第一の名所と云へば、安徳天皇をお祀り申した龜島神社でございます。外濱町といふ處にありまして、小高い丘の上にお社がございます。境内には老樹が蒼々と茂つてゐて、前には波靜かなる海を眺め、對岸には門司の港が見えます。誠に眺めの宜しい處、晋作はお宮にお参りをして、それから町中を見物しながら来る。此處は昔から繁華の土地で、富豪も却々をりますから、立派な家が立列んでゐる。

「ア、モシ、其處へ行つしやいますのは、高杉様の若旦那ではございませんか」
往來中で、ふと聲を掛けられて、晋作が振返つて見ると、一人の美しい藝者でございます。ニコニコ笑ひながら立てをります。ハテナ、見たやうな女ではあるが、藝者などに近附きはなし、どうして拙者を知つてゐるかと思ひながら、

「如何にも私は高杉晋作に相違ないが、お前のやうな女を私は知らんな、何處の者ぢや」

「お見忘れでございますか、尤も姿が變つてをりますから、お分りにならないのもご無理はございませんが、私はお城下本町の呉服屋の娘、うのでございます」

「オウ、うのであつたか、變つた姿をしてゐるな、又どうして斯様な處へ参つてをる」

「ハイ、お羞しうございませうが、家の方が左り前になりましたので、私が藝者になりましたが萩の城下では眞逆に藝者にもなれませんので、此の土地へ参つたのでございます。春の家と云ふ家から小萩と名乗て出てをります。どうぞご最負に願ひます」

「能く喋舌る女だな、私は此度藩のご用で此方へ参つたが、此の下關に足を留める譯ではない、長崎へ参るのだ。そして長崎から支那の上海と申す處へ参らなければならん」

「上海といふのは遠い處でございますか」
「遠い處だ」

「種々お話をいたしたい事もございますが、何處か其邊までお附合ひ下さいませんか、それもお嫌でございませうか」

「イヤ、別段厭といふ事もない」

「それとも井上様のお嬢様のやうな、お美しい奥様をお持ちになつて在つしやいますか、私の方やうな不器量な女と一緒に居つしやるのは、ご迷惑でございませう」

「何を馬鹿な事を申す。丁度何處ぞで食事を致したいと思つてをつた處だ、何處でも宜いから案内をして呉れ」

「それでは行つて下さいませうか、有難う存じます。サア此方へ入つて下さいませう」

「おうの、案内で、とある小料理屋へ入りまして、一杯飲んだが、星が合たといふのか、晋作が大層此の女が氣に入つて終ひました。尤も如何に美人でも、堅氣な武士の娘、殊に節婦型の妻の雅子とは違つて、大體町人の娘で、藝者になつてゐるといふのですから、是は對手にして面白い。不思議な縁で、晋作が此のおうのに馴染で、それが爲に思はず下關へ七日ばかり逗留をして終ひましたが、

「うのや、いつまでも私はお前と斯うしてゐたいが、藩のお役を疏かには出来ん。兎に角長崎へ行つて種々幕府の方々とも打合せをしなければならん。さうして上海へ行つて来る。半年か一年で歸

つて来るから、さうしたら又お前の處へも来やう。兎に角一時是で別れるから」

「おうのは泣きさうな顔をして

「私もその上海とやらへ一緒に参る譯にはなりませんか」

「馬鹿を申せ、幕府のお役人と同行するのだ、女などを連れて参れるか」

「それではせめて長崎までお供をして参り度うございます」

「それもならぬ、長州の高杉晋作は、女を連れて来たなどと評判をされやうものなら、飛だ事になるわ、マア、上海から歸つて来るまで待て」

「それではご歸國になりましたら、直ぐにお出で下さいませ、うの、事をお忘れ遊ばすと、お怨みしますよ」

晋作はカラ／＼と笑つて、

「大丈夫だ、貴様そんな事を云つて、拙者より貴様の方で忘れて終ひはせんか」

「アレあんな事を……」
優しく睨まれて、晋作悪い氣持はしない。再會を堅く約して晋作は長崎へ参りました。

長崎の假宅

長崎へ到着して、晋作は早速幕府の人々に遇つて、同行を頼むと、豫て交渉の事だから直ぐに許されましたが、此の上海行の船が種々の都合で、來年の三月出帆といふ事になつて終つた驚いたのは晋作です。

幕府の役人の外に、他藩の人もあるが、是が出帆の延期になつたのを宜い事にして、毎日圓山邊りへ行って豪遊をやつてゐる。仕方がないから晋作も附合してゐるが、その割前勘定も大變だ。さうかと云つて萩へ歸つて出直すといふ譯にもならない。何しろ幾ら使つても幕府で拂つて呉れるとか、藩の方で支拂つて呉れるといふのなら心配はありませんが、晋作の場合は、五百兩貰つて出て來たので、それを使つて終へば、あとは困るに極つてゐる。何とかして金を成べく使はない方法はなからうか、さうして餘り吝たと思はれないやうにしたい。種々考へてゐる内に、ふと思ひ附いたのは『宿屋住居をしては大變だから、自分で家を買つて終はう。出發をする時に賣拂へば大した損はしなからう。然し家を持つとすると、女中か何か雇はなければならぬが……イヤさうだ。あの、うのといふ女を身受けして、女中代りに使つてやらう。さうすれば炊事何やかや總て世話をし呉れるだらう。只の女中より行届くに違ひない。是は宜い事を考へた』と、晋作は一人で喜んで、早速下關へ出張で行つてうのに遇ふと、
『マア、高杉様、能く入して下さいました。上海行の船の出帆が延期になつたと聞きましたので

今日は來て下さるか、明日は來て下さるか、毎日首を長くしてお待ち申してゐるのでございませよ』

『うまい事を云つてゐるな』

『アレ、眞正でございませよ。出来る事なら私は下女にでもなつて、貴所のお傍にゐたいと思つてをりますよ』

『ハ、アさうか、下女をしても拙者の傍にゐたいと申すのだな』

『さうでございませよ』

『それでは、早速下女に來て貰はう』

おうのは眼を丸くして、

『眞正ですの』

『眞正だ、お前に長崎へ來て貰はうと思つて迎ひに來たのだ』

『それが眞正なら嬉しいのですけれども、只困るのはお金を借てありますから……』

『どの位あつたら宜い。金は私が出してやる。その代り長崎まで來て呉れ、但しぢや、小身者の拙者の事だから、奉公人を雇ふ事も出来ぬ。炊事一切其方にやつて貰はなければならぬが、それが承知か』

「結構でございます。洗濯でも炊事でも何でも致しますよ」
「宜し、然らば早速貴様の主人の處へ行って話をしやう」
斯ういふ譯で、先づおうのを連れて長崎へ来て、二三日宿屋住居をしてゐる内に、手頃な家を見付けて、世帯を持つて終つた。是には外の連中も驚いたといふ事でございます。
その年も暮つて、翌文久二年の三月、愈よ上海行の船が出る事になつたので、晋作は早速家を始め、家財道具を賣拂つて、おうのは萩の實家へ戻し、己れは幕府の人達と一緒に上海へ参りました。

何しろ上海は各國の人々の集つてゐる處で、見るもの聞くもの珍しい事ばかり、大いに見聞を廣くして、その年の八月、無事に歸つて参りました。

晋作の報告が、藩の内外を驚かした事は非常で、自然長州藩の新知識に對する慾望が盛んになりました。

妻の雅子は、晋作がおうのを身受けして、長崎で同棲してゐた事も自然耳に入つて知つてをりましたが、その事に就ては、一言も言ひませんでした。晋作も、歸國してから、おうのと二三回は遭つたけれども、雅子は飽まで妻として扱つてをりますから、少しも家庭に波風の立つやうな事はありません。

處がその年の十月、若殿長門守様が、江戸ご出府といふ事になつたので、晋作もお供をして江戸へ参る事になりました。

晋作が江戸へ来て驚いたのは、外國人が種々横暴な事をしてゐるのに、幕府の役人がそれを腫物にさはるやうに扱つてゐる事です。尤も徳川幕府の天下となつて、三百年も太平が打續き、頗る柔惰に流れてゐる。そこへ突然外人が入つて来て、やゝともすると條約云々といふのでどうする事も出来ない。

幕府の役人がこんな風の處へ、諸藩の重役が是また幕府の鼻息ばかり窮つてゐるから、晋作などの目から見ると憤慨をする事ばかりです。丁度久坂や大和直利など松下村塾の連中が上京をしてゐたのでその人達と遇つては互ひに憤慨をしてをります。

その頃、大原重徳卿が、勅使として關東へ下りました。そのご用向は、攘夷に關する事で、幕府も是には實に弱りました。外國からは攻められる。國內からは外國人を追拂へと云つて攻められる。結局幕府が倒れたのも是が原因をしてをります。後日、三條、姉小路の兩卿も矢張り勅使としてお下りになつたが、最初は大原重徳卿がお下りになつたのでございます。處が此の大原卿のお歸りになる時に、折柄出府中の島津久光がお供をいたしました。その途中、神奈川の生麥の並木で、薩摩の藩士が外國人を三人斬りました。是が大層な評判になつて「流星に薩摩の家

來は豪い」と、大層薩摩藩の評判が宜い。それに引替て長州藩は大變に評判が悪いから、高杉始め一同口惜がつて、此の上は一日も猶豫はならん。速かに決行をしようといふので、麻布龍吐の長州家下屋敷へ一同が集つて相談を致しました。

蒲田の梅屋敷

さて集つた連中といふのは、高杉晋作を始め、久坂玄瑞、長嶺内藏太、品川彌二郎、志道聞多是は後の井上馨でございます。その外寺島忠三郎や山尾庸三等でございますが、それに土州の武市半平太が一枚加はつてゐた。武市は土佐藩の急進黨で、坂本龍馬や、中岡慎太郎等よりも一倍増した過激な意見を持てゐる。

そこで集會して相談したのは、横濱の夷人館や、御殿山の公使館などを焼打ちしようといふのです。その頃横濱の夷人は、日曜ごとに武州の金澤へ遊びに行くから、金澤へ乗込んで、夷人の集つてゐる處を、片端から斬て終はうといふ危険な相談をしました。

文久二年の十月十二日の事でございます。下屋敷に勢揃ひをした高杉、久坂、赤根、山尾、白井、有吉、志道、長嶺、寺島、大和、品川の十一人が、遠乗りと稱して、馬で藩邸を出掛けました。本来武市も此の時から同行する筈であつたのに、約束の時間になつても來ない。何か都合が

あつて遅れたのだらうが、いづれ後から來るだらうといふので、十一人で出掛けました。處が此の日、武市は遂に來なかつた。只來ないばかりでなく、此の武市の爲に一行の計畫が失敗に終りました。

と云つても、何も武市が邪魔をした譯ではないのですが、大勢で種々畫策をしてゐた時は、武市もさう深くは考へなかつたけれども、自分一人になつてから考へて見ると、何しろ事重大だ、自分一個の生命は、遅かれ早かれ天下の爲に捨てる覺悟であるのだから宜いが、直ちに藩の方へ責任が掛つて來るやうな事になると殿様へ對して申譯がない、と流石に考へました。そこで、どんな事になつても落へ迷惑の掛らんやう、打合せをして置かうと思つて、前夜藩の重臣小南五郎右衛門といふ人に遇つて、事を打明て話をした。

處が此の小南といふ人が頗る器量人で、武市には少しも反對をしない。大いにやれ、立派にやつて來い、と云つて武市を歸して置いて早速出向を致し、容堂公に耳打ちをしました。そこで容堂公が翌朝武市の處へ使ひをやつて、早々罷り出るやうにといふ。何事かと思つて半平太がご前へ出ると、家中の面々が集つて大酒宴が始まつてゐる。

「半平太、待かねたぞ、盃を遣はず」
「有難き仕合せ」

否とは云へないからお盃を頂いてお對手をしてゐる。その内に約束の時刻になつたから気が
氣ではないが、殿様がどうしてもお放しにならない。従つて時刻も遅れて終ひました。
それより前に容堂公は小南と相談の上、書面を認めて長州の若殿長門守の處へ使者を立てまし
た。長門守殿が、何事かと思つて開いて見ると、貴藩の高杉晋作、久坂玄瑞を始め十餘名が、今
日武州金澤へ乗込んで夷人共を斬り、歸途夷人屋敷を焼打ちした由であるからお知らせする、
間違ひの起らん内にお差止めになつたら宜しからうといふ事が書いてある。驚いて長門守殿が、
早速重役の山縣半藏を呼んでご相談になり、行く先は金澤と分つてゐるのだから、直ぐに追掛け
て差止めやうといふ事になりました。

此方は十一人、時刻が少し遅れたけれども、道を急いで、丁度蒲田までやつて来ると、後から
馬を馳つて飛で来る武士が『オーイ、オーイ』と呼んでゐる。久坂が氣が附いて、

『オイ高杉、誰か呼んでゐるやうではないか、我々の事ではないだらうか』
『左様か』

馬足を止めて、振返つて見ると、聽て近附いて来た人は、藩の重役山縣半藏だ、
『是は〱山縣氏でござるか、何れへお出でになります』

『拙者は各々方の後を慕つて参つたのだが、各々方は何れへ行かつしやる』

『ハッ、私共は一寸遠乗りを……』

『遠乗りに金澤まで行かつしやるのか』

『えッッ』

一同は驚いて顔を見合せた。

『何は兎もあれ此の處にて待ちなさい。おつつけお出でになるから』

『何誰がお出でになります』

『若殿がお出でになる』

愈よ一同驚いて馬を下り、相待つ處へ、長門守殿に、根來、寺内などといふ重役方が附いて馬
乗でお出でになつた。

『半藏、能く間にあつたな』

『ハッ、幸ひに間に合ひました』

『その邊に何處か休息いたす處はないか』

山縣も最前から考へてゐたとみへて、即座に答へた。

『程近くに梅園がございますが、如何でございませう』

『オウ、それは宜い處へ氣が附いた』

蒲田の梅屋敷と云つては、當時却て有名で、江戸の人は郊外散策の杖をひいた處ですが、時候違ひの十月の事ですから、態々訪ふ人もない。殊に早朝よりその梅屋敷の庭を借て、若殿様は緋毛氈の床几の上に、座布團を敷いて腰を掛けられ、その左右には重役方、高杉等十一人はその前の處に蹲踞して控へる。やがて長門守はお聲爽かに、『其方共の此度の思ひ立ちは、偏へに皇國の御爲を思ひ、朝廷の御趣意に従ふその事、至極道理とは思ふが、然し今勅使の御在府中是が爲に萬一の變あらば、それこそ一大事である。其方共の誠忠は相分つてをるが、此度の企ては一時中止いたして呉れぬか、余の察する處にては、幕府に於ても、攘夷のお受けは致すに相違ない。何れにしても、勅使の事が定まつたる上、或ひは其方共の企てを、實行するに到るやも相知れぬ、其の時こそ余も同行の一人ぢや、よいか、相分つたか』

丁度此の時は第二回目の勅使として、三條公が江戸へお下りになつてゐる時でしたから、斯う仰しやつた。

家來は主人の爲には命も投出す事を何とも思はなかつた當時の事ですから、若殿に斯う云はれると、高杉始め一言もない。

『恐れ入りましたございませぬ。何事も主命の儘、私共に異存はございませぬ』

と答へるより外仕様がなかつた。

『他の者はどうぢやな』

『只今高杉の申しましたる通り、異存はございませぬ』

と、今度は久坂が答へる。そこで梅屋敷を出て、一同は界隈の小料理屋へ入つて、食事を致して無事に屋敷へ戻りました。

公使館焼打

その當時、外國人が、品川の御殿山へ公使館を新築した。その輪奐の美を極めた公使館を見るに、晋作始め同志の連中は我憤が出来なくなつた。

『全體公儀に於て異人の邸宅を作るなどといふのは怪しからん話だ。何でも工費が三萬兩も掛つたといふ話だ。残念ながら異人を斬る事に失敗したが、せめて夷人の邸を焼て腹いせをしやうではないか』

高杉晋作と晋作が言ひ出すと、玄瑞も聞多もそれに賛成をした。そこで例に依て大和、長嶺、伊藤、山尾、有吉、白井、赤松、堀、福原を加へて以上十二人が、日の暮るのを待兼ねそつと邸を脱出さうとした。

スルト家老の周布政之助が、當時ある事情があつて、麻田公輔と變名してゐたが、目早くそれを見咎めて、

『オイ、お前方は揃つて何處へ行くのだ』

悪い人に見られた、足止めをされはしなからうかと思ひながら、晋作が、

『エ、一寸品川まで行て來ます』

と云ふと、周布はニツコリ笑つた。

『さうか、行て來い。確りやつて來いよ、骨は拙者が拾つてやるから』

『ハッ』

連中は顔を見合した『周布は話せるな』と、さゝやきながら屋敷を出たが、伊藤俊輔の袴の間から何か棒のやうな物がチヨイ／＼見える。目早く見咎めた玄瑞が、

『俊輔、お前何を持てゐるのだ』

と聞くと、俊輔が、

『是だよ』

と言ひながら出したのは一挺の鋸です。

『鋸を何にするのだ』

『何にすると云つて、まだ公使館の周圍には竹矢來が結つてある。矢來を切らんければ中に入れんだらう』

『成程さうだ。宜い處へ氣が附いた』

公使館へ來ると、幕府の役人が附いてゐた。鋸でゴシ／＼矢來を切てゐるから驚いてそれへ來て、

『アイヤ各々方は何をさつしやる。狼藉を働いては相成らん』

『愚圖々々云はずに立去れ、貴様達マゴ／＼してゐると焼死ぬぞ』

『ナニ、焼死ぬ』

『天に代つて我々が、不淨の家を焼捨に參つたのだ』

『それは大變』

と云ふ内に、忽ち竹矢來を切破ると、ドヤ／＼と中へ入つて、用意して來た煙硝を高く積で、それへ火を放つた。折柄の烈しい北風に煽られて、火の手はドツと上り、忽ちの間にさしも見事に出來たばかりの公使館は灰になつて終ひました。番人達は只アレよくと見てゐるばかりでどうする事も出来ません。

『ア、快い心持だ、是で幾らか幕府の役人も目が覺るだらう』

ドツと歡聲を揚げて一同は、屋敷へ戻つて來ました。

スルト若侍が一人晋作の傍へ來て、

「ご一同ご苦勞様でございます。主人がお待ち申してをります。どうぞお出で下さいまし」

何だか分らないが、その若侍の跡へ尾いて行くと、麻田公輔、即ち周布政之助のお小屋だ。玄關へ立出た政之助が、

「イヤ一同大儀であつた。サア〜昇つて呉れ、何もないが、一杯飲ませやうと思つてゐた。樽をあけた處だ、澤山あるから遠慮なく飲で呉れ」

「是はどうも恐れ入りました」

「何だな、見事に焼たものだな」

「エツ、ご覽になりましたか」

「イヤ宜いわ、若い内は元氣がなければいかん。是からも大ひにやつて呉れ」

大變な家老があるもので、若い者をけしかけてゐる。尤も此の人、頗る大酒家で、酒の上は餘り宜い方ではない。此の前土佐の藩士の前で、容堂公の悪口をした事がある。

「土佐の殿様は尊皇攘夷だと口先では云つてゐるが、その實公方様の相談相手になつて、公武合體論などを唱へてゐる、それが爲に物事が捗らん、案山子の持つ矢で敵は射られない。笑止千萬

な事だ」

と罵つてから、土佐の藩士は大きに怒つて、既に刃傷沙汰に及ぼうとした事件がある。そんな事から長州家では土佐家へ遠慮をして、周布政之助に麻田公輔と改名をさせ、表面は周布を國元へ歸して終つた事になつてをります。

さういふ人物だから、晋作始め若い者に對して、大いにやれ〜とけしかけたのも無理はございません。

處が此の事が自然他の重役連の耳にも入つたので、晋作等を嚴重に取締るやうな事になつた。是ではどうも何にも出来ない、寧ろ藩を脱して、皇國の爲に盡さう、と斯う晋作は決心をして密かに支度をする、藩を脱出したしました。

それが文久二年の十月二十七日の事でございます。丁度吉田松陰先生が千住小塚ヶ原で刑死せられた一周忌に相當いたすので、小塚ヶ原の吉田先生のお墓に詣でて、それから直ぐ江戸を離れ、笠間の加藤熙を訪問し、猶水戸へ行って、水戸の志士達にも種々相談をしやうと考へまして、町駕を雇つてそれに乗り、千住をさして、丁度淺草猿若町の邊りまで参りますと、向ふから大手を振てやつて來る武士がある。ハテナと思つて能く〜見ると、それが例の品川彌二郎だ。「オヤ〜彌二が來た。自分は悦藩をして來たのだから、彌二郎に藩へ歸つて喋舌られると厄介

だ、知らん態をしてをれば、此方は駕に乗てゐるのだから氣が附くまい』
と思つてをりますと、彌二郎が駕と摺違ふ時にふと立留つて、駕の中を覗くやうにする。

『オヤ、變な事をするわい』

と思ひながら、晋作身の廻りを見ると、己れの大刀の鐙が、駕の垂から外へ出てゐる。同門ではあるし、始終往來をしてゐる仲で、彌二郎も高杉の刀を能く知つてゐるから、ハテナ、高杉の刀に能く似てゐるがと思つて見てゐる。

『此奴はいかぬ、悟られたか』

と思つたから晋作思ひきつて、駕の垂を揚げて、

『彌二、何處へ行た』

と顔を出した。ニツコリ笑つて彌二郎が、

『矢つ張高杉おぬしだつたな、餘り刀の鐙が似てをるから見つたのぢや、私は今日先生のご命日なので、千住まで墓参に行て参つた。先生が一同に宜しくと仰しやつた』

『嘘を吐け、實は私も是から墓参に参るのだ』

『さうか、早く行て來なさい、晩に遇はう』

『待て〜彌二』

『何だ』

『私はモウ邸へは歸らんよ』

『ナニ、邸へ歸らん、それで何處へ行く』

『水戸へ行くつもりだ』

『何か藩の用事か』

『さうではない、脱藩をして來たのだ』

『脱藩……』

彌二郎は驚いて目を丸くした。

『どういふ譯で脱藩をするのだ』

『藩にをつては身體を縛られてゐるので、何事も出來ぬではないか、私は藩を脱して自由の身體になり、大いに皇國の爲に盡すつもりぢや』

『ウーム、思ひきつたな、然しおぬしの事ぢやから、止めた處で思ひとまるまい、勝手にするが宜い。では是で別れる』

『別れるは宜いが、拙者が脱藩をしたので、邸では相當騒ぐだらう、何處へ行たかといふ時に、貴様に此處で私に遇つたと喋舌られると大きに都合が悪い。どうか私に遇つた事は秘密にしてゐる』

て呉れろ』

『宜しい、必ず誰にも云はぬ』

『何分頼む、一寸待て呉れ』

晋作は腰から墨汁を取り出して、懐紙にサラ／＼と何か書いて、

『どうだ、是を見て呉れ』

と差出したのを彌二郎見て、ニコ／＼と笑ひ、

『相變らずやつてをるな』

と云つた。懐紙の表には達筆で、

妻も親も捨て、獨りの伊勢詣り、

といふ狂句が書いてある。晋作は若い時から俳句や狂句が好きで、能くこんな事をやつてゐた

『是は貰つてをく、道中氣を附けるよ』

『有難う、貴様も達者でゐて呉れ』

別れて品川彌二郎は藩邸へ歸つて行く、晋作は駕を急がして千住小塚ケ原へ參り、松陰先生のお墓に詣で、一掬の涙をそゞぎ、それより愈々江戸を跡にして、水戸街道を急ぐ事になりました。

東 行 法 師

途中別にお話もなく、土浦の城下へ来て、茨城屋といふ宿屋へ泊つて、一杯飲で寝ましたが、夜半にふと目を覺して、越し方行末の事などを種々考へてゐる内に、昔西行法師は、禁裡の武士であつたが、世を憊んで頭を丸めて坊主になつたといふ、乃公は何も世を憊なむといふ柄ぢやアないが、藩を離れて自分一個の人間となつて、徳川幕府に敵對して行くには、結局坊主の方が都合が宜いかも知れぬ。是ア坊主になつてゆかう、坊主になるには、何處かの寺へ行て、弟子になつて、剃刀を下して貰ふのが普通だが、そんな事をするのも面倒だ、獨りで坊主になつてやれ、と斯う考へまして、翌日勘定を拂つて宿屋を立出で、ブラリ／＼來ると、一軒の床屋がございました。また朝ッばらの事で、客は一人もゐない、亭主が店前でバクリ／＼煙草を喫つてゐる。それへ晋作ズカ／＼と入つて來て、

『許せよ』

『入つしやいまいし、お早うございます。丁度外にお客もございませんから、直ぐに致します』

『何をするのだ』

『何をするよと云つて、何でござんせう。お髪をお結びになるので』

「イヤ、拙者は髪を剃すのだ」

「ヘエツ」

「髪を剃す」

「髪を剃すといふと、坊主におなりになるやうでござんすな」

「坊主になるのだ」

「ご冗談仰しやつちやアいけません。朝ツばらから坊主になるなんて、縁起が悪いちやアござい

ませんか」

「坊主になるのは縁起が悪いのか」

「ダツテ能くさういふちやアございせんか、申譯のねえ事があるから坊主になつて詫をするな

んで」

「アハ、拙者もチト申譯のない事があつてな、詫の爲に坊主になるのだ」

「何だか訝しいな、坊主にしろと仰しやるなら、私も商賣だから致しますが、お武士の坊さん

「ハ、ア、貴様却々歴史に精通してゐるな」

「ナニ、歴史なんて、そんな難かしい物は知りませんが、講釋場で聞いた事があります」

「乃公のは坊主頭の武士にならうといふ譯ではない。頭を丸めて今日から出家をしやうといふの

「愈よ旦那變つてゐますね、けれども坊主になるなら、お寺へ行ってお住職さんに頼んだ方が宜

いでせう」

「それがな、此の邊には乃公の氣に入ら坊主がない。そこで京都へ行って、豪い坊主の弟子になる

「頭を丸めるのもその時で宜いちやアありませんか」

「能く種々な事を云ふ奴だな。乃公は一日も早く坊主になりたいのだ、思ひ立たが吉日といふだ

「それちやア、マア折角のお望みだから坊主にして差上げませうが、あとで何ですよ、乃公を坊

「大丈夫だから早くやつて呉れ」

「かしこまりました」

床屋の亭主は鋏を持って後へ廻つたが、

「惜いなア、こんな房々とした髪の毛を切てお終ひなさるなんて、ちやア切りますよ」
「早くやれ」

「へエ、南無阿彌陀佛、々々々々々々」

「念佛などを唱へずに、唄でも唄ひながらやつて呉れ」

「變つてますね旦那は……」

先づ鉄で髪の毛をバサリ／＼と切り落して、それから剃刀を當てて剃り始めた。

「へい旦那、出来上りました。鏡をご覧下さい」

「ドレ／＼見せろ、……ア、綺麗な坊主だな、是は誰だ」

「誰だつて、旦那ぢやアありませんか」

「ウーム、是が乃公の頭か」

クルリと一ツ撫て見て、

「アハ、サツパリしたな、然し何だな、大髷に結てゐる方が見ばが宜いな元の通り結て呉れ」

「元、冗談云つちやアいけませんよ、それだから厭だつて云つたんで、旦那、眞正ですか」

「イヤそれは冗談だ、心配するな」

「さうですか。冗談なら宜いけれども、坊主に髷つて髷にもある通り、是ア出来ない相談です」

「からね、マア此方へいらつしつて一ふく召上れ」

「そこで貴様に頼みがあるがな、相當の禮はするが、一ツ使ひに行つて呉れぬか」

「へい畏りました。何處へ行て来るんで」

「外ではないが、是なる大小と、此の衣類を賣拂つて来て貰ひたい」

「ア、成程、坊さんに大小なんか入用はありませんね、承知しました。成べく値を能く賣て來ませう」

「それから出家の旅装束一切を取揃へて貰ひたい」

「旅装束つて何ですね、鼠の手胼脚絆菅笠なんかですね」

「さうだ、珠數を忘れるなよ」

「違えねえ、坊さんが珠數がなくつちやア髮結が剃刀を持てゐねえやうなもので、商賣にならねえ、ちやア行て來ます」

「それから」

「まだ何か買物があるんですか」

「大小を賣拂つたら、短刀の能く切れさうなのを一本買て來て呉れ」

「短刀が要るんですか、危険な坊さんだな」

「今まで大小を帯してゐた者が、身に寸鐵も帯びないといふ事は心細い、此の先深山幽谷へ立入らんとは限らん。さすれば猛獸などに出遇ふ事もあるだらう、此方が本物の出家で、修行を充分にした者なら、佛の加護もあらうが、私には神佛の加護もあるまい。愈よといふ時には矢張習ひ覺えた武藝より外に身を守るものはない。尤も昔の名僧知識、又は行者にしても、深山に入る時は、先づ鈴を鳴して猛獸毒蛇を追拂ひ、近寄る獸は獨語を以て是を防いだといふから、何か護身の物がなければなるまい」

「成程、さう伺ふとそんなものでせうね、ちやア一寸行て來ます」

「何分頼む」

風呂敷に衣類大小を包んで出て行たが、間もなく歸つて來た。

「へエ行て參りました。お安いか知れませんが、衣類、大小は是だけに賣れました。又お買物は是だけでございます」

「イヤ忝けない。是でどうやら出家が出來上つた」

と法衣をスツカリ身に附けて、

「どうだ、出家らしく見えるか」

「へエ、有難さうなお坊さんが出來ました」

「どうだ、引導を渡してやらうか」

「冗談云つちやアいけません。無暗に引導などを渡されては堪りません。お宗旨は何でございませう」

「宗旨は淨土宗だ」

「お名前がなければいけませんね」

「名前か、名前は……さうだ、東行とはどうだ」

「結構でございますね、西行法師の兄弟分見たやうで」

「西行の兄弟分とは有難いな、それでは西行の歌行脚を真似て、私は句行脚と行かうかな、西へ行く人を慕ふて東行く……とはどうだ」

「結構でございますな」

「分るか」

「何だか分りませんが、結構のやうで」

「分らんで結構は心細いな、イヤ大きに世話になつた。是は頭の剃り賃、是は種々世話になつた禮だ」

と、若干かの金を出した。

「イヤ、こんなに頂いては相済みません」
 「マア、遠慮をするな、是はお布施だ」
 「お坊さんの方からお布施を貰ふといふ手はありませんよ、旦那は真正にご冗談者ですな」
 「アツハツハ、然らば参らう、又縁と命があつたら遇はうな」
 「さう仰しやらずに是非又此方の方へ入らうとお立寄りを願ひます。どうぞお氣を注いで行つしやいまし」
 高杉晋作改め僧の東行 心も軽く身も軽く、土浦の城下を後にして、その名前とは反對に、西の方をばさして上ります。

唐詩選で引導

晋作は、笠間から水戸の城下へと始めは志したのでありますが、途中で氣が變つて、土浦から筑波山の裾を通つて、結城へ抜け、あれから前橋、高崎へと出まして、木曾路を西へと上る考へ、

丁度眞壁から下館へ向ふ途中でございます。茂田村といふ一村を通り掛つた時に、
 「モシ、其處へ行く坊様、坊様よ、一寸待て下せえ」

坊様くと呼ばれて、晋作ハツと氣が附いた「ア、乃公の事だな、姿形は僧形をしてゐるが心まで坊主になつてをらんで、ツイ呼ばれても氣が附かぬ、我ながら迂濶の事だ」と思ひながら、振返つて見ると、百姓體の男が二人立てゐる。

「コレ、呼んでゐなざるのは、私の事か」

「さうですがよ、坊様若い癖に耳が遠いかな、先刻から随分呼んでゐるのに、すまして行きなさら」

「イヤそれは大きに失禮いたしました。少し考へ事をしてゐたので、呼ばれても氣が附かなかつた。何か用かの」

「外の事でもねえが、此の村の名主様の家の婆様が死で、葬式を出してえが、坊様がゐねえでがす、桑山まで頼みに行くべえかと思つてゐたが、丁度お坊さんが通り掛つたのは幸ひだからお前様にお願申してえだが、どうだね、やつて下さらねえか」

晋作驚いた。厄介な事を頼まれたと思ひながら、

「何か、此の村には寺がないのか」

「寺がある事にはあるだがね、坊様が去年おツ死んで終つて、今無住でがすよ」

「左様か、私は少し急ぐのぢやがな」

「そんな事を云はねえで、一寸寄つてお経讀で下せえよ、大概の事は村の年寄がやつたが、お経ばかりはどうも商賣人でねえといけねえから、それに引導てえ物を渡して貰ひてえ」
「ア、成程、引導か、よし／＼行てやりませう」
晋作はお経も何も知らないが、二度や三度葬式にも行た経験があるから、何とか瞞着してやらうと思ひながら、二人の百姓に案内をされて來ますと、白壁造りに冠木門のある立派な構へ、村の男女が出たり入つたりしてをります。

「サア和尚様、此方へ來て下せえ……名主様ア、名主様よ」
名主と呼ばれたのは、五十がらみの人物、

「ハイ／＼、オヤ太郎作どんに、吾作どん、どうしなすつた。桑山村まで行て下すつたか」

「ナニ、桑山村へ行かうと思つて、村外れまで行きますとな、旅の坊さんが通り掛りましたから吾作どんと相談の上、早え方が宜からうと思つて、お願え申した處、急ぐ旅だけんど、行てやるべえと云つて來て下すつたでがすよ」

「それは／＼、能く氣が附いてお願ひ申して下すつた。……是は／＼和尚様、ご無理をお願ひ申して相済みません」

「イヤ／＼、ご不幸があつたさうぢや、ご愁傷な事だな」

「有難うございます。佛様は此方でございますから、どうかお上んなすつて」

「ご免蒙むる」

草鞋を解いて上がり、奥の座敷へ通るとモウすつかり支度が出来ております。その前へ座つて晋作、口の内で何かゴチャ／＼と云つて「南無阿彌陀佛々々々々々々」眞面目くさつて二三遍念佛を唱へる。

不思議なもので、坊さんの形をしてゐるだけに、同じ南無阿彌陀佛と云つても、何となく有難みがあります。家内を始め村の者は大きに喜んで、

「サア和尚様、こんな邊鄙な處で、何にもねえだけれども、食つてお呉んなせえ」

「イヤ忝けない」

馳走になつて、休息をしてゐる内に、夜になりますと、お通夜でございます。

「和尚さん、ぢやア一つお經を願ひます」

「承知いたしました」

とは云つたが晋作腹の中で、困つたなアと思つた。然し黙つてもゐられないから、聽て佛の前へ座つて、論語へお經の節を附けて讀み始めた。

「子曰く學んで時に是を習ふ、又悦しからずや朋あり遠方より來る亦樂しからずや……」

時々南無阿彌陀佛々々々々々とやると一同涙を流して聞てゐる。お通夜はそれで済んだが翌日お葬式、今度は厭でも引導を授けなければならぬ。何か宜い文句はないかしらんと、種々考へてゐる内に、ふと思ひ當つたのは、唐詩選の文句だ、今年の花は去年の好に似たり、去年の人は今年に到つて老ふ、始めて知る人老て花に好さる事を、惜むべく落花君掃ふ事なかれ、よしよし、是が宜いといふ鹽梅で、都々逸の文句を列べるのと違つて、どうやらお經の文句らしい。葬式が済んだ翌日、名主の六右衛門が晋作に向つて、

『和尚さん、貴所是から何處へお出でなさるか知らないが、當村に安養寺といふ寺があります。今無住でございますから、その寺にお住持になつて下さる譯にはなりませんまいか』

晋作苦笑ひをして、
『イヤお志しは忝けないが、私はまだ修業中の事で、是より本山へ參つて充分修業をいたす考へでござる、ご縁あつて當村へ參り、その時にお住持がをらぬやうでしたら、お世話になりませう』

『さういふお望みがあるのなら、強てお引留め申しても悪いから、お氣儘になすつて下さい、就ては甚だ輕少でござりますが……』
と云つて、若干かの禮を呉れました。晋作心中に、宜い加減の事をして、假令幾らでも禮を貰

つては氣の毒だとは思つたが、又思ひ返して見るのに、お經は出鱈目でも、天下の志士高杉晋作が心から吊つてやつたのだから、生臭坊主の眞正のお經を上げたのよりも、却つて佛は喜んで呉れたらうと、勝手な理屈を附けて、その禮を受け、聽て別れを告げて、茂田村を出立いたしました。

坂本の關所

さて晋作は、それより結城、小山から前橋へ出て、高崎へ參り、木曾街道を京へ上る事になりました。

板鼻、安中、松井田より、坂本の驛へ行かうといふ、此の途中にお關所がございます。流石の晋作も是には一寸困つた。關所を越すには、何處の何といふ者で、何處まで行くといふ手形を持つてゐなければならぬ。長州の家來で、高杉晋作なら立派に通れるが、俄作りの出家ではチト面倒だ、ハテ何と云つて通らうかと考へたが、思慮の勝れた晋作の事だから忽ち妙案が浮んだと見えて、すましこんで關所へ掛りますと、旅の者が五六人調べられてゐる。ズカ／＼と來てその連中の後ろへ座りました。

聽て前の連中の調べが済んで、晋作の番になりました。

「コレ、出家、其方は何れの者で、又何れから何れへ罷り越す」
 「エ、愚僧は京の智恩院の徒弟で、東行と申します。是より江戸まで本山の使ひで参ります」
 「京から江戸へ下るのなら、何故東海道を往來いたさん」
 「エ、木曾路の寺々に用向がございしますので、それゆえ當街道を下つて参りました」
 「左様か、然らば手形があるであらう」
 「ハイ、手形もございしましたが、途中で夕立に遇ひましてな」
 「それが如何でした」
 「濡まいと存じまして、馳出した時に、何處ぞへ落しましてございます」
 「それは甚だ不都合ではないか、手形がなくては關所を通す譯にならん」
 「それでも落しましたのでございせん、是から京都まで取返しますのは大變で」
 「大變でも仕方がない。通す譯には相成らん。落したのなら引返して見たら落てるだらう」
 「落てをれば宜しうございしますが、人に拾はれて終つたかも分りません、どうか格別を以てお通しを願ひます」
 「ならん」
 「どうも困りましたな、それでは引返して探して参ります」

と言ひながら晋作が、態と悄然とした様子で、松井田口の方へ出やうとした。それを見ると役人が、
 「控へろ」
 「へエ」
 「横着な奴だ、貴様今何と申した、智恩院の僧で、是から江戸へ行くのだと申したらう」
 「左様でございます」
 「その木戸口は江戸方だ、引返すのなら元來た木戸口から出て行け」
 「へい、恐れ入りました」
 といふと晋作、坂本口の木戸から出て終つた。
 役人達も、始め晋作の入つて來た時に、見てゐなかつた譯ではないが、度胸の宜い晋作の振舞に、少しも怪しむ處はなく、關所を通り抜けさせて終つた。

輕井澤の峠

さて晋作は頓智を以て坂本の關所を無事に通過いたし、坂本から輕井澤へ行くまで二里半、是は山坂道で、木曾街道でも就中難澁の道、然し武藝で身體を鍛へた晋作、平氣なもので、ドンド

ン坂道を昇つて来ると、東海道と違つて餘り往來もない。況て斯様な難所前後に人影もありませ
ん。スルと風がもつて来る悲鳴、

『アレー、助けてー、人殺し……』

といふ女の金切聲、晋作是を聞いて、扱は追割が旅人を脅すと見える、よし／＼助けてやらうと
姿は坊さんでも根が武士、悪路を厭はずドン／＼馳て来て見ると、入道窟といふ處、雲助體の奴
が五六人で周圍を圍み、旅の町人體の若い男女から、金でも取らうといふ様子、飛込み來つた晋
作が、

『コレ待て、貴様達は何をするのだ』

雲助の一人がヒョイと見て、

『何だ、武士見てえの口を利きやアがつて、見りやア旅の乞食坊主ぢやアねえか、餘計な處へ出
しやばりやアがつて、傍杖食て怪我でもするな』

『乞食坊主とは吐いたり、イデその儀なれば片端から引導渡してやるから覺悟をしろ』

『洒落臭え坊主だ、ソレやつちまへ』

『合點だ』

と左右から棒を持って打つて掛るのを、晋作忽ち一人の棒をもぎ取ると、右左に打ち叩いたから

驚いたのは雲助共、

『やア思ひの外強い坊主だ、敵はねえから逃げろ』

といふと、ドン／＼／＼坂本の方へ逃て行く、後ろ姿を見送つて、高笑つた晋作が、

『コレ／＼町人、最早賊共は逃去つたから心配するな』

男女は大地へ手を仕へ、

『危い處をお助け下さいまして有難う存じます。此の坂下で雇ひました駕籠屋が此處まで参りま
すと、仲間と見えましてあの森影から出て参りまして、金を出せ、着物を脱げと申しまして、厭
と云へば殺して終ふと申しますので思はず大聲を揚げました處、和尚様がお出で下さいまして、
危い處を助りましたと申します。有難う存じます。何れにしてもお強いお坊さんでございますね
失禮ながら元はお武家様でもございましたか』

晋作苦笑ひをして、

『イヤそんな事はどうでも宜いが、お前方は是から何處へ行きなさる』

『ハイ、私共は岩村田のお城下信濃屋善兵衛の伴善次郎、是は家内のはたと申す者でございます
す。高崎の縁家まで参りました戻りでございます』

『あゝさうか、私もどうせ京へ上る者だ。又途中であゝいふ悪い者に出遇はんとも限らんから、

一緒に行ってやらう」

「それはどうも有難う存じます。お花や、和尚様が一緒に行て下さるといふから安心をおし」

「有難う存じます」

「お前方は旅をするのに、別段荷物も持つてをらんやうだが、最前の雲助共に奪はれたのではな
いか」

「イエそれは何でございませう。供の者を一人連てをりまして、荷物などその駕籠に付け、お花が
駕籠に乗つてをつたのでございませうが此の山道へ掛りますと、急に供の者が病氣になりましたの
でお花を下ろしまして、供の男を駕籠に乗せ、輕井澤の宿へ先にやりましてございませう。僅か三
里に足りない道と存じましたが、女の足、殊に山道の事で難澁の様子、丁度駕籠屋に遇つたもの
でございませうから、それに乗せたといふ譯でございませう」

「ア、左様か、それで仔細は相分つた。成程女には些と難澁であらうが、急がずに參れば歩けぬ
事もあるまい。サア參らう」

「お供を致します」

三人連で少し行くと、山中村といふ小村がありまして、立場茶屋があります。其處へ寄つて一
服してゐる處へ、通り掛つた一挺の空駕籠、

「オウ旦那に内儀さん、またこんな處に在しつたのですか」

といふのは、先刻お花が乗つてゐた駕籠で、病氣になつた供の男を輕井澤の宿屋まで送つて來
た戻りでございませう。善次郎は喜んで、

「オウお前方は先刻の駕籠屋さん、丁度宜い處へ來て下さつた。濟まないが、モウ一度輕井澤ま
で行つてお呉れでないか」

「お供の方は宿屋までお送りして來ましたが」

「今度は家内を乗せてモウ一度行つて貰ひたいのだが」

「棒組どうしやう」

「お駄賃は餘計に上げますよ」

「さうだなア、まだ日も高いからお供をしやうぢやアねえか」

「ウムさうしやう……エ、旦那、お供を致します」

「さうかい、そりやア有難う、お花や宜かつたねえ」

「眞正に助ります」

「ご出家様、此の駕籠屋さんが家内を乗せて呉れるさうです」

「さうか、それは宜かつた。足弱連では困ると思つてゐた。駕籠屋大儀だな」

『どう致しまして、ぢやアお支度が宜かつたら出掛けませう』
そこでお花は駕籠に乗り、晋作と善次郎が傍に附いて、輕井澤の松屋といふ宿屋へ参りました。宜い鹽梅に先着の八藏といふ下男も、服薬をしたので、病氣も治まつてをりました。

お經の稽古

翌日輕井澤を出發、沓掛、追分、小田井、岩村田と、四里半ばかりの道でございますから、正午過ぎには、岩村田のお城下信濃屋善兵衛方へ到着いたしました。

『ご出家様、お蔭様で無事に宅へ戻れました。どうぞお上がり下さいまし』

『イヤ〜私は是でお別れいたす』

『さう仰しやいませんで、せめて二三日ご逗留を願ひます。父親からもお禮を申させたいでございますから』

と云つてゐる處へ、父親の善兵衛も出て参りましたから、最初から言葉短かに晋作に救はれた事を物語りますと、善兵衛も大きに喜んで、

『是非ともご出家様お上がり願ひます』

餘り勧めるものですから、晋作も草鞋を脱いで上がる。お疲れでせうからと、早速風呂をたて

て入れる。

『ご出家様は何でございますか、お酒は召上りませんか、お寺様では般若湯と申すさうでございますが……』

『般若湯は大好きだ。それに出家だからと云ふので、精進料理などを殊更に拵へるやうな手数の掛る事は止めて貰ひたい。私は何でも食すから』

『左様でございますか、斯様な不便な處でございますから、魚類などは餘りございませんが、川魚などを召上りますか』

『ア、結構だ、ご馳走にならう』

鯉料理か何かで一杯飲んでゐる、大變な坊さんがあつたもの、その夜は寝て翌朝晋作が目覺すと、何處からか讀經をする聲が聞える『ハテナ、誰が經を讀んでゐるのか』と廊下傳ひに、聲のする方へ来て見ると、大家の事ですから、立派な佛間が出来てをります。佛壇の前へ座つた主人の善兵衛が、頻りに經を讀んでをります。仕方がないから晋作もそれへ座り、手を合してをります内に、經を讀み終つた善兵衛が、振返つて見て、

『オヤ是は和尚様でございますか、サア〜どうぞ此方へ、存じませんで、失禮いたしました』
『イヤ主人、お前はお經が旨いな』

「恐れ入りました。和尚様に聞かれましたはお羞しうございますが、長年斯うして心經を上げますのを毎朝の勤めといたしてをります」

「ウム、それは感心なものだな、羞しいが私は出家であるけれども、經文は知らん」「ご冗談を」

「イヤ冗談ではない、眞正だ、只南無阿彌陀佛と云ふ事だけは知つてをるが、どうも斯様な姿をしてゐると、經を知らんでは誠に困る事があるな」

「眞正でございますか」

「眞正だ、大概様子で知れたらうが、私は元武士だ、論語や孟子は習つた事はあるが、經はまだ習つた事がない。どうだ、私に經を教へて呉れんか」

「アツハツハ、反對でございますな、お坊さんに商人がお經を教へるなんて」「マア宜いから教へて呉れ、頼む」

「それでは此處にお經の本がございます。是を差上げますからお讀みになつたら如何で」

「それは忝けない。然し一遍やつて呉れ、却々節が旨くゆかんから」

「どうも困りましたな、マア宜うございます、やりませう」と信濃善の主人が讀むのを聞いてゐるが、

「イヤお前は旨い、却々にあの風邪をひいたやうな聲は出ないものだ」

「あなたお人が悪い、無理に讀まして置いて悪口を云ふなんて」

「アツハツハ、イヤ忝けない、是で今度は呼び込まれても心配はない」

その日立たうとしたが、強てと留められて、三日ばかり逗留しました。聽て再會を約して此處を出立いたしました。

聞多に邂逅

晋作はその後別にお話もなく、京都へ着きまして、三條小路の茜屋といふ家へ宿を取つて、是から京都在住の勤皇派の動靜を探り、その連中と追々行動を共にしやうといふ考へでをります。

スルと或日の事、清水へ參詣をして、坂を下つて來ると、向ふから來た一人の武士、被つてゐた笠に手を掛けて足を留め、

「何だ、貴公晋作ではないか」

「オウ誰かと思つたら聞多か、參詣か」

「參詣かではない、貴公變つた姿をしてゐるな」

「アハ、、どうぢや、坊主振も悪くはなからう、有難さうに見えるだらう」

「餘り有難くは見えんぞ、どう見ても腥さ坊主だ」
「此奴口の悪い奴だ」

「マア種々聞きたい事もあるし、話たい事もある。何處かで一杯飲まう、だが貴公出家をして、酒は飲まぬか」

「飲まんどころか、酒も飲むし、魚も食ふ」

「愈よ以て腥さ坊主だ、然らば其の邊の料理屋へ入らう」

とある料理屋へ上つて、酒肴を取り、差向ひになると聞多が、

「どうしたのだ晋作、坊主などになつて」

「旅をするのには坊主が宜い晋作々と云つて呉れるな、それは昔の俗名、當時は東行法師だ」

「貴公が脱藩したので、一時は大騒ぎをしたぞ、東海道、中仙道へ追手を掛けたがどうも分らんといふ事だつた」

「彌二は何にも云はなかつたか」

「何か、彌二は知つてゐたのか」

「ウム、脱藩の途中で彼奴に遇つたが、堅く口止めをして置いた。彼も感心な男だ、能く云はずにゐて呉れた」

「さうか、貴公坊主になどなつて、何をしやうといふ考へだ」

「長州藩の高杉晋作では、何事も自由に出来ぬ。そこで脱藩して坊主になり、皇國の爲に一身を抛つて働く氣ぢや」

「それも宜からう」

「聞多、何でお前は此の京都へ來てゐる」

「何でと云つて、若殿様のお供をして來たのだ」

「それでは若殿も當時此の京都にお在になるのか」

「大殿も若殿も江戸をお立ちになり、此の京都へお出でになつたが、大殿様は長州へお歸りになり、若殿様だけ當地にお留まりだ」

「さうであつたか、私は中仙道をブラノ、やつて來たので、少しも知らなかつた」

「その内に邸へ來いよ、さうして若殿様にもお目通りをするが宜い」

「又さういふ時節も來るだらう。兎に角今日は飲んで別れやう、玄瑞も俊輔も皆此方か」

「皆な來てゐる」

「宜しく云つて呉れ、その連中には種々連絡を取らなければなるまいと思つてゐる」

「當時は何處にゐる」

『三條小路の茜屋といふ家にゐる。當分の間其處に滞在するつもりだ』
『宜し、その内に改めて遇はう』

晋作還俗

その日はその儘聞多に別れましたがさうしてゐる間に晋作は、薩藩や、土藩の勤皇の人達にも
出會し、又殿上方の邸へも出入をして、時の來るのを待つてをります。

その内に聞多から聞いて支瑞や俊輔、それに品川彌二郎などが茜屋へ尋ねて來たり、又他の場
所で落合つて種々相談などをしてをりましたが、いつか若殿長門守様のお耳に入つて、

『晋作が當地にゐるさうではないか、咎めは致さん、連て參れ』

といふお言葉がありました。そこで聞多が迎ひに來て、晋作を僧形の儘お邸へ連て來る。長門
守様晋作の様子をご覧になつて、

『晋作變つたな』

『ハッ、恐れ入ります』

『どうぢや、坊主になつて見ても別段變つた事もあるまい。宜い加減に還俗しろ』

『ではございませぬが、晋作又何を致すかも知れませぬから、お邸にご迷惑の掛りますやうな事

があつてはなりませぬ。殊に一度無断にて脱藩いたしましたる某……』
『それもある故、直ぐに邸へ戻す譯にもなるまいが、どうぢや聞多、晋作に學習院のご用係をさ
せては』

『至極結構と存じます』

『晋作、其方を學習院の用度係に推擧いたします。早速還俗いたして勤めたら宜しからう』

『恐れながら學習院の用度係と申しますのは』

『知らぬか、聞多、其方から晋作に話てやれ』

『畏りました』

そこで聞多から細かに説明をしましたのは、當時京都に學習院といふものが出來てゐた。公卿
殿上方の學問所でございますが、その實是は朝廷と諸藩の勤皇の士とが何かと打合せをする機關
のやうになつてをりました。用度係といふのはその事務を扱ふ係でございます。自然殿上方や
諸藩の勤皇の士とも結ぶ事が出來るといふ、折角の長門守殿の思召であるから、晋作お受けを
いたして、坊主は早速廢業する事になりました。

然し坊主では工合が悪いので、當分髪を被つたり付け髷をしたりして誤魔化してをりましたが
年が若いだけに、髪の延びるのも早く、元通りとはゆかないが、どうやら髷を結えるやうになり

ました。

當時例の周布政之助も京都に来てをりまして、高杉晋作のやうな使へる男を、藩外に置くのは勿體ない。藩へ戻したら宜いだらうといふ意見で、國許の方へも打合せをしてゐたが、一時謹慎をさせるといふ事で話が附きましたので、早速晋作を呼んで、是々と話をする、晋作もおとなしく、

『萬事お任せいたしますから、何卒宜しく』

と云ふ返事、そこで學習院の方へは辭表を出し、丁度長門守様もお國表へお歸りになる事になつたので、そのお供をして、久々で長州萩へ戻り、我が家へ戻つて参りました。妻の雅子は固より、一家親類の喜びは此の上もございません。

晋作が歸藩しても、脱藩に就てのお咎めは少しもございません。然しお咎めがないからと云つて、知らぬ顔をして居ては申譯がない、と云ふので自ら遠慮して松下村といふ處へ一軒家を借て、其處へ閉居いたし、讀書に口を送つてをります。

スルと或日の事、門口へ訪れた者がある。

『ご免下さいまし』

優しい女の聲なので晋作は不思議に思ひながら、

『何誰だ』

と立出て見ると、意外にも其處に立てゐるのは、おうのでございました。

『オウ、うのか、どうして参つた』

『お久し振でございます』

『久しく遇はん、兎に角此方へ上がれ』

『無事にご歸國、お目出度うございます』

『ウム、拙者が是にをる事を、どうして知つて参つた』

『お友達の方から聞いて参りました』

『友達も澤山ゐるが、誰だ』

『お名前は申上げられません、云つてはならぬといつてお口止めでございましたから、どうかお聞き下さいませ』

『誰か知らぬが、餘計な事を云ふ奴だ』

『旦那様がお一人で不自由だから、お前行つてお世話をしと仰しやりましたので、参りましてござります。どうぞ長崎當時同様に下女のつもりでお使ひ下さいまし』

『ウム下女か、どうも困つたな、別段お咎めはないが、自ら謹慎して當所にをるのに、お前のや

うな女を傍へ置ては申譯がない。志しだけは喜んで受けるが、どうか歸つて貰ひたい」

「イ、エ、何と仰しやいましても歸りません。此の通り風呂敷包みを持ちまして参りました」

「早手廻しの事だな、ではマア勝手にしろ」

「勝手にしろと仰しやいますのは、居ても宜いといふ事でございませぬ」

「念を押すなよ」

晋作も元々嫌ひな女ではない。且つは又炊事その他不自由をしてゐた處だから、うのが来て呉れたのを心中では喜んだといふ譯、その儘うのは晋作の閉居に居座つて、萬事の世話をしをります。

その翌日、伊藤俊輔がやつて来て、

「晋作、貴様怪しからんぞ、斯様な處へ引込んで、謹慎をしてゐるものないものだ、何だ、うのなを傍へ置いて巫山戯てゐるとは言語同断だぞ」

「イヤ俊輔、どうかそれを云つて呉れるな、誰に聞いたか突然うのがやつて来て、女中代りに働くといふのだ、私はいかぬと云つたのだが、何でも傍にゐて世話をするといふものだから……」

「コレ、惚氣を云ふな、怪しからん奴だ、早速朋友を集めて馳走をしろ」

「それは困る、どうか皆なには内緒にしてゐて呉れ」

「馬鹿を云へ、こんな事が内緒で済むものか、いつかは知れるに違ひないから、それより先に發表して終ふ方が宜い。それでなくとも朋友が皆んな心配してゐたのだ、晋作もさぞ不自由だらうから、うのでも行つてやつて呉れ、ば宜いと云つてゐるのだ、發表してやれば皆んなが喜ぶだらう」

「少し待て俊輔、貴様だな、うのに拙者の居所を教へたのは」

「あは、、、當つた」

「當つたもないものだ、困るではないか」

「マア宜い、満更困りもしなからう、マア一杯飲ませろ」

そんな工合で友達が代り々々尋ねて来る。晋作一人では食事の支度をするに云つても大變だがうのがゐるので都合が宜い、一杯飲んで酔へば必ず國事を談ずる。

おうのといふ女は、馬鹿ではないが、その中へ入つて、兎や角口出しをするやうな氣風の女ではない。晋作に取ては却つてその方が都合が宜い。

ある日、久坂義助が尋ねて来た。例の玄瑞で、此の當時は義助と云つてをりました。後には通武と改め、號を江月齋、又秋湖とも申しました。晋作が脱藩してから大分重く用ゐられ、在京當時、學習院へ出入りをして殿上方の間へ立つて頻りに活躍してをりました。そんな譯で、萩へ歸

つて来ても、晋作が閉居してゐるので、久坂が表立した仕事をしてゐました。
『高杉、豫て君とも話した事だが我が藩に於ても、兎角重臣を重んじ、輕輩を輕んずる傾きがある。今の世の中は、そんな事を詮索してゐる時代ではないと思ふ。町人百姓たりとも、志ある者はドン／＼是を引立て役立たせたら宜いと思ふ、それに就て周布の意見も聞いて見たが、やつても宜からうといふ事だが、君はどう思ふ』

『それは結構だ、私はまだ出る時でないが、貴公がやつて呉れるなら大いに賛成だ』

『就ては何といふ名が宜からう』

『さうだな、奇兵隊としたらどうだ』

『奇兵隊か、成程それは宜からう』

久坂が高杉と相談をして歸つたが、早速その事を發表すると、忽ちの間に千人以上の人が集つたといふから如何にその當時、國家を思ふ者が町人百姓の間にも多かつたかといふことが分ります。

處が京都で姉小路公知卿が、何者かの爲に殺されました。姉小路卿は殿上人の間でも就中勤皇の志し厚く、却々きけ者でありましたから、此の人がなくなると、公卿方の威氣が落る心配がある。そこで長州藩では、公卿方面に顔の廣い久坂を京都にやつた方が宜からうといふ事にな

りました。

そこで久坂義助が早速高杉の寓居を訪れて、

『高杉、モウ尊公がこんな田舎に引込んでゐる時ではなくなつた。私は是から京都へ行かなければならぬのだ』

『久坂、一體何事が起つたのだ』

『實は斯ういふ譯だ』

と久坂は、姉小路卿が暗殺された一件を物語つた。

『藩命に依つて乃公は京都へ行くが、只心配なのは奇兵隊だ、拙者が見る處、是から先奇兵隊を守育つて行く者は貴公の外にないが、どうだ、君やつて呉れるか』

高杉は一寸思案したやうだつたが、

『宜し、心得た。奇兵隊は高杉が引受けたが、京都の方は何分宜しく頼む』

『此度の大役、拙者一命を賭して勤める考へだ、次第によれば高杉、再びお身に見へる事は出来ぬかも知れぬ』

『心細い事を云ふな、貴公と私とは松陰門下の双壁と云はれ、何事も是まで共にやつて来た。是から先も手を携へて行かうと思つてゐる、首尾能くやつて歸つて来て呉れ』

『ウム、拙者とても安りに死を選ぶ者ではないが、マアそれだけの決心が附いてゐる』
 『さうか、兎に角今日は緩りして行け、何もないが、うのゝ手料理で、飯でも食つて行け』
 『さうだな、では馳走にならう』

食事を共にして久坂は歸つて行つた。そして翌日京都へ向つて出發いたしました。姉小路卿なき後の京都の形勢は頗る悪くなつて、遂に三條中納言實美卿を始め、七卿の方々が都にお在になる事が出来ず、長州へお落になる事となりました。又毛利親親も入京を禁ぜられ、京都は會津、桑名の兵に、島津藩が一緒になつて是を守るといふ。久坂は密かに宮門の内に入つて、關白に遇つて、大いに説く處がありました。その甲斐もなかつたのみならず、六月五日、會津藩士が三條の長州邸へ乗込んで、吉田年麻呂等三人を殺しました。サア長州藩の憤激は一通りでありません。

奇兵隊

それより先、井上聞多と、伊藤俊輔の二人が英國へ留學をしてゐたので、松下村の寓居へ尋ねて来る者は、品川彌二郎始め若い連中ばかりだつた。さうして世の中は益々穩かでなくなつて行く、いつまで斯うしてゐては相濟まない。近頃さういふ風に晋作も考へてゐる處なので、久坂か

ら話があると、直ぐに奇兵隊の事を引受けたのでした。

晋作が突然周布政之助の屋敷を訪れた。周布は當時長州藩の執政をしてゐて、此の人の云ふ事は大概通りました。高杉始め、久坂、井上、伊藤などが重く用ゐられたのは、いづれも當人達の才があつたからには違ひないが、一ツには周布政之助の引立によるとあります。それゆゑ若い者の間に於ける周布の人氣は大層なものでした。

『オウ高杉、遂々出て來をつたな、早速引受けて貰はう』

晋作の顔を見ると、突然斯う云つたので、晋作は面喰つた。

『ハア、何でございます』

『何だではない。貴公久坂に代つて、奇兵隊の隊長になるのだらう』

『ア、その事でございますか、今日そのお許しを受けに参りました』

『知つとるく、久坂から相談があつた。早速松下村は引拂つて本宅へ歸んなさい。妻女も待つてゐるだらう。偶には宜いが、妾の方にはばかりゐるといふ事はないぞ』

高杉晋作 何でも知つてゐるので、晋作赤面をして這々の體で引き揚げたが、愈よ松下村を引き拂つて、ご城下へ一軒家を借て、其處へおうのを入れ、己れは本宅へ久し振で歸つて來ました。雅子の喜びはその面に包みきれない程でございます。

高杉が隊長になつてから、愈よ奇兵隊は盛んになつて来た。人数も大分殖えた。長州藩には當時、御楯、遊撃、膺懲、南園などといふ種々な隊があつたが、一番後から出来た奇兵隊が最も勢ひが盛んになつた。處が前に申上げた通り、隊士は藩士ばかりでなく、百姓、町人出身の者が多いのだから、やゝともすると外の隊の者が侮蔑をする。そんな事から遊撃隊との間に大きな間違ひをした事などもありました。

所が突如晋作に對して藩から辭令が下つた。それによると、新地百六十石、政務役、奥番頭格世子公内用係、世子ご夫人裏年寄といふので、大層な出世です。そこで晋作が引込んで赤根武人といふ者を總督にして、山縣狂介(後の有朋)を副總督にしました。今まで副總督をしてゐた入江九市は、京都へ上つて久坂を助ける事になりました。

長州藩には種々な隊が出来てゐたけれども、結局は正義派と俗論黨の二ツに別れてゐて、正義派は尊皇攘夷論を述べ、俗論黨は公武合體論を唱へてゐたといふ譯ですが、既に奇兵隊にしても山縣は正義派であるのに對して、赤根は兎角俗論黨に傾いてをりました。それが爲にどうも赤根と山縣の間が旨くゆきません。一説によると、赤根は山縣の勢力に對抗する爲に、俗論黨に氣脈を通じたのだとも言ひますが、どうも此の人の評判は餘りよくありません。

遊撃隊の來島

然るに此處に容易ならぬ事が出来たといふのは前にも一寸申上げましたが、姉小路公知卿が朔平門外で暗殺をされたに就いて久坂が京都へ急行したのでございませうが、既に此の時は京都の事情がスツカリ變つて終つて、今まで長州藩が骨を折つてやつてゐた事は皆失敗に終つて、毛利親子が入京を禁ぜられ、三條公以下が都落ちをなさる。京都は幕府の同勢に薩摩が應援をして、長州兵は京都に入る事が出来ない事になり、伏見の屋敷にゐる種々交渉をしてゐるといふ始末、その中で久坂玄瑞は、松野三平と變名をして、京都へ入込み種々活躍をしてゐる。其處へ入江九市もやつて来て助ける。二人は京都に暫くゐる地理に明るいから活動をするには便利だが、どうも幕府の勢ひが強くて仕様がなない。

此の事情が長州へ聞えて来ると、サア血の氣の多い若武士は黙つてゐない。京都へ押出して強訴をしやうといふのです。面白い事には、斯ういふ事になると俗論黨の方が強硬で、正義派の方が却つて、今はさういふ時節でないからと宥めるといふ立場にありました。尤も正義派と雖も、俗論黨と雖も、國を思ひ、主君に對する忠義の點に變りはございませぬ。すると此處に來島又兵衛といふ人がある。遊撃隊の隊長ですが、まだ四十餘歳であるにも拘は

らず、自分一人で老人がつて、年下の者と見ると無暗に子供扱ひにするといふ厄介な人物、此の來島又兵衛がカン／＼に怒つて、何でも遊撃隊を従へて京都に上り、會津や薩摩の兵と一戦を交へるといふので騒ぎ出した。是には老臣方も驚いたが、來島は山口の城下へ黨の者を集めて、明日にも出發をしようといふ勢です。そこで周布政之助と桂小五郎と、高杉晋作の三人が相談の結果、高杉が貧乏籤を引いて、その鎮撫の役を受け、殿様のご書状を懐中して、山田市之允といふ少年を一人連れ、山口の城下へやつて來た。此の市之允は後に伯爵山田顯義となりました。いつも高杉が山口へ行く時には、妻の父の井上平右衛門が山口の町奉行を勤めてゐるから、其の邸へ泊るのですが、今度は上使であるから井上の處へは行かずに宿を取りました。高杉は宿で旅装を解いて、黒羽二重の衣類に鬘斗目麻上下の禮服を着用して、遊撃隊の陣所に來島又兵衛を訪ねて、上意の趣を申達した。處が又兵衛利かぬ男で、どうしても承知をしないのみならず、高杉に向つて、お前は百六十石の祿と、政務役、奥番頭、世子公ご用掛といふ役目が惜くて何にも出來ないのだらうと悪口をしました。高杉は立腹の餘り斬つて終はうかと思つたが、イヤ／＼來島とても忠義の武士だ、殿様のお歎きを思ひ、國を思へばこそ斯様な騒ぎも起り且つまた暴言も吐くのだ、堪忍しなければならぬと、宿へ歸つて來て、一夜眠らずに善後策を考へましたが、自分が萩へ歸つて、來島又兵衛が上意をお受けしませんと報告すれば、來島は只で

濟まず、又自分としても無力の非難を受けなければならぬ。此の上は京都へ行き、久坂や入江と相談をして、京都の方から來島の出發を止めるやうにしやうと、斯う決心をいたしましたから、翌朝早々山口を出發した。山田少年には、お前は萩へ歸れと云ふのですが、何でも一緒に行くといふので、據ろなく市之允を連れて伏見の屋敷へ來て、久坂がゐるかと思つて尋ねると、久坂と入江は空家のやうになつてゐる京都の邸にゐるといふから京都へやつて參りました。久坂と入江に遇つて、是までの話をする、二人は驚いて、『それは高杉、お前にも似合はん事をやつたではないか、上使が歸つて復命をせず、且つ又政務役、奥番頭役の重職にあるものが、無斷で土地を離れるといふ事は、脱藩に等しい行爲ではないか』 『等しいといふより、脱藩に違ひない』 『貴公脱藩してどうする考へた』 『途中でも種々考へたが、私も君方と一緒に京都にあつて、種々働きたいと思ふ、兎に角來島老人が出て來ないやうに、君方から書面をやつて呉れ』 『書面をやるのは宜いが、それより貴公の事が心配だ』

『マア私の事は當分打捨て置いて呉れ』
さう云つて高杉は、毛利の屋敷を飛出すと、その儘姿を何處へか隠して終つた。
そこで久坂から國表へ、今兵を京都へ差向る事は宜くないから少し待てといふ事と、高杉が脱藩して京都へ来てゐるといふ事を送りました。そこで來島等が出兵の事は一時留まつたが、高杉の脱藩は相當問題になつた。就中ご心配になつたのが世子公の長門守で、高杉を京都へ置いては何をやらかすか知れない。且つ又内用係として萬事の相談相手の高杉のゐない事は何かとご不自由であるから、早速歸つて來るやうにといふ書面をお認めになつて、近臣の山縣早之進と岡部繁之助を京都へお遣しになつた。

それより先に桂小五郎は、周布政之助に相談をして、高杉迎ひの爲に密かに京都へやつて來てゐた。さうして偶然高杉の隠れ家を見つけ留めて終ひました。

高杉はその當時祇園新地の中の、謂ば藝者屋向に出來てゐる家を借り、一人で住んでゐた。さうして土佐の中岡慎太郎など、往來して、會津の容保公か、薩摩の久光公を斬つて終はうといふので、機會を待つてゐました。

然しその計畫は、桂小五郎に出逢つた爲に遂に失敗した、といふのは、高杉の隠れ家へ、桂と久坂と入江の三人が尋ねて來て、反對をしたからです。その時久坂が、

「君の計畫も悪いとは云はん、然し君がそれを實行する事には反對だ、マア、京都の事は、私と入江に任して置いて君は早々萩へ歸つて呉れ、君が歸つて呉れば周布も喜ばれるだらう我が同志の一人が藩の重職にある事は最も望ましい事なのだから」
口を極めて説得にかゝつた。其處へ世子公のご内意もあつたので、晋作も遂に志しを願へして萩へ歸る事になりました。

野山の牢屋敷

晋作は又山田少年を連れて萩へ歸つて來た。妻の雅子は喜び迎へたが、直ぐに又心配さうな顔をして、

「貴郎、昨日父が參りました」

「オ、ご舅殿はご無事かな」

「ハイ、父が氣に掛る事を申しました」

「ホ、ウ、何と云はれた」

高杉晋作 「貴郎がお歸りになると、再度の脱藩の事ゆゑ、只では濟まぬ、何か重きお科のあるやうに老臣方が仰せられてゐると申しました」

「ア、その事か、大方さうあらうとは思つてゐた。然し心配するな、眞逆晋作に腹を切れとは仰せられまい。マア、成行きに任せるのみぢや」と、別段氣にも掛けない様子だつた。さうして一家の者と寛いで食事をしやうといふ處へ、ご上使が到着をした。それは長い文句ではあるが、結局罪の科状と列べ立て、知行没收、退役を仰せ附けられ、お名前並にお紋附の衣類等お取上げの上、野山屋敷へ蟄居、家内は親類預けといふのでございます。

是が元治元年三月二十七日の事で、野山屋敷といふと體裁が宜いが、牢獄でございます。始め晋作は獄に入ると、只黙念としてゐた。それは明日をも知れぬ身だ、何を苦しんで考へたり、本を讀んだりする必要があらうと、斯う思つたのでございますが、又思ひ返したのは、人間は七轉び八起きといふ事がある。私は今斯うして獄中にある身だが、何時ご用を承はつて、天下に濶歩する時が来るかも知れぬ。表に出れば寸時も暇のない人間だ、おうのと松下村に居る時は能く本を讀だ、あの時も謹慎中であつた。今は此の獄中にあつて、誰と語る對手もないが、その代りには本を讀む暇は充分にある。さうだ、本を讀まう。勉強をしやう、さう思ふと晋作は、直ぐに牢番に頼んで、實家から書物と紙と墨汁とを差入れて貰つた。さうして讀書に毎日を暮してゐるが、それが飽ると詩や歌、俳句などを作つて楽しんでゐた。

切れて呉れると柔かに、眞綿で首の強意見

三千世界の鳥を殺し主と朝寝がして見たい。
などといふのは皆高杉の作でございますが、いづれも情痴の世界をうたつてゐるやうで、その實國家を思ふ志士の感情を綴つたものでございます。

ある夜、晋作の獄舎の前へ、何やら言ひ争ひながら近附いて來る者がある。誰であらうかと思つて、晋作が格子の間から外を覗いて見ると、月の光に、ピカリと光つたのは、正しく劍、扱は反對黨の者が、殺しに來たのではないかと、早くも晋作覺悟を極めたが、

「晋作、晋作は何處にゐる」といふ聞覚えのある聲、よく／＼見ると、意外にも周布政之助が抜刀をして立つてゐる。月光を浴てゐるとは云へ、その顔は青い。酔つてゐるのだ、酔ふと突飛な眞似をする周布ではあるが、刀を抜いて牢屋敷へ乗込んで來るといふのは亂暴な譯だ、と思ひながら、

「晋作は此にをりますが、何かご用でございますか」
「ア、其處にゐたか、晋作貴様は此の頃本を讀んで勉強してゐるさうだな、それも宜いだらう。貴様は全體才に任して上の者をないがしろにしとる。それ故此の暑いのにそんな處へ投げ込まれて窮命するのだ、本來叩つ斬て終はうと思つて來たのだが、然しまだ是から貴様の首の入る事も

あるやうだから助けて置いてやる。だが晋作、牢内といふ處は、静で勉強するには宜い處だらう。マア五六年勉強したら、世の中が分つて来るだらう。暑いから身體に氣を付けて、死なぬやうにしろ』

言ひたい事だけいふと、サッサと歸つて終つた。晋作はその後ろ影を見送つて、ホロリと涙を零した。周布公はこんなにまで自分の身を思つてゐて呉れるのか、有難い事だ、どうか周布公の身に間違ひがなくて呉れ、ば宜いが……、

と、案じてをりましたが、矢つ張り此の周布政之助が白刃を提げて、野山の屋敷へ行た事が問題になつて、藩主も據ろなく政之助に閉門を申附ける事になりました。

周布政之助の閉門は、藩中の過激派の勢ひを増す事になつて、遂に老臣の連中までそれに動かされ、福原越後、中村九郎、來島又兵衛、眞木和泉守の人々が、兵を率ゐて京都へ押出す事になりました。

お話を變つて彼の久坂玄瑞は、姓名を松野三平と名乗つて天王寺で諸藩の浪士などを集めました。後に山崎から京に入り、會津の松平容保を殺して、親しく藩主の爲に哀訴をしようと思つて致しましたが、事遂に成らず、蛤御門の戦ひで二十六歳を一期として戦死を致しました。かくすればかくなるものと知りながらやむにやまれぬ大和たましひ

是が久坂玄瑞の辭世でございます。その最期の時は、樓上にあつて采配を振ひ、一軍を指揮してをりましたが、身に數彈を受け、最早是までと覺悟をして、腹を掻裂くと眞逆まに火炎の中へ飛込んだといふ、實に華々しい死方でございます。入江九市も此の時に戦死いたしました。高杉晋作も脱藩をした儘で京都にをれば、矢張久坂、入江等と共に此の時戦死したか知れませんが、藩へ歸つて野山の牢に入つてゐた爲、一生を得たといふ譯でございます。

井上の歸國

晋作が入獄してから、約三月経つと、歸宅を許される事になりました。然し是は放免になつた譯ではございません。父の小忠太へお預けといふ名目でございます。そこで小忠太は離れの一室へ嚴重な格子造りの座敷牢を作りまして、その中へ晋作を入れ、外部との交渉は一切斷つて終ひました。

此の離室は六疊に三疊の二間で、六疊の方が座敷牢になつてゐるが、次の間の三疊の方には小道具などが置いてあつて、時々妻の雅子が来ては種々用をたして呉れるし、又藩中の消息なども聞かして呉れます。嚴格な父の小忠太は、晋作が歸つて來ても、一遍も面を合せません。始めて野山から歸つて來た時、晋作は風呂に入り、雅子が忠實しく背中などを流して呉れ、小

サツバリした着物に着替えさせて貰ひ、又髻を剃り、髪を結直して貰つた時には、眞正に蘇生をしたやうな氣持がしました。それから以後は、毎日書物を読んでゐるのが日課で、妻の外は、誰一人訪ねて呉れる人もありません

ある日、雅子がそつと来て、

『旦那様、只今井上様がお見えになりました』

『ナニ、井上、井上と云つて誰だ』

『聞多様でございます』

井上聞多は、伊藤俊輔と一緒に去年から英國のロンドンへ行つてゐる筈なので、怪訝に思ひながら、

『聞多が歸つて来たのか』

『左様でございます。伊藤様も一緒にさうでございます』

『さうであつたか、懐しいな』

井上様は、貴郎にお遇ひになりたいと仰しやいましたが、お父上が謹慎中だからと云つてご承知になりません』

『さうか、どうも據ろない』

さう言ひながら晋作が、又前の書物に目をやつた時に、突然父の小忠太の聲が響いて来た。

『聞多殿、掃除も近頃は行届かんが、マア庭内を緩り見て下され、今は萩、桔梗などが盛りでござるから』

『忝けなう存じます。暫らく外國にをりまして、彼方の庭も種々見て参つたが、矢張り趣のあるのは日本の庭でござる。何とも云へぬ懐しみを覺えます』

『ご自由にご覽下さい。拙者は一寸調べかけた物もござるから失禮いたす』

父は母家の方へ戻つて行つた。それとなく晋作に逢はせやうといふ父の情に違ひない。雅子は晋作と顔を見合して、ニツコリ笑ふと、黙つて立つて行つた。

離れの前へ立留つた井上聞多が、エヘン、エヘンと咳拂ひをした。晋作は立上つて、障子をサラリと開けて、

『聞多か、久し振だな』

『お、其處にゐたか』

『種々話たい事もある。又聞きたい事もある。マア此方へ入れ』

『入れと云つても、格子造りではないか』

『グルリと廻ると入口がある』

「さうか」

聞多が廻つて来ると、三尺の出入口があります。其處へ履物を脱いで上ると、三疊の座敷、六疊の入口には格子の入口がある。錠はお雅が外して行つたから。開いて中へ入つて、

「是は却々面白い座敷だな」

「ウム、盗難の恐れがなくて、用心が宜いぞ」

「アハ、、、」

兩人は聲を立て、笑つた。

「サア、此方へ来なさい。どうだ、外國の事情は、何を勉強して来た」

「イヤ勉強は是からと云ふ處で、急に歸る事になつた」

「伊藤も一緒か」

「一緒だ」

「然し、何で急に歸る事になつたのだ」

「晋作、實はな、彼國には新聞といふものがあるのだ、日々の出来事や、政府の方針などが、細大洩さずに出てゐるのだ」

「成程」

「それを見ると、英、佛、米、蘭の四ヶ國が、聯合艦隊を組織して、下關を襲撃する事になつたといふ事が出てゐるのだ」

「フーム、それは一大事だな、然し我が國を襲ふのに、何も四ヶ國聯合でやつて来る程の事はあるまいと思はれるが」

「サア其處だ、此の四ヶ國は何れも我が國を狙つてをる。それ故どの國が抜がけをする事も出来ないやうになつてゐる。それ故聯合といふ事になつたのだが、それを知つては我々安閑として勉強などをしてはをられんではないか、そこで伊藤と相談の上、直ぐに便船を求めて、注進の爲に歸つて来たのだが、高杉、お前はまた聞かんたらうが、我が藩の軍は、京都で敗戦をしてゐるさうではないか」

「エ、ツ、敗戦……我が藩が何處と戦つてゐるのだ、福原、眞木、來島の人々が、哀訴の爲に京へ乗込んだは聞いたが、戦争などといふ事は聞かん」

「その哀訴も失敗に終つたのだ。會津や薩摩の兵が邪魔をして、京へ入る事が出来ぬ。それを何でも入らうといふので、眞木和泉守と久坂玄瑞が八幡山崎、福原殿と來島又兵衛が伏見街道、國司殿は嵯峨、益田殿は山崎の後備へとなり、幕府軍と戦ひを交へたのちやが、對手は目にあまる大軍の爲に、遂に戦ひ破れ、來島又兵衛は討死、久坂も寺島忠三郎も入江九市も、眞木和泉守も

天王山や、蛤御門や、九條公の邸内で討死を遂げたといふ事だ」
 「ウーム、久坂も死んだか、入江も死んだか」
 「あたら勇士に犬死をさせたのは、返すくも残念ぢやな」
 「残念だ、來島も元氣な爺だったか……」
 「若殿も吉川殿も、途中からお歸りになるとの事ぢや」
 「此の騒動の最中に、今貴公の云ふ四ヶ國の聯合艦隊でもやつて來たら、藩の人々はどうする考へだらう」

『それを私も心配してゐるのだ』

『ア、私も斯うしては居られんやうな氣がする』

『然し晋作、短氣な眞似はするなよ、お父上や妻女の身を思つて』

『それは大丈夫だ、何分のお沙汰のあるまで斯うしてゐやう』

『それが宜い。私は又來る』

『さうか、伊藤に逢つたら宜しく云つてくれ』

井上聞多はソコソコに歸つて行きました。

聯合艦隊の來襲

井上と伊藤が歸國すると間もなくそれを、追掛けるやうに、英、米、佛、蘭四ヶ國の艦隊がやつて來て、姫島に碇泊をし、砲口を向けて、今にも撃放さうといふ勢ひを見せた。サア長州は上を下へといふ騒ぎだ、その内に外國の水兵が上陸しやうとする。それをさせまいとするので小競合が起つたが、結局前田壇の浦の砲臺を外國兵の爲に占領され、防戦に出てゐる奇兵隊も清水越まで退却をしたといふ注進がある。山口の城内では、連日連夜評議をしてゐるが、結局腹背に敵を受けてはやりきれないから、此の際幕府と和談をするか、外敵と媾和をするか、何方かを選ばなければならぬといふ事になりました。然し頑固な連中は口を揃へて云ふ、

『外敵と和談を結ぶなどといふのは以ての外だ』

當時周布政之助は閉門ご免で此の席にゐるが、

『それでは幕府と和睦をするか』

『イヤそれもならぬ』

『それもならぬ、是もならぬでは仕様がな。一時外國と和睦して置いて、國內の始末を附け、その上外國と戦ふやうにしたらどうだ』

といふ周布の一言に皆なも折れて、
『ウーム、どうも仕方がないな』

そこで幕府と交渉の済むまで、一時外國と和睦をする事になつたが、さてその和睦の話を持つて行く人間に困つた。大藩にあつても、役に立つ人はさう澤山ないと見えて、誰にしやう、彼にしやうと種々詮索の結果、斯ういふ事には、高杉晋作が適任だがと周布が云ふ。

『然し晋作は、野山の牢から自宅へ移されたとは云へ、今猶謹慎中でござるからな』

『それには違ひないが、此の非常な時に、左様な事は云つてをられん、彼の如き傑物をいつまでも押籠めに致しておくのは宜しくない早々罪を許してご用を申附けたが宜しいではござらぬか』
『罪を許すと云つても、謂れなく罪を許す譯にはなるまい。今度のご用を勤めた上、その功に依つてお許しになつたら宜しからう』

『それは何方でも構はんが、罪人に大切のご用を申附けるといふのは宜しくない。萬一他へ聞こえた場合に當家の不面目に相成る』

『然らば斯う致したら如何ぢや』
と、又一人が口を出して、

『無位無役の高杉晋作が掛合に参つたのでは先方も却々承知を致すまいと心得る。依つて一番家

老穴戸備前殿の養子といふ事に致して、架空の人物を此處へ据へるのだ、さすれば他家へ聞こえても宜し、又先方にも信用いたさうと心得るが……』

『成程是は名案だ、如何でござる穴戸殿、お差支へござらんか』

『お家のお爲になる事なら、手前に於いては少しも異存はござらん』

『それでは早速晋作を招いで……』

といふ事になつて、お使ひ番が高杉小忠太の屋敷へ飛んだ。

『山口からお召しぢや、大殿よりのお召しぢや、早速支度を致さねばならん』

父の慌しい聲が、母家の方から響いて來たが、晋作は自分の事ではないと思つて、獄中日記の手入れをしてゐました。其處へ妻の雅子が來て手を仕へて、

『只今、山口よりのお召しにございます。早々お支度を遊ばしますやう』

といふ、晋作は猶不審さうに、

『お召しは、お父上であらう』

『イエ、貴郎様でございます』

『ナニ、私がお召し、罪人の私が……』

と云つたが、井上聞多の話を聞いてゐたので、聊か思ひ當る節がある。

「さうか、直ぐに支度を致さう」

お雅の心盡しで、此の頃は髪も亂れぬ程度にしてあるので、直ぐに母家へ行つて支度をする。處へ珍らしく父の小忠太が顔を見せて、

「晋作、如何なるご用か分らぬが、身命を抛つて働きなさい」

と、厳格に言ひ渡したが、何となく嬉しさう。晋作は無言の儘黙禮をした。

晋作は上下姿で、駕籠に乗ると、山口の城内へ乗込んで来た。諸役人が詰てゐて、何となく騒がしい、晋作は直ぐに表書院に通され、重役列席の處で、ご用の趣を申附けられた。

晋作は怨み重なる幕府を討たう、それには今外國と戦ひを交へる時でない、又戦つた處で逆も勝つ見込みはない。さう思つてゐた際なので、考へるも何も無い。

「委細承知いたしました」

一言の下に引受けて終つた。家老衆は頼母しさうに晋作の面を見ながら、

「就いては、此のご用相勤める間、一家老衆、備前殿養子刑馬と名乗るよう」

刑馬より桂馬の方が面白からうと腹の中で笑ひながら、

「委細承知いたしました」

そこで相當の手當金が下つた。副使として、渡邊内藏太と杉篤輔、通譯として井上聞多と伊藤

俊輔 以上が此の一行の顔觸で、任命と同時に急使は前線へ飛んだ。

既に此の時は外國の軍艦と、長州藩との間に戦ひが始まつてゐた。まだ外國船が姫島にゐた時に、伊藤俊輔が命を受けて、示談に出掛けると、此の時早くも外國船は碇を上げて、馬關の方へ行つて終つた。そこで今度は井上聞多と前田孫左衛門とが馬關に乗込んで、イザ是から交渉に掛らうといふ時に、外國船が發砲して来た。味方の方でも是に應戦するといふ譯で、遂に談判にはならぬとして戦争が始まつて終つたから、井上も手を空しくして山口へ歸つて来たといふ譯でござります。その内に外國船の砲撃は烈しく、馬關などは大分火事になつて、その騒ぎは大變。その應戦の主隊は、毛利家の分家の長府藩で、山口から出掛けて行つた奇兵隊や何か、應援してをりました。

若殿長門守殿も小郡まで出張して、督戦をする事になつたのですが、戦ひは愈よ結果が宜しくないで、遂に和談となつたのですが、従前外國側から申込んで来てゐる事は、開港貿易、薪水供給、水兵の上陸等でありましたが、今度戦争をして負たとなると、先方の條件が殖える事は分つてゐる。それを成べく味方に有利に話を附けなければならぬのだから、交渉員、しかも正使たる高杉の役目は却々に重い譯です。

高杉等は先づ小高い山へ登つて、敵艦隊の陣容を眺め、更に味方の備へを眺めたが、

「井上、伊藤、是では迎も戦にはならん。味方の者が皆な犬死をしなければならんではないか」
井上も伊藤も、現在外國の事情を見て來てゐるので、同感でしたが、杉や渡邊には、餘り能く外國の事情が分つてゐないので、そんなに外國の軍艦は恐ろしいものか、といふやうな顔をしてゐる。スルト伊藤が、

「高杉さん、拙者が一人先へ乗込んで、先方の長官へ面會を交渉しませう。それに先方が應じないやうなら歸つて來るが、面會をするやうなら、空砲を一發撃たせますから、さうしたら直ぐに乗込んで來て下さい」

「さうだな、ではさうして貰はう」

そこで伊藤俊輔は小舟で敵の旗艦へ乗附けたが、間もなく、空砲が一發響いた。

「ソレ乗出せ」

と、高杉と副使二人、井上の四人が漁船に乗つて漕ぎ出した。さうして段々軍艦に近附くにつれて、先方のいかに大きいか目に驚かした。

聽て高杉等の船が、軍艦の昇降口へ横附けになると、甲板から見下してゐる伊藤俊輔と、それと列んでゐる長官らしい人の顔が見えた。

水師提督も、伊藤が勿體らしく、

「藩主の名代として、一番家老の養子宍戸馬殿がお出でになる」

と申入れたので、態々出迎へたのですが、愈よ談判になると、先方の鼻息が却々荒い、償金を出せとか、お臺場に備へ附けの大砲を引渡せとか種々の事を言ひ出した。結局明日正午までに返辭をするといふ事にして引揚げて來て、重役に報告をする。是から又重臣會議といふ事になりました。

處が此の會議の模様を洩聞いた連中が、高杉らがまづい談判をして來たといふやうに取つて、暗殺をしようといふ相談を始めました。それを又重役等が取鎖める手段を何も講じてゐないと聞いて高杉も伊藤も腹を立て、逐電をして終つた。井上は一人馬關に残つてゐたので、此の仲間へは入らなかつたが、驚いたのは重役連中で、明日返辭をするといふのに、正使と通辯が二人消えて終つては困る。仕方がないから取敢ず翌日は、毛利登人を家老といふ事にして、井上を附けて、外國船へ赴むかしたが、晋作をスツカリ信用して終つた水師提督は、宍戸殿でなければ話に應じる事が出來ないと云つて、テンデ交渉をしない。斯うなると、どうしても高杉を探し出さなければならぬ。スルト幸ひな事に、井上の處へ高杉から手紙が來た。船木の在の有帆村といふ處の田舎家に隠れてゐる事が書いてあつた。そこで井上が若殿の命を受けて、高杉と伊藤の處へやつてきて、

『どうも高杉、外國と交渉中に正使の貴公がなくなつては困るではないか』
『それは分つてゐるが、分らずや共が我々を殺さうとしてゐるさうだ。大切の身體だ、犬死はしたくないから逃げて来たまでだ。又それを取領めやうともしない重役共を、困らしてやるのも悪くはないから』

『然し若殿はその邊能く分つてお出になる、氣の毒だが高杉に是非歸つて此の解決を附けて貰ひたいといふ仰せだ、又亂暴者は充分取締るといふ仰せだ』
『さうか、それでは歸らう』

といふ譯で、漸く高杉が現れたから、重役連もホツとした。そこでその翌日、高杉がまた杉、渡邊、井上、伊藤の四人を連れて外國の船へ乗込み、激論の結果、都合の悪い事は皆な幕府の命令といふ事にして漸く解決調印を終へ立戻りました。

長州征伐

外國談判が一段落告げると間もなく、幕府は尾張大納言慶勝公を總督として、三十八藩の大小名に命を下し、長州征伐を決行する事になりました。

サア驚いたのは長州一藩で、上を下への騒動、

『三十八藩の同勢が何だ、烏合勢ではないか、長防ヶ國の兵が一致して應戦すれば、少しも恐れる事はない。長州兵が京都へ向つて發砲したのは宜くなかつたが、是とも忠義無二の我が殿を罪なきに朝敵の汚名を被せて、京都から追出したからだ、朝敵の汚名は寧ろ彼等につくべき筈だ、幕府の大軍を討破り、速かに皇政復古の旗を立てべきである』

正義派の連中は斯ういふが、恭順黨と稱する輩は、

『此の際一步過れば、元就公以来の名家たる毛利家の存亡に關はる。元來周布政之助を始め、過激派の連中が宜しくない。今までの重役を追拂つて、恭順黨を以て政治系の役人を組織しろ』
斯ういふ反對の意見を立てた。意氣地のない重臣が此方に加擔をした爲に、外國船以來活躍をしてゐた周布政之助に再び謹慎を命じました。土臺癩癩持の周布は憤慨して、遂に切腹をして終ひました。是は正義派の人達にとつて大打撃、處へもつて来て井上聞多が、恭順派の壯士に要撃されて、身に數ヶ所の傷を受け、危うく一命を取止めるといふやうな始末。福原、益田、國司の三家老は職を免ぜられて、徳山藩へお預け、宍戸九郎兵衛、中村九郎、毛利登人、前田孫左衛門、山田右衛門、渡邊内藏太、橋崎彌八郎等、何れも職を取上げられて、親類預けとなりました。是を聞いて高杉晋作は、天を仰いで嘆息を致し、
『井上がやられるやうでは、今度は乃公も危ない。伊藤俊輔も何處へか姿を隠したといふが、周

布先生が亡き後は、我々の身を庇護してくれる重役もない譯だ。なす事もなく愚圖々々してゐて、若し恭順黨の奴等にも狙はれたら、命が危うい、死ぬのは少しも恐ろしくないが、久坂や來島等の同志が戦死して終ひ、若しも乃公が死んで終つたら、誰が先に立つて長州藩を正しい道に導く事が出来るだらう。さうだ、脱走だ、乃公が今脱藩をしたら、父に迷惑が掛るか知らんが、それも仕方がない。脱藩しやう』

斯う覺悟を極めまして、父にも妻の雅子にも何も云はず、近所へでも行くやうな態をして、我が家を立出でましたが、迂濶に歩いてゐると危険ですから、田舎の神主が萩の城下へ買物にでも来たやうな風に装ほいまして、垢じみた手拭で頬被りを致し、刀の柄に香油の壺をぶら下げ、萩の城下を立出でた。是が元治元年の十月二十五日の事でございます。

山手へさし掛つて来ると、向ふから大きな武士が三人連で、何か高聲で話ながら来る、晋作がヒョイと見ると、高野、池内、山添といふ何れも俗論黨の連中だ。悪い奴等に出遇つたと思ひましたが、隠れたり何かすると却つて怪しまれると思つたから、態と緩り歩きながら三人と摺違ふと、向ふは話に夢中で、少しも氣が附かず、行過ぎて終ひました。

井上聞多は、一時は命も危い程の重傷であつたが、幸ひに醫者の手當が行届いて、今は山口城下のある家に養生をしてをりました。其處へ晋作が訪ねて行くと、聞多は大きに喜んで、

『高杉、能く来てくれたな、然し危ないから氣を注げる』

『聞多、酷い目に遇つたな、能くそれでも助つたな』

『私もモウ駄目かと思つたが、天の助けで、不思議と助つたのだ』

『正義派は殆ど全滅だな』

『それだに依つて、貴公は一層身體を大切にしてくれなければいかん』

『實は井上、お前に別れに来たのだ』

『といふのは』

『福岡方面へ脱走しやうと思ふのだ』

『また脱走か、貴公の脱藩は是で三回目だぞ、然し今日の藩の状態では、それも宜からう』

『今までの脱藩とは聊か意味が違ふ、空しく當所に足を留めて、大死などをしたくないからな』

『分る、貴公の心持は能く分る』

『マア暫らくの間貴公等にも別れる、充分養生をして、時機到來を待ち給へ』

『ウム、私も此の傷が癒つたら、一時何處かへ身を隠す心算である』

『さうしろく、それでは井上、さらばだ』

『氣を注げて行けよ』

見送る目にも、見返す眼にも、一滴の涙
高杉が何で博多に落る事に決したかと申しますと、博多藩の中村圓太といふ者があります。是
は勤皇の士で、博多藩の方針に不満を抱いて、藩を脱し長州へ参つた時に、高杉はまだ奇兵隊長
をしてゐたので、中村圓太を救つた事があります。その圓太が三田尻で同く勤皇の士大和浪士の
北島治房に逢つた時、治房が、

『今幕府では長州征伐の兵を起した。それが爲長州では俗論黨が巾を利かして、正義派の連中は
周布始め失脚をしたさうだ。高杉氏も長州にゐると危険であるから九州へ落して、再起を計られ
るやうに君から勧めたら宜からう』

と云つたので、成程と思つて圓太は、高杉の處へ書面を送つて、その脱走を促した事がありま
す。それから再三高杉と中村との間に手紙が往復し、萬事の手筈が極であつたので晋作が井上聞
多にも、博多へ行くと話した譯です。

博多入り

富海の海岸から船を雇つて、下關へ着き、此處から少し離れた處に竹崎といふ處があります。
其の竹崎の郷土に白石正一郎といふ人があります。此の人の舍弟は廉作と云つて、澤主水正の生

野銀山の旗上げの時に働いた位兄弟揃つて勤皇家でございました。其處へ晋作が尋ねて來た。
豫て中村圓太と打合せがしてあつて、中村は油江町の桶久といふ宿屋に泊つてゐるが、其處へ
行くのは人の目に着いて蒼蠅いから、白石の處へ來た譯です。白石には豫て中村から話があつた
と見えて、高杉の顔を見ると、直ぐに桶久の圓太の處へ知らせました。

白石は珍客として高杉を迎へると、直ぐに風呂を立て、入れ、酒肴を取揃へて待遇をする。丁
度此の白石の處へ、久留米の有志の淵上郁太郎といふ人が來てゐた。それに正一郎の舍弟の廉作
や、大庭傳七などが同席して、種々話がはづんでゐる。處へ中村圓太がやつて來ました。

『白石さん、お使ひを態々有難う。ヤア高杉先生、遂々やつて來られましたな』
『中村さん、種々と盡力忝けない。此の末とも何分頼みます』
『承知しました。及ばすながら骨を折りませう』

正一郎が持つてゐた盃を圓太にさしながら、

『中村さん。貴方高杉さんを博多へお落しするといふが、どういふ計畫があんなさる』

『計畫……イヤ計畫も何もない。私がお案内をすれば、どうにかなる』

『貴公博多へ歸んなさる氣か』

『イヤ、歸るといふと誤弊がある。只先生をお案内するまでだ。さうして私は又直ぐに此方へ歸

つて来るかも知れん』

『兎に角貴公はお尋ね者で、博多へは迂濶には入れない身の上ではないか』

『仰しやる通り、破獄脱藩の罪人、役人に捉まつたら、マア／＼命はなからう。然しそんな事を恐がつてゐては何事も出来まい。第一私の命より、高杉先生の命の方が大事だと思はつしやらぬか』

『成程、さう云へばそれに違ひない』

『それに違ひないとは酷いな、兎に角私が行かなかつたら、高杉先生お困りだらう』

『イヤ、貴公が行つてくれれば、それに越した事はない』

それを傍で聞いてゐた淵上と大庭傳七が、

『高杉先生、我々もお供を致しませう』

『それは結構だ道中賑かて宜い』

是が十月二十九日の夜の事で、三日ばかり此處で休養をして、十一月二日の早朝乗船を致し、四日の夜博多の港へ到着いたしました。

翌朝中村は他の人達を船に止め置き、自分一人深編笠に表を隠して上陸いたし、上鍋町の、石藏屋卯兵衛といふ魚問屋へやつて来た。石藏屋は對州方面でとれる魚を一手に引受けて商つてゐる。

魚屋ではあるが、俠氣の人で人に頼まれれば厭といふ事を決して云はない。中村圓太なども随分世話になつた事があるし、勤皇の士で、石藏屋に助けられた者も尠なくありません。其處へ中村がやつて来て、

『許せよ。コレ／＼主はゐるか』

『へエ、何誰様でございます』

『主がゐるなら逢ひたい、逢へば分る』

『あゝさうですか、一寸お待ちなすつて』

時々斯ういふ人物が尋ねて来ると見えて、店の者は強て名を尋ねやうともせず、是を卯平に取次ぎました。卯平が店前へ出て来て、

『エ、何誰でございます。石藏屋卯平に用があると仰しやるのは』

『オウ石藏屋、久し振だな、拙者だ』

傍へ寄つて笠の中を覗き込んだ卯平が、

『オウ貴方でしたか、ご無事でお目出度うございます。サア／＼お上がり下さいませ、此處ではお話が出来ませんから』

奥へ通つて卯平が、

「マア中村の旦那、どうなさいました」
「石蔵屋、その節は種々お世話になつたが、今度またお前を男と見込んで頼みたい事があつて来たんだ」

「へエ、何でございます。男と見込んで云はれると、厭だとも云へねえが、どんな事です」

「お前知らないか、長州の家來で高杉晋作といふ方を」

「知つてますよ。有名な方ですね、奇兵隊の大將か何かで」

「以前は奇兵隊の隊長をしてをられたが、今はさうではない、お氣の毒なお身の上になつてゐるその高杉殿をお前の處へ少しの間圍まつて貰ひたいのだが、どうだらう」

「へエ、どういふ譯でお氣の毒なお身の上になつたんで」

「その仔細といふのは」

と、手短かに是までの話をして、

「どうだ、引受けてくれまいか」

「へエ宜うございますとも、さういふ豪い方なら喜んでお引受け致します。是が主人の金を盗んで来たとか何とかいふ悪い奴ならご免蒙りますけれども」

「拙者に限つて、そんな悪人に知合はない、では頼んだぞ」

「マアお待ちなさい。引受けるからには、誰に調べられても、尻尾を押へられねえやうにして置かなければやアならねえ、斯うしませう。私はご承知の通り、對州の魚ばかり扱つてゐる。それが爲に對州藩の方にも大分お知合があります。高杉様も一ツ對州藩といふ事にしやうぢやアありませんか」

「成程それは結構だ。高杉殿と、お供をして来た大庭傳七といふ方だが、此のお二人を對州藩として預つてくれ」

「畏りましたが、それで貴方は」

「私は當地に愚圖々々してはをられん。早速何處かへ立退く筈だ、又暫く足を留めるにしても、お前の處には厄介にならん。モウ一人長州から来た淵上郁太郎といふ人があるが、此の人も何處か他に知合があつて其の方へ行かれるさうだ」

「さうですか、マア日が暮たら連てお出でなさい。明るい内はいけませんよ」

卯平が引受けてくれたので、中村圓太は喜んで船へ歸つて来て、此の話をしたから、高杉も大に喜びました。

そこで夜になると、中村が高杉を始め三人を同道して、石蔵屋へ参り、卯平に引合せる。晋作は丁寧に挨拶をして、

「日蔭の身の上、何分宜しくお願ひ申す」
「是ア恐れ入ります。お引受けしたからは決して指一本差させやアしませんから。ご安心なすつて下さいまし」

淵上、大庭の二人も初対面の挨拶をして、是から酒宴を開きましたが、思ひ出したやうに立上つた中村が、

「それでは拙者は一寸行つて参る」

「中村さん。今から何處へ行つしやるので、モウ遅いから明日になすつたら」

「イヤ拙者は夜遅い方が安心して歩ける。高杉先生始め各々、一寸行つて参ります」

高杉は、中村が自分の爲に種々奔走してくれるのだから早くも察したから。

「ご苦労だな、氣を付けて行きなされるやうに」

無言で頷いた中村は、石蔵屋の裏口から立出でた。

深夜の客

石蔵屋を立出でた圓太は、彼方へ廻り、此方へ廻り、様子知つたる博多の城下であるから、巧みに城下の關門を避て、福岡谷といふ處へやつて來ました。此處に親友の月形洗藏といふ人が

る。塀を乗越へて、案内知つたる家ゆる、庭を抜けて、奥座敷の雨戸をドン／＼と叩いた。斯うすれば家人に知られる恐れはない。

「ご免、月形氏、此處をお開け下さい」

月形といふ人はまた無妻で、妹のお梅といふ確り者が次の間に寝てゐるが

「兄上、何誰か見えたやうですが、如何いたしませう」

「さうだな、開けて見なさい」

「長りました」

お梅は懐劍を帯の間に挟むと、左の手に雪洞を持つて廊下へ出て來た。

「何誰でございます」

「深夜推参いたして申譯がござらん。決して怪しい者ではござらんからお開け下さい」

満更怪しくない事もない。夜中に塀を乗越へて入つて來る男だ。

お梅が棧を外して、雨戸を開け、雪洞を突出して見ると、頭巾で頭を包んだ男が立つてゐる。

「何誰でございます」

次第に依つたらと、右手に懐劍の柄を握つてゐる。と、頭巾を靜に脱つて、

「お梅殿、夜中推参いたし、お夢をお驚かして申譯がござらん。手前でござる」

又ツと顔かほを突出つぎだしたのを見ると、中村圓太なかむらゐんただ。

『オウ貴所あなたは……』

『お兄上あにうへは何れに』

お梅うめは無言むげんの儘まま、一寸顎ちよつとあごで方角はうかくを示しめた。

『ご免めん』

草履ぞうりを脱ぬいで、廊下らうかへ上がり、ミシ／＼と洗藏せんざうの寢所しんしよの方ほうへ来る。

洗藏せんざうは、耳みみをすましてゐるが、お梅うめが別に聲こゑも立たてず、客きやくが廊下らうかを傳つたつて来る様子ようすに、別に怪あやしい者ものではないと思おもつたが、エヘンと咳拂せきばらひをして、

『誰たれだ、深夜無断しんやむだんにて構かまへ内ないへ忍しのび入り、又主人またしゆじんの許ゆるしも待またず、家いえの中なかへ侵入しんにふする無禮者むらいもの、次第だいいに依よつては一刀たうの下もとに斬きつて捨するぞ、誰たれだ。名なを云いへ』

『イヤ無禮むらいの段だんは重々ちゆうぢゆうお詫わいたす。先まづご免めんあれ』

と言いひながら、襖ふすまを開ひらいて月形つきがたの寢所しんしよへ入はいつた。洗藏せんざうは行燈あんどんの燈あかりにジツと見みて、

『何なんだ中村なかむらではないか、どうしてやつて來きた』

『ご無沙汰ごぶさたを致いたした。いつもお變かはりなく結構けつこう』

『いつ博多はかたへ入はいつた』

『イヤ今來いまきたばかりだが、少すこし相談さうだんがある』

『何なんだ』

『長州ちやうしゅうの高杉たかすぎが俗論黨そくろんたうに狙ねらはれて、身邊みへんが危あやういから、案内あんないをして來きたのだが、何なんとか圍かこまつてやる方法はうほうはないだらうか』

黒田藩くろだはんの内うちにも矢張やは勤皇黨きんわうたうと佐幕黨さまくたうの二派にわに別わかれてゐて、それが爲ために藩はんの方針ほうしんなども矛盾むじゆんした、點てんがあります、此この月形洗藏つきがたせんざうや、早川養敬はやかはやうけいなどといふ人達ひとたちは、頗すこる勤皇きんわうの念ねんの強つよい人ひと、中村なかむらとは能よく話はなが合あふが、圓太まんたのやうな無茶むちやな真似まねはしないから、藩はんでも相當さうたうの地位ちゐにをります。

『イヤ長州ちやうしゅうの俗論黨そくろんたうが勢いきほひを得えて、正義派せいぎはの人達ひとたちの身みの上うへが危あやういといふ事ことを聞きいてゐた。高杉たかすぎのやうな人物じんぶつに若もしもの事ことがあつてはならん。能よく案内あんないをして來きた。早速さつそく早川はやかはとも相談さうだんして、悪わるきやうには計はからはんから安心あんしんしなさい』

『忝かたじけない。實じつは高杉たかすぎを案内あんないはして來きたものゝ、是これといふ思案しあんもない。若もしも尊公そんこうに斷ことられたらどうしやうかと思おもつてゐた』

『シテ、高杉氏たかすぎしは今何處いまどこにお在いなさる』

『石藏屋卵平方いしくらやうへいひかたへ一先まづ案内あんないをして置おいた』

『あの男をとこなら快こころよく引受ひきうけたらう。高杉氏たかすぎし一人ひとりか』

「大庭傳七といふ男が供をして来てゐる」
「さうか」

「久留米の淵上郁太郎も一緒にやつて来た」

「オウ淵上も来たのか、あの男は此の前早川と一緒に、對州の平田大江を、九州諸藩聯合の事に就いて説きに行つたが、その後姿を見せなかつた」

「當藩の俗論黨はまた目が覺ぬか」

「彼等の申する處は、豊臣家滅亡以來、當家存亡に關するやうな場合があつても、能く徳川が庇護してくれた。その義理があるから徳川に弓は引けんと云つてゐるのだ」

「一應は理屈でも、それは私事、高所よりは是を見れば、取るに足らん愚論だ、眞に天下の爲を思へば、尊皇に努めなければならん。それが又眞の忠義だ」

「何を云つても今の處彼等には分らん。兎に角疲れてゐるだらう。酒の支度をさせるから、一杯飲んで寝なさい。コレ、梅、酒の支度をしなさい。……ナニ着がないと、着なんぞは要るものか左様な上等のお客ではない」

「アハ、、是はご挨拶だな、お梅殿、いつもお美しいな」
「マア中村さんが、お世辭の宜しいこと」

「圓太も諸方居候をして歩いたと見えて、大分世辭が旨くなつたわい、アハ、、」

お梅が酒を温めるのを、二人で二三本飲んで、

「では圓太、私は早川の處へ相談に行つて来るから、お主は寝てゐなさい、梅、態々床を延べるには及ばん。私の空床へ入れてやれば宜い。寝衣だけ出してやれ」

「畏りました」

「ご苦労ぢやな」

「ナニ、、是も天下のお爲ぢや」

月形は衣類を改めると、お梅の點けて出した提灯を持つて出て行く、中村圓太は、當分此處へ居候をする事に極た。

月形と早川は又無二の親友で、何事も相談してゐる間だから、深夜ながらやつて来て、此の話をする、それでは兎に角夜が明たら高杉を訪ねて、逢つて見やう、といふ事になり、又何かの用があるかも知れんからといふので、帯谷次平といふ者を誘つて行く事になりました。是も名代の俠客で、月形、早川と心を合せ、勤皇の爲に働いてをります。

高杉晋作
そこで夜が明てから、三人が石蔵屋の前まで来ると、中から出て来たのが、福岡下名島町にゐる高橋屋正助といふ、藩の目明し役をしてゐる男だ、是も有名な俠客ではあるが、目明しの親

高杉晋作

分だけに三人が此の場合一寸躊躇をした。

「オヤ月形さんに早川さん、帯谷も一緒に何方へお出でになります」

「一寸其處まで……」

「ちやア矢ツ張石蔵屋へ行かつしやつたんでせう。長州の方にお逢ひなさりに……ナニ驚く事はありませんよ、私も今お逢ひ申して来たんですから」

「お前は又それをどうして知つたのだ」

「今度お供をして来た大庭傳七といふのが一寸私の引掛りの男なんで、昨夜その傳七から私の處へ使をよこしてくれました」

「ア、さうであつたか、外ならぬお前の事だから、心配はないが、戒べく人に知らせまいといふ際だから、どうか悪く思はないでくれ」

「私だつて、旦那方だからベラ〜喋舌るんですが、役目の手前、是が世間へ知れちやア大變で」

「大きにさうだな、では又何かに就いて聯絡を取るやうに致すから」

「萬事宜しく願ひます」

「帯谷、突然に我々が伺つて、又ご迷惑になるやうな事があるといかぬ。お前先行つてお話を

高杉晋作

して来てくれ」

「畏りました」

帯谷次平が一人石蔵屋へ行つて、高杉に逢ひ、月形、早川の来た事を知らせると、どうぞお出で下さるやうにといふ返辭、そこで月形、早川の二人が、石蔵屋の奥座敷へ来て、高杉と初對面を致しました。

高橋屋正助は、その場から歸つて終つたが、此の正助といふ人物は、此の京都の成就院月照が藩府の追捕の手から逃れて、博多へ来た時に、自分の家へ匿まつて置き、後に平野次郎國臣と謀つて、月照を薩摩へ逃したといふ義侠の人物、此の高橋屋が味方であつた爲に、高杉も何かと便宜を得ました。

月形は、昨夜深更に中村圓太が尋ねて来た事から、早川とも種々打合せ致して、出来るだけのお世話を事にしたから、どうか安心してくれと話をする、高杉も、

「此度は種々中村圓太氏のお世話に相成つたが、先生方にお目に掛り、益々心強く感じます。何分此の末とも宜しく願ふ」

といふ挨拶を致しました。月形も早川も、高杉の名前は豫て聞いてゐたが、始めて逢つて見てその人物に感じました。

それから月形、早川は折々石蔵屋に高杉を尋ねて来る。又勤皇黨の人々には、それとなく話をしたから、代るく晋作を尋ねて来るやうになりましたが、武士が出入りをして、元々石蔵屋は、武家の出入りの多い家でありましたから、さのみ世間から注目をされるやうな事もありません。

髪結喜八

スルと此の石蔵屋へ出入りをしてゐる喜八といふ髪結がある。是が誠に口軽の男なので、退屈の時などは晋作話相手にしてをりましたが、ある時、長州の事を大層悪く云つた。それは何も高杉と知つて云つた譯ではありません。結局俗論黨の事を罵倒したのだけれども、晋作は何思つたか、一刀を引抜いて、

「拙者は長州の藩士だ、藩の悪口をされてはその分に捨置けん。斬つて終ふから、それへ直れ」と云ふと、喜八は驚いたが、

「成程是は、私が悪うございました。ご立腹になるのもご道理でございます。それではお手討になすつて下さい」と云つて、後れ毛を搔上げて、晋作の方へ背中を向け、両手を合せて頭を下げた。

晋作が一刀を鼻ッ先へ突出して見たが驚く様子もない。ビチャリと背で叩いたが平氣である。晋作感心して、

「イヤ喜八、貴様は何だ、髪結などに似合はぬ宜い度胸だな、武士としても恥しからぬ度胸だな」

「旦那、冗談をしねえで下さい。斬るなら早くスツバリとやつておくんなさい。日が暮ると足許が悪くなります」

「イヤ斬るのは止めた」

「助けて下さるんですか、そりやア有難うございます。實は一寸言ひ交した女があるんで、私が死んだら嘸嘆くだらうと思つて」

「巫山戯るな」

「時に旦那、私は今貴所に斬られたものと思つて、商賣は止めて終ふ」

「商賣を止めてどうする」

「貴所のご家来になりますから武士にしておくんなさい」

「貴様、武士が好きか」

「實は、私は元からの髪結職人ではありません。と云つて大した武士ぢやありませんが、黒田

様の足輕の權堂庄九郎といふ者の伴で、足輕でも二本差したんだから武士の内です。江戸の邸に勤めてゐる内に、何か不都合があつたとかいふんでお暇になり、遂に兄弟二人髪結になつて終つたんですが、矢ッ張生れ故郷が博多だといふので、此方へ歸つて來ましたが、兩親には死別れ、今は兄弟二人きりです。此處の石藏屋の親方にも種々お世話になつてゐますが、貴所は長州の相當のご身分の方のやうですからどうか私共をご家來にして下さいまし、若も私がいけなかつたら、弟だけでもご家來にしてやつて下さい」

「イヤ能く分つた。何處か腹からの町人にしては違ふと思つた。然しな喜八、私はお前の思つてゐる程の身分の者ではない。仲間小奴ならイザ知らず、士分の者を家來にする程の身分ではないが、此處に宜い事がある。長州には奇兵隊といふものがあつて、町人が百姓でも、志しある者はどんく隊へ入れる。入隊すれば即ち士分だ、立派に武士だと云つて通る。現在奇兵隊の總督をしてゐる赤根武人といふ男があるが、是なども以前は町人だつた。勉強次第で隊長にでも總督にでもなれる。大體此の奇兵隊は私が拵へたやうなもので、現在奇兵隊の重立つた者は元私の部下だつた。さういふ關係があるからお前達が望みなら、その奇兵隊に入れてやらうではないか、さうすれば望み通り、武士といふて大小さして歩ける」

「有難うございます。是非お願ひ致します。つきましては旦那の名前をお聞かせなすつて下さい

まし」

「他言はならぬが、私は高杉晋作といふ者だ」

「アッ、高杉様ですか、私は先刻高杉様なら褒めたでせう。悪く云はなかつたでせう」

「さうだつたな、大分評判が宜しかつたやうだ」

「あゝよかつた、若し悪く云はうものなら、眞正に首を切られちまつたかも知れない」

「無暗に切るものか、然し喜作私はまだ當分當地にゐる。私が連れて行く時まで商賣をしてゐる」

「畏りました。話をしてやつたら、嘸弟も喜ぶでせう」

「弟の名前は何といふ」

「幸助と云ふんでございます。明日にも連れて参りますから、宜しくお願ひ致します」

斯ういふ譯で、此の髪結の喜八、幸助の兄弟が、後に奇兵隊へ入りまして、喜八は藤重喜八郎と云つて、相當の地位まで行き、幸助は小才が利く處から、隊の密使を申付かつて、町人姿で

薩摩や筑前へ出掛けましたが、晋作歿後は、井上聞多の配下となりました。

又石藏屋卯平も、黒田藩が愈々佐幕派と決した後、家を捨て長州へ來て小寺幸兵衛と名乗り、

矢張奇兵隊へ入りまして、高杉の使ひで長崎へ行く途中、天草の富岡といふ處で、幕府の密偵の

爲に殺されましたが、それは後のお話。

平尾山莊

月形洗藏と早川養敬の二人は、高杉の事を一應重役の耳へ入れて置いた方が宜からうと考へたので、老臣の内でも勤皇派の矢野相模と加藤司書の二人に話して承諾を得ましたが、對州藩と打合せをしやうといふので、高杉を誘ひました。高杉も對州の家老職平田大江に逢ひたいと思つてゐた處なので行く事になり、高杉に同行する者は、中村圓太と伊丹慎一郎、江上英之進、今中作兵衛の四人、此の時大庭傳七と淵上郁太郎の二人は、他の方面で活躍してをりました。此の人達に少し遅れて、高橋屋正助、石藏屋卯平、帯谷次平の三侠客が、月形の命に依て、萬一の場合を慮り、尾行して参りました。

處が、對州藩は、當時君公の外戚にあたる勝井五八郎といふ者が、佐幕論を唱へ頗る勢ひよく同藩の勤皇の士、林、畑島など三十人ばかりが斬られた際なので、大江は藩の整理に没頭してゐて、九州聯合説も餘り乘氣にならない。

そこで、どうも仕方がないから歸らうといふ時に、中村圓太が、『對州藩にもまだ勤皇の士はゐるから、自分だけ留まつて、聯絡を取らう、それに北島四郎や、里見次郎も來る事になつてゐるから、彼等とも逢つて相談をします』

といふので、中村だけ残して高杉等は博多へ歸りました。

中村は浮岳の麓の修験者清水坊右中の處に足を留める事になりました。

その内に月形と早川が考へたのに、どうも石藏屋の家は賑かな場所、人の目に付き易い。いつまでも高杉氏を彼處へ置くのは宜しくない、といふので、相談の上、住吉村の水車橋の脇に住んでゐる村田東圃といふ畫工の家の一室を借て、其處へ高杉を移しました。然しまだそれでも油断はならない。モツと宜い場所はなからうかと云つてゐる内に、ふと思ひ出したのは、望東尼の平尾山莊だ。『何だ、あゝいふ絶好の場所があつたのに、何で今まで心附かなかつたらう』といふ譯此の山莊といふのは、城下から一里ばかり離れた平尾村といふ處にあつて、殆ど用のない者の行かない場所、先年月照師も此處へ案内した事がある。又西郷吉之助も此處へ來て月形、鷹取、平野、早川など、秘密の會合をやつた事がある。

平野次郎は足輕の出身で、月形や鷹取などとは身分が違ふが、その精神に變りはなく、又勤皇家としては、寧ろ月形や鷹取よりも有名で、膝を組で相談をする事もあるが、此の平野などは、尠からず望東尼の世話になつてをります。

そこで月形と鷹取が、平尾山莊へやつて行き、望東尼に打明て話をすると、『宜しうございます。お匿まへ致しますからお連れなさいまし』

二人も喜んで歸り、高杉に此の事を話して、密かに平尾山莊へ案内いたしました。此の望東尼といふ人は、本名を元と言ひ、黒田藩の海野金兵衛といふ人の三女に生れましたが幼い時から器量勝れ、大隈言道に就て和歌を學び、才媛の聞え高かつたが、二十四歳の時、同藩士野村新三郎に嫁し、五十四歳の時、夫が病死いたしますと、髪を剃し、俗名もとをその儘望東尼と附けましたのは、博多から東に當る京の鳳闕を慕ひ奉るの意味ださうでございます。彼の七卿落の中の五卿が、太宰府にお出の時、お訪ねしてお慰めを致しましたが、その折に三條公が、白扇に

皇國の正しき道をふむ人は千年の坂もやすく越ゆらむと書て下された。望東尼は直ぐお返しにと云つて詠みました歌が、

まとひつく老の坂路登りきて正しき道となるぞ嬉しき

望東尼はさういふ豪い女でしたが、其處へ晋作が厄介になる事になつた。月形等は高杉が山莊へ行つて不自由をしないやうにと、吉村清子といふ十四歳になる小女を連れて来て、小間使ひや、食膳の給仕などをさせる事にした。之は皇學者の吉村茂右衛門千秋の娘で、流石は學者の娘だけに和歌や何かの素養もあつた。ある時晋作が冗談に、

『お嬢さんはお綺麗だが、大和心といふものを持つてゐなさるか』

と云ふと、清子はニッコリ笑つて、傍らにあつた筆を執つて、白紙に認めたのが、

我も又同じ御國に生れ来て大和心のあらさらめやは

『是をご覧願ひます』

と云つて出した。晋作それを見て頭をかいて、

『アハ、是は參つた。然しどうも豪い娘さんぢや』

と云つて感心しました。此の清子の外に、同志の一人で瀬口三兵衛といふ男をお使や何かにお入用であらうからと云つてよこした。是は極く身分の低い者であつたが、矢張憂國の志士でございます。

毎日入代り立代り黒田藩の人々が遊びに来てくれるから、晋作少しも退屈はしない。偶に雨でも降つて、誰も來ないやうな時には、例に依つて歌を詠んだり、詩を作つたりしてゐる。又男まさりの望東尼の話は、晋作も喜んで聞てゐた。

高杉と西郷の會見

スルと薩摩の西郷吉之助が、此の年の十月に福岡へやつて來た。試みに月形と早川とで、長州と和解の案を持出して見ると、西郷には異議がないといふ、尤も西郷は、土佐の坂本龍馬からも

高杉晋作

話があつて、いつかさういふ時節が来るだらう位に思つてをりました。そこで月形と早川が相談をして、是は一つ西郷と晋作と會せる方が宜い、といふので、二人が揃つて、平尾山莊へやつて來た。

「高杉さん、どうぢや、貴所薩摩の西郷どんに逢つて見なさらんか」といふと高杉が、

「今我が藩と薩摩とは仲違ひをしてゐる。西郷どん個人の心持は知らんが、藩と藩とが不和であるのに、此處で私が西郷と逢ふのは、密會をして、何事か企むやうに當るから、マア止しにしませう」

「然し高杉さん、薩摩のやうに大藩になると、種々な心持の者がゐる。我が藩あたりでも種々な心持を持つた者がゐる。現在長州でもさうではないですか、正義派もあれば俗論黨もゐる。西郷さんは話の分る人です。一度お逢ひなされると宜いのだがな」

丁度それを脇で聞てゐた望東尼が、筆を執つてサラ／＼と何か認め、

「高杉さん、是をご覽下さいまし」と云つて出した。何であるかと思つて、高杉が見ると、一首の歌が書いてあつた。くれないの大和にしきもいろ／＼の糸まじへねば綾は織られず

理屈では負ない高杉だが、斯ういふ柔しい歌で意見をされると、頭が下る。

「イヤ是は私が悪かつた。西郷さんに逢ひませう」

「お逢ひ下さるか、それは何より」

二人は喜んで歸つたが、翌日、又二人して西郷を案内して來ました。

西郷は、望東尼とは知己の間だつたから、一別以來の挨拶をして、聽て高杉も面會をしたが、何方も一代の英傑、一は薩摩を代表し、一は長州を代表するやうな人物、忽ち百年の知己の如くになつて歡談をしたが、丁度此の日は絶好の秋日和で、縁の外を見ると、紅葉と青葉と入交つて畫にも描けぬ程の景色だ。

「どうでござすな、少し表を歩きなさらんか」

「結構ですな、皆さんはどうです」

「お供をませう」

高杉晋作

一同が揃つて表へ出た。瀬口三兵衛も貧乏徳利を擔いで供をして來たが、時折躊躇で何か取つてゐる。晋作がそれを見て、

「瀬口、何をしてゐる」

「ハイ、松茸を取つて参りました、お肴にしやうと存じまして」

「松茸か、それは宜い考へだ、では拙者も手傳はう」
 「私も探ませう」

一同が瀬口に手傳つて松茸を探し始めた。天は浅黄暮を下げたやうに晴渡り、ボカ／＼と暖い。一同大喜びで山間の風景を愛でながら歩いたが、月形が、

「如何ですな、此處が最も景色の宜い處だ、此邊で一杯傾けられたら」
 「左様致さう」

一同木の根へ腰を下す。瀬口はまめ／＼しく穴を掘つて、枯木を附近から集めて来て、火を燃して酒をあたくめ、又松茸を焼て、

「サアどうぞ、ソロ／＼お始め下さい。湯呑を持って参りましたから、是でどうぞ」

「林間に紅葉を焚いて酒をあたくむか、イヤ是は誠に風流の事ぢやな」と献つ酬めつ湯呑の酒を飲でるたが、

「西郷さんは暫らく孤島の獄にお在になつたといふ事を聞きましたが、それにしては却々健脚ですな」

と、高杉が云ふと、西郷は高らかに笑つて、

「一頃は氣ばかりあせつても、足が自由にならず、殆ど困りました。然し此の頃では漸く達者に

なりました。何に致せ此の兩足は私の商賣道具ぢや」

「商賣道具とは面白い。私も暫らく牢生活をやりまして覚えがあるが、餘り住み宜い所ではござらんな」

月形も鷹取も、牢内の経験があると言ひ出して、何れも牢生活の苦しみなどを話して打ち興じてゐたが、聴て夕暗が迫つたので、元の山莊へ戻り、

「イヤ思ひ掛けぬ珍客で、宜い保養をしました。就ては西郷さん、此處で貴所とお逢ひした事は當分ご内聞に願ひたい」

「それは手前に於てもご同様、どうぞご内聞に……」

高杉と西郷の會見は是で終りました。

ある日、月形の處へ、突然高橋屋正助がやつて来て、

「旦那、弱つた事が出来ました」

「どうした」

「高杉さんが平尾山莊にお出での事を、役人が感づきました」

「さうか、それでどうした」

「私に確な處を突めて召捕れといふので、マア役目だから引受けては來ましたが、何處か外へ

お匿まいする處はありませんかね』
『マア待つてくれ、早速何處か探すから』
『何分お願ひします』

高橋屋は歸つて行つた。そこで鷹取や、早川と相談をしてゐる處へ、例の對州藩の平田大江が博多へ來たので、何處か高杉を隠す處はなからうかといふと、平田が、
『ご心配には及ばん。いつでも拙者がお引受け致す。手前邸内へお預り致せば何者が參らうとも滅多に渡す氣づかひはござらん。萬一危険の迫つた場合は船にて何れへなりとお落しをする』
『さう願へれば我々も大きに安心でござる。それでは折を見て高杉氏をご案内致すから』
と、約束をして別れました。

丁度その翌日の事です。突然中村圓太が歸つて來て、長藩は日に／＼俗論黨が勢ひを得て、正義派の士を捕へて刑に處するといふ暴狀だが、是を高杉先生に云つたものか、どうかといふ相談を持掛けた。
『それは高杉氏には滅多に云へん。話をすればあの人の事だから、直ぐに長州へ歸られるに違ひない。それは焚木を背負て火中に飛込むやうなものだ、何とか方法を講じるから少しの間高杉氏には云はずに置きなさい』

圓太に口止めをして置いて、月形は家老矢野相模に逢つて此の話をした。スルト矢野も勤皇の士だから、非常に憤慨をして、加藤司書とも相談の上、筑前藩として、長州藩へ忠告の使者を送る事になつた。その使者は早川養敬、淺香一素、筑紫衛、長谷川範藏の四人といふ事に極つたが、當時早川は郷里の吉田村の本宅へ行つてゐて居ない。然し通り道の事であるから、三人が吉田村へ寄つて、早川を同道するやうに申附けました。

そこで、淺香、筑紫、長谷川の三人が、吉田村の早川方へ來て見ると、長男が重病で危篤に瀕してゐる。早川はその枕許に付き添つてゐるといふ始末、三人も一寸言ひ漙つたが、藩命であるから仕方がない。實は是々と話をすると、早川が、

『假令子供は死なうとも仕方がない。長州の正義の士を救ふ爲といふなら、早速同道しやう』
と直ぐに支度をして立出た。その跡で遂にその子は死に終ひましたが、是ほどまでにして四人が山口へ行つて、長州の重役連に掛合つた甲斐もなく、俗論黨の連中、テンデ耳に入れない。據らなく博多へ歸つて來たが、その時に長州の内狀を委しく探つて來た。それによると、益田福原、國司の三家老の首を切つて、幕府の軍門に送り、當主も嫡子長門守も寺入りをさせ、三條以下の五卿は一人宛是を他藩へ預けるといふ事になつた。その報を持つて早川等が歸つて來て矢野相模に報告をする。どうも他藩の事であるから仕方がないとなつた。尤も他藩の事は扱をいて

現在己れの藩中が自由にならない。佐幕派の連中が高杉を台捕うとしてゐる状態だ、月形は遂に決心をして、残念ながら最早お置き出来ぬから、對州藩の平田の邸へ移つて貰ひたい。猶長州の事情は、筑紫より委しくお聞き下さいと書き、その外打合せの事項を委しく認め、平尾山莊へ、筑紫衛に持たせてやりました。

筑紫が平尾の山莊へ来て、高杉に面會し、早川等と長州へ使に行つて来たこと、今の長州は俗論黨が勢ひ盛んで、征長軍に降伏し、三家老の首を切つて送り、藩主が寺入りをした事などを物語りました處、高杉は齒嚙みをして口惜がり、

「此の上は拙者對州藩の厄介になり、身の安全を計るよりも、長州へ歸つて兵を揚げ、俗論黨を平げる事に致す」

といふのを、筑紫が、

「兎に角對州邸へお出で下さい。其處へ月形殿始め、一同集會してお別れの宴を催す事に相成つてゐるから、實は手前も此度藩用で岩國まで參る事になつてゐるので、一旦立戻り支度を致してお迎へに罷り越す故、それまでにご用意を願ひます」と言ひ置いて歸りました。

高杉の奇計

高杉は望東尼の居間へ入つて行つて

「さて庵主、長らくの間一方ならぬお世話になりましたが、晋作只今より長州へ戻り、俗論黨の奴輩を平げ、お家を安泰に治めなければなりません。又重ねて御意得る時ござらうが、何卒お身お大切に」

慇懃に挨拶をすると、望東尼は、

「左様でございますか、いつかはさういふ時が參らうと心得てをりました。お國の爲にお働きのなるといふのでは、決死のお覺悟でございますませうが、然し大切のお身體充分お大切に」

「有難う存じます」

望東尼は立上つて、押入を開けて、中から取出した風呂敷包みを開いて、

「高杉様、疎末なる品でございますが、お錢別の印でございます」

と云つて、差出したのは、羽織、袴、襦袢、帯など一揃へ、晋作は驚いて、

「いつの間に斯様な品々をご用意になりました」

「豫て今日の日の來る事を思ひました故、用意いたして置きました」

「何から何までのお心遣ひ、恐れ入りました」

と言ひながら、ふと見ると、上に一葉の短冊が載せてあります。手に取上げて見ると、

真心をつくしのきぬは國の爲たちかへるべき衣手にせよ

「結構なるお餞別を頂き、晋作此上の喜びはござらん」

望東尼は筆を取つて、更に一枚の短冊を書て出した。

惜からぬ命ながかれ櫻花雲井にさかん春ぞまつべき

晋作は望東尼と清女に別れを告げ、望東尼の心づくしを身に付け、瀬口三兵衛を連れて山莊を立出でまして、新茶屋の若松屋といふ料亭へ來まして、同志を待たうといふので、一杯飲でゐると、例の高橋屋正助が忍んで來て、

「先生、長く此處にお在になつてはいけません。役人が目を付けてゐるやうですから、夕暗に紛れて此處をお立出でになつて、柳町の梅ヶ枝屋といふ家へお出でになつて下さい。月形様や何かには私の方からお知らせします」

と嘯くと、立去つて終つた。瀬口が心配して、

「先生、大丈夫でせうか」

「心配するな、高橋屋があゝして教へに來てくれる位だから悪いやうには計られまい」

ふと見ると、向ふに六歳ばかりになる可愛い女の子が、手毬を持って遊んでゐる。何思つたか晋作が差招いで、

「姉ちゃんや此處へお出で、どうだ小父さんと遊ぼうではないか、綺麗な毬だな、小父さんに貸してくれ、何か、姉ちゃん此處の家の子か、さうか、小父さんと仲よくしやうな、サア、投つて見な、是を突くのか、一イニウ三イ……イヤ是は縮尻つた。姉ちゃん、お前やつて見な、……一イニウ三イ……コリヤ旨い、小父さんは敵はぬらしい。どうだ小父さんの膝の上へ乗らんか、ハ、ハ、ハ、是を食ひなさい、旨いぞ」

晋作却々子供を手なづけるのは旨い。忽ち仲よしになつて終つた。瀬口が、

「先生、まだ皆さんお出でになりませんよ。如何しませう」

「明るい内は都合が悪いと思つて、遅くやつて來るのだらう。大分外が暗くなつたやうだな、それでは出掛けやう……姉ちゃん、お前小父さんが好きか嫌ひか、ナニ好きか、ハ、ハ、ハ、どうちや、是から小父さんが宜い處へ連れて行つてやるが、一緒に行かぬか、ナニ行く、さうか、それでは阿母さんに一寸斷つて連れて行つてやらう……コレ、女中」

「ハイ、お呼びでございますか」

「我々は急に是から柳町の梅ヶ枝屋へ參るが、後で人が尋ねて參つたら、梅ヶ枝屋へ參れと云つ

てくれ」

「ハイ、く、畏りました」

「其處でな、此の姉ちゃんに惚られてな、何でも一緒に行きたいといふのだ、一緒に連れて参るが一寸内儀に断つてくれ」

「オホ、さうでございますか、おつるちやん貴所此の小父さんとご一緒に行らつしやるのですか、さうですか、では阿母さんに申上げませうね」

と女中は笑ひながら帳場へ行つたが、纏て子供の母親が挨拶ながら出て来て、

「こんな子供をお連になつて、却つて迷惑様ではございませんか」

「どうぢや、連れて参つても宜からう、飽るやうなら直ぐに駕籠にでも乗せて送らして遣すから」

「イエ、そんな事をして頂きませんが、迎ひに参ります。アノ梅ヶ枝屋さんに行つしやるのでございませぬ」

「さうだ、誰か参つたら教へてやつてくれ」

「畏りました」

「サア、阿母さんのお許しが出た。小父さんが脊負つて行つてやる、ナニ毬を持つて行く、さうか、落すなよ」

晋作が子供を脊負ひ、瀬口が若松屋と書いた提灯を持つて先に立ち、柳町の遊廓をさして行く途中、石堂橋の邊りに、目明しかと思ふやうな奴等とチヨイ／＼見掛けたが、晋作は平氣な顔をして、子供をあやしなから行くので、別段怪しむ様子もない。無事に梅ヶ枝屋へ着きました。是は高杉の奇計で、子供を道具に使つて首尾能く目明しを囁着して終つた。

前以つて高橋屋から話があつたと見えて、梅ヶ枝屋では下にも置かないやうに大切にす。

送別の宴

此方は筑紫に伊丹の二人、支度をして高杉を迎ひに平尾山莊へ來ると、既に晋作は瀬口を連れて新茶屋へ行つたといふこと、そこで若松屋へ來て見ると、對州のお客様は、うちの小娘をお連になつて、柳町の梅ヶ枝屋へお出でになつたといふから、二人は又その跡を追ふ事になりました。

其の内に月形も梅ヶ枝屋へ來たから、彼の若松屋の子供は、人を附けて歸し、頃を見計らつて同家を立出でると、海岸傳ひにやつて來たが、對州家の藩邸でございます。平田大江や、江崎彌忠太が出て來て待遇をする。

纏て月形は高杉に向つて、

「誠にお名残惜うござるが、今日に至りては、最早お留め申す時期でござらぬ。只々先生のご武

運長久をお祈り致すのみでござる」

と挨拶をする。それに對して高杉も、

「是までの間一方ならぬお世話に相成り、何ともお禮の申上げやうもござらぬ。此の上は只一死奉公の實を盡すのみでござる」

と悲壯な答禮を致しました。

「それに就て、近日當藩より萩へ使者が参る筈でござるから、その人數の内にお加はりになつてお歸りなさるやう。それまでは當家に滞在遊ばすやう」

平田も言葉を添へて、

「過日は態々田代までお越しの處、生憎我が藩混亂の際とて、碌にお構ひも致さず、甚だ失禮いたしました。當所も藩邸の事とて充分のお構ひは出来ませぬが、お心をきなくご滞在下さるやう」

「此度は意外のご厄介に相成り申譯がござらぬ。何分よろしく」

スルと月形が懷中より紙包みを取り出して、

「是は甚だ輕少でござるが、拙者の志ばかり、餞別として差上げます。どうぞご入納下さるやう」

是は月形が書物を入質して作つた金です。晋作は禮を云つて是を納める。

その内に鷹取養巴、森安平、林泰の人々が集つて来る。石藏屋、帯谷、高橋屋の三名も参り、送別の宴が開かれました。

スルと少し遅れて、早川養敬がやつて来た。

「どうも遅刻いたして相済まぬ。實は途中に於て、長州の使者の方に逢ひまして、立話をいたしてをったのでツイ遅くなりました」

是を聞いて高杉が、

「長州の使者と云つて、誰が参りました」

「三澤求馬、野々村勘九郎の方々で」

「ナニ、三澤殿が参りましたか、それは幸ひ、重役の多くが俗論黨でござるが、三澤といふ人は誠に如才なく立廻つてをられるが、陰に我々を庇護してくれる人物、此の人に頼めば、拙者の歸國も案外容易く参るかも知れません」

「それは何よりですな」

「シテ、使者の用向は何でせう」

「それは大方五卿の方々に關する事でせう」

「と云はれるのは」

『先日内々下話がありました、五卿の方々を九州の諸侯に分ち預けるといふのが、幕府の長州へ對する條件の一つになつてゐる。一先づ當家に於て五卿の方々をお預りする事になつたに依て表向き重役の方が使者として乗込んで來られたものと思ひます』

『長州はそれまでしてに幕府に降参したのですか、實に情ない事になりましたな』
と非常に高杉は嘆きました。列席の人々も長州藩の行爲に憤慨しました。

翌日早川等は岩國へ向つて出發したが、途中馬關へ立寄つて、赤根武人や、俗論黨の模様を探り、是を委しく書面に認めて、高杉の處へ送つてくれました。

一方月形の盡力で、晋作は三澤、野々村等に會合する事が出來て、種々談合の末、三澤の人数の内に加へて貰ふ事になり、二十五日に無事に馬關へ歸る事が出來ました。

筑前の使者

高杉は長州へ歸ると、正義派の連中を説いて歩いた。御楯隊の太田市之進と、南園隊の佐々木男也が眞先に共鳴したから、先づ此の兩隊の人数は、イザといふ時に高杉が動す事が出来るやうになりました。

處がその頃、博多から使者として喜多岡勇平、機知小平太、近藤登の三人が、長州へ乗込んで

來た。尤も小倉へ薩摩の大島三左衛門が乗込んで來て、行動を共にする筈でした。大島三左衛門といふのは、西郷吉之助の變名でございます。その使者の目的は、彼の五卿の方々を、福岡へお迎へする爲でした。處がその事が耳に入ると、正義派の連中が大憤慨で、どうしても五卿を渡す事は出來ない。我々が不承知だ、次第に依れば兵力を以つて是を拒むといふので、野村和作、太田市之進を始め、十四五人が三使の泊つてゐる宿屋へ押掛けて行つた。高杉も矢張りその仲間へ入つてをりました。

幾ら口論をしても長州藩士が應じない。薩摩の大島とかいふ者が來るさうだが、若し大島が長州の地へ足を入れ、ば斬て終ふといふ騒ぎだ。是は危険だといふので、大島の渡來を差止める爲に、喜多岡が小倉まで出張する事になつた。

處が幸ひな事には、岩國へ使者に行つた早川養敬と、林泰、瀬口三兵衛の三人が、長府を通行するといふ事が分つた。そこで早速三人を呼び迎へて、

『我々は五卿受取りの爲に態々當地へ参つたのだが、長州の連中が邪魔をする。その中には、高杉晋作も入つてゐる。各々方は高杉と就中懇意なのだから、一つ口を利いて貰ひたい』

といふと早川が、

『そりやアいかん。我々は公用に依つて岩國へ行つたのだから、早く歸つて復命をしなければな

らん。各々方に頼まれて、その事に携つて日を費すといふ譯にはならん。然し折角のお頼みだから、一應は彼等を説いて見るが、成功をするかどうか分らん。飽まで成功を見るまで、當所に留まるといふ事は出来ないのだから』

『イヤそれは分つてゐる。兎に角一應口を利いて見てくれ』

そこで早川が高杉に逢つて、

『君が何とか外の連中を慰撫して、五卿を引渡すやうにはしてくれないか』

といふと高杉が、

『どうも私は辛い立場だ、大體五卿をお渡しするといふ事は大反対だが、さりとて事此處に至つては、どう騒いでも駄目だとは思つてゐる。さりとて私の口から、五卿を福岡藩へ渡せとは云へない立場になつてゐるのだ。それ故心中は兎に角として、反対運動をしてゐる譯だ。此の上は五卿の方々を貴君の力で動かすより外に仕方がない。さうすれば騒いでゐる連中も、諦めるだらうから』

『成程』

『今私は知つての通り俗論黨退治といふ大きな仕事を目前に控へてゐる。それに就ては大切な味方を失ひたくないから斯ういふのだ。悪からず思つてくれ』

『能く分つた。それでは拙者個人として無駄だとは思ふが、壯士の人々を説いて見やう』

斯ういふ譯で、早川が太田や野村に逢つて説いて見たが、鐵板へ石を打附けるやうなもので、

ピン／＼と返つて来るばかり、終ひには、早川は奸物だから斬つて終へといふ騒ぎにまでなつた

そこで早川も、一旦博多へ戻りました。

そこで喜多岡等三人が、功山寺へ行つて、五卿に逢つて説いて見る事になりました。

五卿といふのは、三條實美、東久世通禧、西三條季知、王生基修、四條隆壽の五人、此の外に

錦小路頼徳、澤主水正のお二方を入れて七卿と申しますが、錦小路卿は病死を致し、澤主水正は

但馬へ行つて旗揚げをなすつたから、此の中には入つてをりません。幕府は長州に對して、此の

五卿の方々を、肥前、肥後、筑前、薩摩、久留米の五藩へ、一卿づゝ預けるといふのが條件でこ

ざいます。さうして長州は取敢ず五卿を筑前福岡藩へお預けするといふ約束で、征長軍を引揚げ

て貰ふ事になつてゐる。

喜多岡等が功山寺へ行つて、三條公にお目に掛つてお話をしたが、

『我々の進退に就ては輕々しく返辭は出来ぬ。いづれ評議の上返答いたすであらう』

と仰せられたきり、遂に要領を得なかつた。處へ又早川がやつて来て、さうして今度は月形洗

藏と二人で、藩から長州係を仰せ附かつたに就て、先發して来たといふのだ。

月形洗蔵は一月三十日に福岡を發足すると小倉へ行つて、西郷に逢つて種々打合せを致し、それから馬關に渡つて、早川等と落合ひ、爰で又會議を致しましたが、十二月三日、月形、早川の二氏が揃つて功山寺へ參り、三條公に謁し、先づ齊博公の意を表し、且れ己れ等の意見を申述べました。

『長州藩主が寺院に屏居し、家老三名を斬つてその首を幕府の軍門に送り、山口の新城を破却し只管恭順の状を表してをりますが、今一條の公卿方引渡しの件は、既に總督府へも受書を出してをりまする處、公卿方が此の地にお在遊ばす以上は、幕兵は何日までも解兵を致さず、長州藩の難儀此上なく、従つて五卿のお身の上に如何なる間違ひあるやも知れず、何卒賢慮あつて、九州へお渡り遊ばさるゝやう、長藩諸隊の動搖は、洗蔵等、高杉晋作と相談の上、鎮撫致すでございますませう』

そこで五卿の方々が相談の上、九州へ渡海の儀ご承諾になりました。月形、早川の兩士は大きに喜んで立戻りましたが、萬違算のないやうに、高杉と密かに逢つて相談をしたり、又小倉から西郷を招いて、高杉と會見をさせたり種々お話もございしますが、大略いたして申上げます。

高杉の旗あげ

さて高杉が、俗論黨を片附けて、長州一藩を眞の勤皇黨にしやうといふので、大活躍をしてる最中に、突如邪魔者が現はれて、その妨害を始めました。

それは誰かといふと奇兵隊の總督赤根武人でございます。赤根は小才の廻る男で、正義派の連中と、俗論黨との間に立つて、和解をさせ、己れが出世の材料にしやうと企てました。それには高杉が歸つて来て、暴れられては都合が悪い。そこで高杉の企てに同意をしないやうに、諸隊の間を説いて歩いた。その辯口に惑されたのが、先づ御精隊の太田市之進と、南園隊の佐々木男也の二人で、一旦約束した事も破談にして終つた。晋作は齒がみをして口惜がつたが、その位の事で閉口して終ふやうな男ではない。直ぐに馬關へ飛で行つた、馬關には伊藤俊輔が、力士隊といふものを作つてゐた。

晋作が是までの話をするると、俊輔は快よく引受けて『いつでも力士隊の隊士は、君の命する儘に働かう』と云つてくれた『然し力士隊ばかりでは思ふやうに活動する事が出来ない』と思つたから、長府へ取つて返して、遊撃隊の監督高橋熊太郎に逢つて、遊撃隊借入れの事を話をするると高橋も又承知をしてくれた。

そこで勢ひを得た晋作は、愈よ事を擧げる事に決つし、先づ伊崎の陣屋を襲つて、軍用金や兵糧、矢彈を得やうといふ考へで、隊士へ下知を傳へ、己れは先づ甲冑に身を固め、栗毛の駒に跨がつて、五卿に謁見しやうといふので、功山寺へ参りました。處がモウ夜更の事なので、既に五卿はお寝みになつたといふ、晋作は、

「急にお目通りを致さなければならぬ事ならば、三條公に申上げてくれろ」と云つて動かない、そこで取次が奥へ来て、三條公に申上げると、直ぐにお立出でになりました。

『晋作、何事が起りしぞ』

「深夜お夢をお驚かし奉り、申譯がござりませぬ。ご承知の如く、俗論黨の横暴今は捨置く譯に参りませぬ。此の上は俗論黨を仆し、藩論を恢復して國家に盡し、長州男子の氣魄を天下に示さんと存じます。然しその成功の如何は分りません。只天に任せるのみでございます。尊卿方九州へご渡海ご決定の越ぎ今となつては致し方もござりませぬ。故に今夜お暇乞ひとして参上いたしました。何卒ご尊體ご大切に遊ばされ、天下の爲に一層のご盡方を願ひ上げます」と言ひ終ると、三條公が何も仰つしやらぬ内に門外へ走り出でました。是は三條公がお留めになるといかぬと思つたからでございます。此の時門前には、力士、遊撃二隊の兵士が、整然とし

て待受けてをりました。

『出陣』

といふと晋作は馬に跨がつて眞先に立ち、馬關方面へと向つたのであります。

是より先西郷吉之助は、高杉、月形、早川等の人々に逢つて相談をすると、直ぐに藝州廣島へ乗込んで、征長軍の總督尾張大納言殿にお目通りをして、五卿の方々九州へご渡海と決せし上は一日も早く解兵を遊ばされるやうにと説きましたが、尾張公がご承知に相成つたので、同道をして來た福岡藩の今中作兵衛にその旨を申含め、月形に報告をさせました。

此方は晋作、急に伊崎の陣屋を襲撃して、大勝利を得ましたが、狙つて行つた兵糧矢彈の類のなかつたのには失望をしました。

スルと月形と早川は、一旦五卿の方々をお守りして、筑紫へ歸りましたが、長州係りの事ですから、二人は又馬關へやつて來まして、高杉と面會をしました。

その時、高杉が、軍用金が無くて困つてゐる事を苦笑しながら話したので、同情をした月形が、早川に相談をして、公金の内から百兩を高杉に融通してくれました。晋作の喜びは申すまでもございませぬ。

旗の威力

高杉は中村圓太一人を連れて、三川尻に赴き、藩船癸亥艦に乗込んで、船長以下を説得して、此の船を馬關に廻し、此處で隊士五十名ばかりを乗せて乗出しました。此の報が奇兵隊へ聞えると、豫て打合して置いた山縣狂介は、手勢を従へて出發し、先づ彼等を襲つて俗論黨の財閥新三郎を討取り、その後参加した各隊の志士を従へて、萩の城下をさして乗込んで参ります。

處が海路を取つた高杉の方が二日ばかり先に萩へ乗込んで参りました。此の時萩城には俗論黨の大將粟谷隼人が三千人の兵を従へて頑張てをりました。

然るに一戦を交へて見ると、俗論黨の勢ひが強く、高杉の兵が振はない。こんな筈はないがと段々調べて見ると、敵の旗印が一つ引三つ星で、殿様の定紋だ。是に立向ふのでご主君に向ふやうで心苦しい。それが爲に切尖が鈍ると聞いて高杉が、直ちに一つ引三つ星の旗を作つて、『粟谷隼人は、幕府の命に従つて、殿様を押籠めにした不忠の臣だ、我々は殿様のお許しこそ受けてゐないが、殿様をお救ひ申す爲に戦つてゐる忠義の軍だ。即ち此の旗の下に死ぬ事は、殿様のお馬前で討死をするのも同じであるから、一同その心算で戦へ』

と一同に説いた。そこで何れも元氣が出る。處へ山縣の同勢も乗込んで来たから、前後に挟んで攻め立てると、城兵は忽ちに敗北を致しました。そこで粟谷を斬つて、その首を陣門に曝した。が、その手に屬してゐた者は一人も罰しなかつた。そのやり方が宜かつたので、高杉の評判は頗るよく、俗論黨は全く滅んで、正義派の天下となつた。そこで晋作は、毛利親子を萩城へお迎へ申し、井上聞多を始め、俗論黨の爲に捕へられてゐた正義派の人々を救ひ出し、それ／＼重職に付け、爰に藩論全く一定致しました。

馬關開港論

高杉晋作は、藩論を統一するといふ大仕事を片付けて、一段落附いた譯で、例のおうの妾宅へ行つて、酒などを飲んで楽しんでをりましたが、扱どうも退屈で仕様がなない。

或日おうの處で、遊びに來た伊藤俊輔と二人で飲みながら、『オイ伊藤、仕事も一段落附いたが、將來の事を考へると、どうも安閑としてはゐられないやうな氣がする。そこで英國のロンドン邊りへ勉強に行きたいと思ふが、貴公も一緒に行かんか』『ロンドンか、それは結構だな、一度行つたが急に歸つて來た爲に、何も勉強をしては來なかつた。貴公が行くなら一緒に行つても宜い』

『それでは一つ殿様にお願ひして見やうか』

二人が相談をして、殿様のご前へ出た時に、その事を申し上げ、ご内諾を得ましたから、

『俊輔、お許しが出たから早速出掛けやう』

『出掛けるのは宜いが、費用が掛るぞ、その金は何處で拵へる』

『井上に頼んで見やうではないか、あの男は今政治委員だから何とか融通をしてくれるだらう』

『成程それもさうだな』

そこで井上に逢つて話をすると、聞多も、

『羨ましいな、乃公も一緒に行きたいが、何分今日の處ではさういふ話にもいかん、金の算段なら引受けた。乃公一人では工合が悪いが……さうだ。佐世八十郎に話をして見てくれ、さうすれば佐世と二人で宜いやうにするから』

『何分頼む』

佐世八十郎といふのは此の時勘定役を勤めてゐたが、後の前原一誠でございます。高杉晋作から話をすると、

『宜しうございます。さういふ事なら井上さんとも相談をして見ませう』

といふ譯で、金の融通をしてくれました。

『サア出掛けやう』と云つたが、海外留學と發表をすると、どんな又反對が出ないとも限らないから表面は、海外事情調査の爲、横濱まで出張、といふ事にして、三月の末、二人が長崎へ参りました。

長崎には伊藤俊輔が懇意にしてゐるグラバといふ英國の商人がゐるので、其處へ行つて洋行の事に就て相談をして見た。スルとグラバの云ふのは、

『今貴所方が英國へ行つて、短時日勉強をなすつた處で、どれ程の徳は得られない。それよりも近日日本へ公使として乗込んで来るパークスといふ人から英國その他各國の事情などを聞いて参考にされた方が餘つ程お國の爲にもならうと思ふ。就ては馬關を開港して、貿易を盛んにされたら大變宜いと思ひますが、如何ですか』

と斯う云はれた。高杉も、馬關開港の事は考へない譯ではなかつた。元來幕府は、外國から脅かされて屈辱的の條約を結んでゐるが、自發的に此方から開港を持出して、外國と對等の條約を結べばその方がどの位國家の爲になるか知れない。

斯う思ひましたから、伊藤と相談をして、洋行は諦めて、長州へ歸つて開港に骨を折らうと決心いたしました。然し是は餘程の大問題で、まだ攘夷論を唱へて騒いでゐる人が多いのだから、迂濶に開港論などを持出せばどんな事になるか知れないといふ考へがあつた。スルと伊藤が

『では拙者だけ歸つて、井上とも相談をし、二三當つて見る。その上結果が宜さうならお前を呼出し、若し悪さうなら、歸つて来て横濱へ行かう』
『ちやアさういふ事にしやう、シテ何日経つ』
『明日の朝立たうと思ふ』

『それちやア氣の毒だが、手紙をうのゝ處へ届けて貰ひたい』
『うのゝ處へか、本宅の奥方の方には宜いのか』

『イヤ、妻は確りした女で、殊に親父が傍に附いてゐるから宜いが、うのゝ方は獨で淋しからうと思つて』

『アツハツハ、甘いぞノ』
甘いと云はれた晋作の手紙は確に甘かつた。

一筆申遣はし候、そなた事も無事にて目出度く存じ參らせ候、我等も無事長崎に罷在候間、お氣づかひ下されまじく候、此の度伊藤様お歸りにつき何もおぢきにお聞き下さるべく候、かねて申置き候こと相まもりしんぼうかんようにご座候、人になぶられぬこと、かんようにご座候、たんぜん給相送り候、間せんたくをしてお送り下さるべく候、伊藤様へ相たのみ置き候、十兩お受取下さるべく候、われら事もしんぼういたし候間そなたも

しんぼうかんようにご座候しやしんおくり候、間お受取下さるべく候、いろく申遣はしたくご座候へ共先づはおしき筆とめあらくかくの如くご座候

めでたし

四月五日

なほく風をひかぬようじんかんように存じまらせ候

伊藤俊輔は萩へ歸つて、先づ馬關開港の事を井上に計ると、井上も大賛成だ。その外二三の同志に計りますと、何れも賛成でございますから、その事を取敢ず長崎の高杉の處へ申送りましたから、高杉は取敢ず馬關へ歸つて来て、對帆樓といふ家へ宿を取り、井上と伊藤の處へその事を知らせました。

そこで井上に伊藤、その他同志の者は馬關へ出て来る。おうのも矢張知らせに依つて、馬關へ參りました。

爰で馬關の役人に對して開港の事を申しますと、馬關の役人が承知をしない。全體此の馬關といふ處は、毛利本家の領分でなく、長府の領地でございますして、此處には頭の古い頑固な連中が大勢ゐる。それが爲に、開港などといふのは飛でもない事だ。是といふのも、高杉、井上、伊藤などが、外國人に詔諛つて己れ達が出世をしやうと思ふから、こんな事を言ひ出すのだ、彼等如

き人非人は、御國に害毒を流す奴等だ、打つた斬つて終へ」といふので、若侍共が黨を組で、三人を狙ふ始末だ。是ぢやアどうにも仕方がないといふので、伊藤は船問屋の伊勢屋といふ家へ潜伏をする。井上は職人に變装をして萩へ逃歸つて終つた。晋作もおうのを連て對帆樓を逃出したが、いつその事京見物をしやうといふので、船で大阪へ参りました。處が京大阪は幕府の役人が、長州の武士を見ると、有無を云はせず召捕つて牢へ投り込むか、又は斬つて終ふといふ噂だ仕方がないから川口から船に乗りまして多度津へ着きました。是が圖らずも高杉晋作と日柳燕石と結び附く原因となりました。

安政以後、勤皇の志士で、一時四國に身を避けた者は少なくございません。さうしてその連中は、必ず圓唐村の小橋安藏か、丸龜の村岡宗四郎、榎井村の日柳燕石の許へ潜伏をする事になつてをりました。

中でも此の燕石を訪ねて、その世話になつた者は澤山ございます。例へば桂小五郎、鯉淵伊織、本間精一郎、松本奎堂、柴原和、長谷川正傑、河野鐵兜、藤本鐵石、椋木八太郎、村田新八、旭健、近藤芳太郎、井上文郁、中岡慎太郎、井上善心等で、その一番最後に行つたのが高杉晋作でございます。燕石は遂にそれが爲に入牢をするやうな事になりました。

日柳燕石

扱此の日柳燕石は始め草薙燕石と申しましたが、父は惣兵衛と言ひ、近郷屈指の財産家で屋號は加島屋と申しました。文化十四年の生れで、通稱長次郎、又耕吉とも申しました。名は政章字は士煥、號は燕石の外に柳東、春園、吞象樓、双龍閣、芭蕉書屋などと申しました。

燕石の號の出所は、勿論支那から取つたに違ひないが、吞象樓の號は面白い處から出てをります。

燕石は何の爲に建てたものか、別宅を一軒持つてをりました。南向の瓦葺の二階建てで、二階の西向の六疊の間の障子を開けると、直ぐ下は興泉寺といふ寺の境内になつてゐるが、向ふに象頭山が聳へてゐる。即ち盃に酒を注げば、その中に象頭山が姿をうつして、象頭山を吞む事が出来るといふ、そこで此の家を吞象樓と稱け、又己れの別號に用ゐたものだからでございます。

天井は葦簀張で、薄暗い部屋が一つある。面白い事には、その部屋の襖は總て片手が中にだけ附けてあつて、外側には附けてないから、中へ入つてピッタリ閉めて終ふと、一寸外からは開ける事が出来ないやうになつてゐる、木戸孝允や高杉晋作などが來た時に、能く密談をしたのは此の部屋でございます。

それにモウ一ツ都合の宜い事には、此の家は高松方面から金毘羅の町へ入る東口になつてゐて往來の者は總て此の二階から見える。密談をしてゐる時など、子分に云ひつけて二階から見張をさせる事も出来るといふので、誠に都合よく出来てゐる。

それから此の家の前に、二本の大きな松の木が立つてゐる處から双松閣とも稱けましたが別號の双龍閣もその邊から出てゐるものと見えます。

學問は叔父の石崎近藤に従て學び、それより三井雪航、岩村南里などといふ學者から經文や詩文を學び、その外書、畫、彫刻などを習つて、何れも素人離れをしてをりましたが、就中詩は最も得意とする處で、詩人燕石の名は、他國にまで響いてをりました。

斯ふいふ學者である日柳燕石が、一面に博奕打の親分であつたことも實に面白い、燕石は五尺に足らぬ小男でしたが、全身是膽と言ひたい位の度胸の宜い人で、他人から頼まれ

ば、何でも厭と云はなかつたといふ、眞の俠客でございます。女房のお松の間に一子を擧げて道之助と稱けましたが、後に終吉と改め、號を秋帆、又は三舟、草亭主人などと號し、父に似て却々の學者となりました。

扱高杉晋作が、おうのを連れて讃岐へ參り、豫て評判を聞てゐた日柳燕石を尋ねて、事情を話すと燕石は、

『さうでござんすか、宜しうございます。お引受けしました。憚りながら大船に乗つた氣でお在なさい』

斯う云つてくれたので、晋作もホツと安堵の胸を撫た。

『就ちやア何ですね、お武士の姿で在つしやると、どうしても目に附いていけません。町人姿になつて在つしやいませ、お腰の物や何か大事な物は私がお預りして置きます。さうして若い者に云ひつけて、手頃の家を見附けさせますから、其處に隠れて在つしやい』

『何分宜しく頼みます』

四五日燕石の許に厄介になつてゐる内に、

『高杉さん、家が見附かりました。少し狭いが住みよく出来てゐます。家財道具は、ア一通り揃へて置きました。行つてご覧なさいませ、ご案内しますから』

晋作とおうのは、燕石と女房のお松の案内で、その家を見に行きました。それは燕石の住居から餘り遠くない處で、割合に交通の便利な場所、燕石は、晋作が來ると直ぐに子分達に云ひつけて、家を探させ、家が見附かると、家財諸道具、箆笥の中には着物も入つてゐるといふ行届き方、身體さへ持つて行けば直ぐに入れるといふ様にして置てから、晋作に家が見附かつたと云つて話した。

「處で、名前を考へましたか、町人らしい名前を」
 「ふと思ひ附きまして、備後屋助一郎と致さうかと思ひます」
 「結構です。何だつて構はねえ、ぢやア近所へもさう云はして置きませう」
 斯ういふ譯で、萬事燕石の世話で一軒家を持ち、おうのとの假世帯が始まつた。
 晋作がおうのと最初に世帯を持つたのは、上海へ行く前の長崎時代で、是はマア月雇ひの妾と云つたやうな關係だつた。又その後の松下村の蟄居時代は、本妻雅子の内諾はあつたが、表面召使ひといふ事になつてゐた。處が今度は晋作も町人姿で、おうのは内儀さんで通してゐるので丸髷に結つて、襟つきの着物か何かで、晚餐後に爪弾きで三味線などを弾き、至極呑気に暮してゐられるから、モウ長州などへは歸らずに、いつまでもく斯うしてゐたいとおうのは思つてをります。

晋作は、兎に角妻の雅子の處へ、斯ういふ處に無事であるから、心配をしないやうにと申送りしました。

故郷の使ひ

ある日、燕石の子分が一人の男を案内して來た。

「へい此處の家ですよ、お尋ねのお宅は」

「ア、左様でございますか、どうも態々済みませんでした……エ、ご免下さいまし、ご免下さい」
 奥にゐた晋作が

「うの、誰か参つたやうではないか、出て見なさい」

「オヤさうでございますか」

何か片附け物をしてゐたおうのが、玄關へ出て見ると、格子を少し開けて、中を覗き込むやうにしてゐるのは、高杉の下僕の民藏、松下村へ能く使ひに來た男だ。

「オヤ、おうの様でございますか、どうもご機嫌宜しう」

「お、民藏さんでしたか、能く入つしやいました。サアくどうぞ此方へ……旦那様、民藏さんがお出でになりました」

「ナニ民藏が、さうか、此方へ通しなさい」

「民藏さん、お上りなさい。今洗足を取つて上げますから」

「どうも恐れ入ります」

うのが洗足の水を取つてやる。足を洗つて上へあがり、

「何でございますな、どうも結構なお住居で」

「サア、埃へ入つしやいまし」

茶の間の六疊へ通す。其處へ晋作も出て来て、

「民藏、能く此處が分つたな」

「へエ、加島屋の親分のお宅へ伺ひまして、只今乾分の衆に案内して来て貰ひました」

「さうだつたか」

「先づは旦那様にもご機嫌宜しくお目出度う存じます」

「其方も堅固で目出度い。シテお父上にはお變りもないか」

「旦那様もお丈夫でございます。それに奥様はお坊ちやまをお産み遊ばしまして、お二人とも

お丈夫でございます」

「ナニ、雅子が無事に分娩いたしたか、さうか、うの、雅子が男の子を生んださうだ」

「お目出度うございます」

「ウム、晋作も跡継ぎが出来て喜ばしい」

「是は奥様よりのお手紙、又旦那様と、おうの様のお召物でございます」

「さうか、うの、雅子がお前の着物もよこしたさうだ」

「申譯がございません」

うのは、自分の着物まで送つてくれる志しを、涙を流して喜んだ。

「民藏、お前は象頭山金毘羅大権現へお参りをした事があるか」

「イエまだ見物した事はございません」

「コレ、見物といふ奴があるか、ご参詣をするといふのだ」

「へエ、さうでございますね、見物をするなどと云はうものなら、天狗様に引裂かれて終ふか

知れませんか」

「天狗様などがゐるのでございませうか」

「さうだな、私も天狗などはなからうと思つてをつたが、先日燕石の話に、象頭山には確に天狗が居ると申してをつた。あの位に何か能く出来る男が、居ると信じてゐる處を見ると、或ひは居るかも知れんぞ」

「オヤマア恐ない」

「民藏、明日金毘羅大権現へ案内してやる」

「それはどうも有難うございます」

「うの、折角遠い處から使ひに参つたのだから、民藏に何か馳走してやれ」

「畏りました」

そこでののが臺所に立つて、何か支度をしてゐたが、聽て膳部が出来てそれへ持つて参り、
 『民藏さん、別にご馳走はありませんが、遠慮なく飲つて下さい』
 『是アどうも恐れ入りましたな、仰つしやつて下されば、お手傳ひを致しましたのに』
 『サア民藏、遠慮なく飲め』
 『有難う存じます』
 是から晋作の對手で飲み始めましたが此の民藏といふ男、正直者で、能く働くが、只瑾といふのは、一杯飲むとお喋舌になる。それも小さい聲なら宜いが、段々調子を張つてペラ／＼ペラペラ喋舌る。

『どうも旦那様、何でございますな、貴所様が座敷牢へ入つて本ばかり讀んで在つしやる時には、さうどうも豪い方とは思へませんでした、九州から突然歸つて在しつて、御楯隊や奇兵隊を率ゐて……』

廣い屋敷と違つて、壁一重といふやうな隣の混でゐる處で、こんな事を喋舌られては、備後屋助一郎などと變名をして、町人に扮装し、窮屈な思ひをしてゐるのが何にもならない。

『コレ／＼、何を云ふのだ、つまらん事を云ふな』

『イエつまらない事どころではございません。萩の城へ乗込んで、俗論黨の大將の首を取り……』

『コレツ』

『へエ、へエ……何か私がお氣に障る事を申しましたか、そんなに恐い顔をなすつて……お氣に障る事を申しましたらご勘辨を願ひます。けれどもねえ旦那、家來の身として、主人が豪い働きをしたのを羨しがつて褒めたのが何が悪いんです』

『モウ宜い、そんなに喋舌をしないで飲んで、飯を食たら、疲れてゐるだらうから寝て終へ』

『疲れたらうつて、そんな弱い下郎ぢやないんで』

『分つた／＼、どうも、うの、困つたな』

『民藏さん、モウそのお話はお止めにして唄でもお唄ひなすつたらどうです。私が三味線を弾いて上げますよ』

『唄ですか、是アどうも恐れ入りましたな、おうのさんに弾いて頂いちやア濟みませんね、ちやア唄ひませうか』

『何を唄うの』

『私はアノ旦那のお作りになつた、三千世界の烏を殺し、主と朝寝がして見たいつてね、あの唄が大好きなんで、あれを唄ひませう』

『困つた奴だな』

民藏が氣なしにペラ／＼喋舌るので、晋作も殆ど當惑したが、然し主人を宜いと思へばこそ褒めたてるのだから、憎む處は少しもない。

「マア／＼飲め、そんな小さい物で飲めては間だるつこい、サア此の盃洗で飲め」

「エッ盃洗ですか、是ア、是ア驚いた。旦那、私を酒で殺す氣ですか、民藏を鱈だと思つてるんですか、アツハツハ、アツハツハ」

「先づ私が飲で見せる。私が飲だらお前も飲め」

「へエ、飲みます／＼」

「うの、注いでくれ」

「貴所、そんなに召上つて宜しうございますの」

「大丈夫だ。盃洗の水をあけて酒を注げ」

「ヤア、眞正にやりますね、おうのさん、旦那だと思つて、注ぐ振なんぞして瞞着しちやアいけませんよ」

「大丈夫ですよ。最負分に餘計注ぐ位よ」

「是ア驚いた。是アどうも……眞正に注ぐんですが、お手許拜見と……オツ、オツ、ウーン・お美事、一息ですな旦那」

「サア約束だ、貴様飲め」

「宜しい、飲みます。おうのさん、注いで下さい……オツ、やけに注ぎますね、モウ澤山モウ……」

「貴所、そんなに召上つて、宜うございますの……なんて、誰も云つてくれる者はなし、仕方がないから……」

「愚痴をこぼさずに飲め」

「へい、飲みます。愚痴も言ひたくなるではないかつて……へエ飲みます」

その盃洗の酒を半分位飲んだと思ふと、ゴロリ横になつて、グーツと寝て終つた。

「民藏さん、民藏さん……旦那寝て終ひましたよ」

「アツハツハ、遂々鱈になつて終つたか。風邪をひかさぬやうに、何か搔卷でも掛けて置いてやれ」

うのが片附け物をしてゐる内に、先刻一見した妻稚子の手紙を繰返し讀で見ると、父の事や、生れた子供の事などが委しく書いてあり、それから藩の模様馬關開港に就て、萩山口には賛成者も大分ある事、それに幕府が又長州征伐の兵を出すといふ噂のある事などが書いてございました。その間に片附け物をしたうのが、表を締めやうとして、格子を開けると、誰か立つてゐたのが挨拶をしてりましたが、聽て戸を締めて、

「貴所、それではお床を延べませうか」
 「ナニお隣の内儀さんでございませうよ、何處からか歸つて來たのでございませう」
 「さうだつたか」
 別段氣にも掛けない様子で、その夜は寝たが、翌日、晋作が民藏に向つて、
 「民藏、お前は此の位の旅には疲れんと云つたな」
 「へエ、些とも疲れやアしません。海を泳いで來た譯ちやアございませんから」
 「アハ、さうか、それでは此處に手紙を書いていたから、ご苦労だが、今日歸つてくれ」
 「イエ何でございませう。奥様の仰つしやるには、お前は旦那様のお傍にゐて、ご用を達してくれ
 ろといふ事でございます。私は旦那様がお歸りになるまで、お傍にをりますつもりで、何でござ
 いますか、奥様のお手紙に、そんな事が書いてございませんでしたか」
 「イヤ書てあつた。書てあつたがな、此方には別にお前を傍へ置く程の用もない。又何か用事の
 あつた時には、燕石さんに頼めば、若い者が大勢ゐるから貸してくれるので、少しも不自由はな
 い。國許の方には、お父上のご用もあるだらうし、子供が出來たとあれば、又何かと用も殖え
 らうから歸つて貰ひたい」
 「へエ」

「それにな、此の手紙に書てあるが、至急に知らせなければならぬ用向があるのだ、飛脚に頼ん
 で、萬一人手に渡りでもすると困るから、どう致さうかと思つてゐた處へ、幸ひお前が來てくれ
 た。それゆえお前に頼むのだ。私の用と云へば、是が何よりの用だ、早速今日歸つて貰ひたい」
 「左様でございますか、何か私、昨晚ご馳走様になりましたして、失禮な事でも申上げたので、ご立
 腹になつたのではございませんか」
 「イヤそんな事はないから心配致すな」
 「左様でございますか、それでは直ぐに立戻ります」
 「是は僅少だが使ひ賃だ」
 「イエ旦那様、お使ひ賃は奥様から澤山頂いて參りましたので、お旅先の事でそんな無駄な事を
 なさいませんでも……」
 「マア宜いから取つて置け、旅をしてゐる間に、何か食ひたい物があつたら食へ、然し何だぞ、
 大切な使ひであるから、酒は飲むなよ」
 「畏りました。ではおうの様、お手数を掛けましてございませう。私は是で立戻ります」
 「オヤモウお歸りかえ、二三日は泊つて行くものと思つてゐたのに」
 「それがね、旦那様の急のご用で立歸ります」

「さうかい、では氣を付けてお出で、お宅へ歸つたら、どうか奥様に宜しく申上げておくれ、うのが泣いて喜びましたと申上げてね、何れ旦那様のお供をしてお國へ歸つたら、早速お目に掛つてお禮を申上げると、さう申してゐたと傳へておくれ」

「畏りましてございます。ではご免下さいまし、旦那様ご機嫌宜う」

「オウ氣を注げて行けよ」

民藏は直ぐに支度をして立つて行きました。

「貴所、何か急のご用で……」

「イヤ別に用はなかつたが、昨夜のあの始末、手許へ置けては誠に危険だ。悪い男ではないが、酒を飲むと餘計なお喋舌をするので困る。それはお父上も能く仰つしやつてゐた事だ。書中にその事を認めて置いた。民藏酔中の多辯には困り候、歸國後も此度の事、世間にて話申さざる様嚴重に仰せつけ候様頼み候とな」

「左様でございましたか、然し忠義な奴さんでございますね」

近所の噂

此の民藏の來た事が、晋作一家に對して、近所で疑ひを持つ原因となりました。それはあの夜

の民藏の高聲で喋舌たのを隣の女房が聞いて、世間へ行つて話をしたからで、

「マア備後屋さんね、あの内儀さんはどうも堅氣ぢやアないと思つたら、何だよ、ありやア本妻ぢやアないんだよ、お妾だよ」

「オヤさう、どうして分つたの」

「ご本宅の方からお使ひが來てね、その男の口の利き方から推量したんだよ、おうのさんくと云つてゐたが、眞正の内儀さんなら、そんな事を云ふ氣遣ひはない。又云はせもしないだらう。ありやアお妾だよ」

「さうかい、さうすると備後屋さんは、何處かに立派なご本宅があるんだね、見たところ大家の旦那らしいから、それぢやア商用で此方へ出て行つしやる時に寄らうといふので、お妾を彼處へ圍つて置くんだね」

「さうなんだよ必つと……けれどもね、訝しい事にはその使ひに來た男だがね、歸る時に一寸見たんだけけれども、商人の番頭さんや若い衆のやうぢやアないんだよ。どう見ても武家方の奉公人さ」

「へエー、さうすると備後屋なんて云つてゐるけれども、あの人はお武家かね」

「何だかさうぢやアないかと思ふのさ、加鳥屋の旦那が大變にお世話をしてゐるけれども、彼處

の家へは能く遠くからお武士が尋ねて来るからね』
 『何しろ、あの旦那と来たら變り者で、立派な大家の旦那の癖に、博突打などを大勢子分に持つて、此間私に聞いて大笑ひをしたんだけれども、誰だとか云つたよ、豪い先生が加島屋の旦那に見見をしたんだつて、貴所は立派な詩人だから、博突などを打つのはお止しなさいつて、スルト旦那がね、そりやア詩人が博突を打つたら悪いか知らないが、博突打が詩を作つたつて構はないだらう。私は博突打だから、博突も打つし、詩も作る、と斯う云つたんでその人は呆れて黙つちまつたとさ』
 『眞正に變つてゐるね』
 いつか斯ういふ噂が世間へ廣まつて、晋作一家が近所の者から疑ひの目を持つて見られるやうになりました。

吞象樓の密談

吞象樓の密室へ、時々集つて、種々意見を述べ合ふのは、晋作を中心にして、主人の日柳燕石、美馬君田、後藤田水、奈良松莊、古市麥舟の人々で、何れも勤皇の志しの厚い人達でございます。ある日、麥舟が、

『高杉先生、ご注意申上げますが、此の頃お宅の事に就て、兎や角つまらぬ噂が立ちました。さういふ事が役人の耳にでも入り、疑ひを持たれてはならんと思ひます。ご如才はございますまいが、ご油斷のないやう』
 『ご注意有難う存じます』
 是を聞て燕石が、
 『是は麥舟子、能い事を云つてくれた。皆さんにもお願ひをして置きますが、高杉先生に就て、役人が變な舉動をするやうな事を耳になすつたら、直ぐに私共なり、先生の處へなりお教へなすつて下さい』
 一同承知の趣きを答へる。猶燕石が晋作に向つて、
 『殊によると先生、萬一の場合には、お目に掛つてお別れのご挨拶をするなんて事は出来ないかも知れませんが、いつか又お目に掛れる時もありませうから、さういふ時には後に心を残さずドシ〜お逃げなすつて下さい』
 『イヤ日柳先生、圖らずも罷り出て、一方ならぬ厄介に相成り、何ともお禮の申上げやうもござらん』
 『そのお禮では痛み入ります。貴所様をお世話するのも天下の爲、且つは朝廷様へ對する御奉公』

だと思つてをります。時に先生、此間俗語を考へました。此の方は先生の方が本家で在つしやるが、お笑ひ草にご覽下さい」

と、筆を執つてサラ／＼と白紙に書いて出したのを、晋作が取上げて見ると、

伊勢蝦はしばし小腰を屈めてをれどやがて錦の鎧着る

今こそ幕府の爲に壓迫を受けてゐるが、聽て錦旗を押立て、徳川を討破る時が来るだらうといふ意味で、文句は晋作の『三千世界の烏を殺し』のやうな洒脱には及ばないけれども、その勤皇の精神は能く現はれてをります。

『おうの、面白い本を買つて参つた』

『何でございます』

『戀文指南といふのだ、男から女にやる手紙、又女から男にやる手紙などが種々書てある』

『マアそんな物を買つて入して何になさいます』

『是をお前に預ける。文句は兎に角、字が旨いに依つて、是を見て毎晩手習ひをしなさい』

『マアいやですわね、色文でお手習ひをするなんてのはありませんよ』

『イヤあつてもなくつても構はん、手習ひと云つても半紙や何かへ書いてはいかん。紅渡紙か何か色つばいものへ、手紙のやうに書いて見なさい』

『さうして、それをどうします』

『私にくるれのだ』

『何だか可笑いぢやありませんか』

『マア宜い。やつて見なさい』

仕方がないから、おうのは、筆と紙を買つて来て、戀文の稽古を始めました。一通書けると晋作に見せる『おゝよい／＼』と晋作が藏つて終ふ。

『偶には貴所の方からも下さいな、妾ばかり出してゐてはつまらない。第一そんな物を取つて置てどうなさるの』

『ウム、少し考へがあるのだ』

と云つてをりましたが、此の戀文が、大變に役に立つ時が來ました。

突然、格子を手荒く開けて、飛込んで來たのは、燕石の子分の茶やの定はんといふ男だ。おうのが、吃驚して、

『オヤ、定はんですか』

『内儀さん、先生は』

『奥にをります』

「さうですか……先生、大變です。早く逃げて下さい」
「ナニ」

「どうして分つたか、遂々先生を長州の高杉晋作と嗅ぎ付けやがつて、捕方が向ふといふ事を、古市先生から知らして來ました」

「さうか、燕石殿はどうした」

「大勢引張つて花屋へ行つて、態とドンチャン騒いでゐます。是は役人の目を瞞着す爲です。その間に先生に逃げておくんなさいといふ親分の口上です。少ねえが此處に三十兩ございます。是を路用におくんなさい」

「折角のお志し頂戴いたして參る。どうぞ親分に宜しく云つてくれ、又古市氏にもお逢ひになつたら宜しく云つてくれ」

「へエ、古市さんが此方の仲間で宜うござんした。あの人は村役所に關係があるので、こんな事が早く分ります」

「うの、豫て申附けて置た通り支度をしろ」

「ハイ」

と云つて、豫て覺悟のおうのは、手早く戸棚から取出した風呂敷包み、中には二人の旅装一切

脇差一本が入つてをります。晋作はその風呂敷包みを小脇に抱へ、何處か途中で、姿をくらますつもりでございませう。

「おうの、膳を出せ、徳利に猪古だの、小皿盛を出せ」

定はんは呆れた顔をして、

「先生、此の中で一杯飲まうと云ふんですか」

「イヤさうではない。芝居をするには道具が必要だ」

向ふに掛つてゐた三味線を取つて疊の上へ横に致すと、片足掛けて、ピシリと棹を折つた。

「アレ〜勿體ねえ事をするな」

徳利を横に倒したから酒が溢れる、皿小鉢を亂雑に置いて、如何にも取急いで逃げたといふ風に取繕ひ、

「サア是で宜しと」

「ちやア先生、是から金山寺松里庵の下から西へ手屋口に登り、象頭山の裏を廻つて、三豊郡財田中へ出て、神田を通り、多度津街道へと出ておいでなさい。廻り道のやうだが、その方が役人の目に附かねえから」

「忝けない」

「先生、表は雨ですぜ」
「さうか、うの、日和下駄に蛇の目を出せ」
「ハイ……定はん、お世話になりますねえ」
「どう致しまして」

「加島屋の内儀さんに宜しく」

と言ひながら、蛇の目の傘をボンとひらく、

「ヨウ、成駒屋ア、宜い立女形だなア」

晋作も笑ひながら、包みを小脇に抱へて傘の内に入る。

「相合傘とは洒落てるますね、ちやア氣を付けて行らつしやい」

二人はその儘ドン／＼行つて終ふ、定はん奥へ来て、徳利を振つて見て、残つてゐる酒をツと飲み、

「乃公は餘り宜い役廻りぢやアねえや」

ニヤリと笑つて徳利を放り出し、その儘立去つて終ひました。

その後へ役人が出張して、座敷の體裁を見て、

「長州の高杉なら聞えた名士だ。逃るにしたつて、こんな慌て方はしなからう」

と、呟いたさうでございます。

燕石の召捕

此方は燕石、琴平の花屋といふ茶屋へ來ると馴染の藝者を大勢聘んで、飲んだり食つたりしてゐたが、

「サア今日は皆なに好きな物を書いてやる。紙と硯箱を持つて來い。紙と云つても半紙や小菊ちやアないぞ、唐紙を持つて來い唐紙を、馬鹿奴、手紙を書くのちやアないぞ、そんな細い筆でどうする」

紙や筆を取寄せまして、毛氈の上へ紙を攤げ、

「サア何でも書いてやるぞ」

妾は書が宜いの、繪が宜いの、都々逸が宜いのといふのを、燕石片ツ端から書て行く、處へドヤ／＼と入つて來たのは役人達で、

「コリヤ、日柳燕石、訊問の筋が有るに依つて、神妙に致して役所まで參れ」

燕石は聞えない態をして、唐紙の上へ筆を走らしてゐる。

「コリヤ燕石、是へ出い、出いと申すに」

燕石の左右には、榮助だの佐市駒などが頑張つてゐて、役人達を黙つて睨み付けてゐる。何れも土地のご用聞で、何かと日頃燕石の世話になつてゐて、榮助や佐市駒の腕つ節の強い事も知つてゐるから、踏込んで召捕る事は出来ない。

『出い〜』

と廊下に立つて、聲ばかり掛けてゐるが、元々燕石は、晋作を少しでも遠くへ逃がさうといふ考へだから、落附いて書いてゐる。

『サア今度は誰の番だ、滅多に書いてやらぬぞ、今度は字か繪か』

女達は只オド〜して、後を注文する氣色がないから、關門の安が、

『親分、私に書いておくんない』

『何だ安、貴様の註文は』

『何でも宜いから長い物を書いておくんない』

『長い物と云つて繪か字か、繪なら馬が行燈をくわへてゐる處でも描いてやらうか』

親分子分がドツと笑ふ、堪りかねた役人が、

『燕石、ご用だツ、神妙に繩に掛らんとその分に捨置かぬぞ』

此の時始めて燕石は役人に向つて、

『静になすつて下さい。どういふご用か知らんが、不肖ながら此の地では聊か人に知られた加島屋長次郎、決して逃げ隠れは致しません。何處へでもご同道いたしますが、此の場でお繩は頂きません。身に犯せる罪のない者、強て繩をお掛けになるといふのなら、子分一同もお手向ひを致しませう』

役人も仕方がないので、

『然らば繩を掛ける事は許して遣はすが、神妙に同道いたせ』

『委細承知いたしました』

そこで燕石は、役所へ行つて繩に掛つた。美馬君田も矢張召捕れて、高杉晋作の行方を調べられたが、知らん〜で通して終つたので、國事犯人とし高松の牢獄へ繋かれる事になりました。

最後に幕府の役人は、高杉が四國へ逃げた事を知つて、丸龜の勤皇家村岡宗四郎方を調べたが晋作は讃岐に滞在中、一二度同家を訪ねた事はあつたが、逗留した事はなかつた。此の宗四郎の

母も又妹も聞えた勤皇家でした。さうして此の妹の機智に依つて、急使を以つて古市麥舟に

告げ、麥舟から燕石に知らせ、燕石又使ひを走らせて晋作を逃がしたといふ事になつてをります

役人は、晋作が村岡家に居ない事が分ると、今度は日柳燕石方へ立向つたのでございますが、

燕石方にも、又晋作の隠れ家にも居ない。彼を長州へ逃がしてはならんといふので、多度津方面

へ手を廻したのでございますが、容易に晋作は現はれない。
處が晋作は金毘羅詣りの参詣者に姿を替え、おうのも脚絆押掛け、結びつけ草履、妻折笠を被つてゐる。

定はんから教へられた通り、榎井村から象頭山の裏を廻り、全然違つた方面から多度津街道へ出て来た。多度津から乗船をして、馬關へ歸らうといふのでございます。

幕府の役人が、多度津の渡船場へ網を張つて、往來の人は厳しく調べられてゐる處へ、若い旅の夫婦者が通り掛つた。商人のやうな拵へだ。

「コレ、一寸待て」

「ハイ、何でござります」

申すまでもなく高杉晋作です。家を通れ出て、松里庵半介の處で、衣類を改めて、態々廻り道をして此處へやつて来たのだが、役人に調べられると、長州訛りを隠す爲に、態々長崎言葉を使つてゐた。おうのも暫く長崎にゐたので、方言は委しく知つてゐる。

「其方は長州から参つたのであらう」

「イ、エ違ひます。私は長崎の者でございます」

「連の女は何だ」

「女房でございます。金毘羅様へご参詣に参りましたのでございます」

「貴様胸に掛けてゐる袋は何だ」

「是は何でもござりません。書附や何か入つてをりますので」

「一寸見せろ」

「イエご覧になるのはご勘辨を願ひます。人様には見せられない物が入つてをります」

「怪しい奴だ。ソレ取押へろ」

「アレ貴所、亂暴をなすつてはいけません」

といふ内に、二三人が押へ付け、無理に首に掛けた袋を取つて、中を檢めると、手紙を丸めたのが入つてゐた。見てゐる内に役人が噴飯た。

「何だ是は……戀しき、助様参る。ご存じより……アハ、是ア戀文だな、イヤハヤ呆れた奴だ。どれも是も色文ばかりだ」

是は晋作が豫ておうのに書かして置いた手紙で、種本は縁日で買つた戀文指南だ。役人が呆れて投り出すのを、大切さうに拾ひ上げ、

「是を失したら女房に怒られます。お返し下さい」

「持つてけ、巫山戯た奴だ」

袋ごとと投げ出したのを慌て、拾つて、おうの、手を取りながら船へ飛び込み、
『サアどうか船頭さん、お金は澤山上げますから、船を早くお出しなすつて下さい。ア、驚いた
驚いた。讃岐といふ處は、恐ろしい處です』
幸ひ先客も急いだので、船頭が船を出しまして、晋作おうのは無事に馬關へ立歸る事が出来ま
した。

燕石は獄中に於て『皇國千字文』を作り、其の博學なる處を示し、勤皇愛國の精神を世に廣め
ました。

又獄中作の詩や短歌なども澤山でございませうが、その内に斯ういふ情歌がございませう。
あけの鴉は東で啼けどわしの妻子は西で泣く

獄中に於て妻子を思ふの情、聞く人涙を催さぬはなかつた。在獄四年、大政維新の曉、朝令
に依つて出獄を命ぜられ、その疲勞したる身も厭はず、國家の爲に奔走する事約半年、辱けな
くも征討總督の宮に従つて、北越へ征途に上りました。お役目はお日誌方でございませう。一度
京都に上りました時の歌が、

水鳥の鴨の川邊にかり居して我も都の人となりけり
明治元年六月二十六日、越後柏崎で病死しましたが、年五十二歳でした。

出獄後、晋作の病死を聞き、態々長州清水山のその墓に参り、尼となつて墓守をしてをりまし
た愛妾おうのを慰めたといふ事でございます。
思ふに燕石は、始めは面白半分になつた博奕打であつたけれども、後年は博徒でゐる事が心に
染まなかつたのに違ひありません。然しその時には既に家財も盡き、一方多くの食客を養ひ勤
皇に盡力するには、どうしても莫大の金を必要とする。やむなく生涯を博徒に送つたといふ事は
嫡子日柳三舟の書かれたものを見ても明かでございます。

薩長聯合

晋作が長州へ歸つた時には、長府藩の感情も緩いで、伊藤俊輔も井上聞多も皆な萩へ歸つてゐ
た。さうして此の人達は、桂小五郎を中心にして、政治方面をやつてゐた。高杉晋作は、赤根武
人がゐないので、自然奇兵隊の總督の立場になつた。

その内に土佐の坂本龍馬と、中岡慎太郎などが繁く長州へ入つて来て、薩長兩藩に聯合をさ
せやうとした。此の事は既に先年筑前の月形などが間に入つて西郷との間に默契が出来てゐる事
で、當時博多藩が、佐幕黨に傾いてゐる爲、實現をしなかつた事なものですから、高杉に否やはな
い又西郷の心中も分つてゐるが、藩中には相當反對の連中もゐるから、高杉は表面に立たず、専

ら桂や井上に任して、時々その相談にあづかる位にしてをります。然し反対でないことは、坂本の旅宿を訪ねて、愛用のピストルを送つたりしてゐる事でも能く分つてをります。その内にも、幕府が二度目の長州征伐の計畫をしてゐる事は、頻々と報告が入つて参ります。筑前の藩論が佐幕黨になつてゐても、月形や鷹取、早川などが勤皇黨である事に變りはありません。そこで商人風に身をやつした大庭傳七が、博多と萩の間を往復しては頻りに聯絡を取つてをります。

スルと或日、高杉を突然尋ねて來たのが、筑前の浪人で、矢張り勤皇黨の一人藤四郎茂親といふ男、高杉が筑前滞在中懇意にした一人でございます。

「ヤア藤四郎さん。珍らしいな、何かご用で」

「一寸お願ひがあつて参りました。貴所のお力を拜借しなければならぬ事が出来ました」

「と云はれるのは」

「貴所は多分ご存じないでせうが、望東尼が捕へられまして、玄海の孤島姫島に投獄されたのでございませう」

「エ、ツ」

と思はず晋作も驚きの聲を揚げた。

「何で望東尼が監禁されました」

「貴所を始め、福岡藩の志士を多く圍まつた爲でございます」

「さうですか、さうと聞ては一刻も猶豫が出来ぬ。只今から出立を致さう」

「マアお待ち下さい。貴所のお心持は分るが、貴所ご自身お出で下さるには及ぶまいと存ずる。

ご隊士の内何人か拙者にお貸し下さらぬか、さすれば手前姫島へ乗込み、望東尼をお救ひ申して参ります」

「左様か、それなれば尊公にお任せ致す。隊士と申せば……おさうだ、彼の石蔵屋卯平も當時手前の隊につて小寺幸兵衛と申してをる。又髮結喜八、幸助の兄弟も、同じく奇兵隊士として藤堂喜八郎、權堂幸助と申してをります。彼の三名の外に、猶三名程遣はしませう」

「それは忝けなう存じます」

そこで晋作が、早速一同を呼んで申附けました。

慶應元年、野村望東尼は、勤皇の志士を多く匿まつた廉に依つて召捕れ、

浮雲のかくるもよしや武士の日本心の數に入りなば

といふ歌を、平尾山莊に残して、此處玄海灘の一孤島、姫島の獄舎に送られて來たのでございす。豎一間半、横二間の内へ、廁を取り、それに警護の者の座る處まで取つて、僅かに四疊あま

り、それも疊も敷かぬ板の間で、虎や象を入れるやうな格子さへはめて、開ゆるものは磯打つ浪と汐吹く風のみでございませぬ。冬は来れども、手をかざす火桶もなく、又、夏のひねもす、涼みを取るべきすべもございませぬ。それでも時をりは尋ねてくれる海女達の慰めの言葉を何よりの喜びとしてをります。

それでも晝の内は、般若心經を寫し、又和歌を作り、日記を認めたりしてをります。流島中の日記三篇を『比買島日記』と稱け、和歌を書とめたのを『夢かぞへ』と題しました。その内から二三抜抄して見ますと、

我と我が心はいさめ慰めつ春の風でもはるならぬ春

よる波の岩に砕くる音聞けばむせばぬ物もなき世なりけり

なか／＼に闇の暗きに馴しより心のやみはさりげなる哉

慶應二年の秋九月中旬、守り厳しき姫島の夕闇の中に小舟を乗着け、上陸をした六七人の者がございませぬ。その内の一人は、島番飯田嘉右衛門の詰所の方へ進み、他の者は濱傳ひに牢舎の前まで参りました。

丁度見廻りの手代も去つて四邊に人はをりませぬ。先へ進んだ一人が、
『野村の望東尼様は此處にはお在になりませぬか』

と聲を掛けたので、望東尼は、

『ハイ、野村もとは是にをりまするが、何誰様でございませぬ』

『オウ、望東尼様、此處にお在でございませぬか、お懐しうございませぬ。高杉晋作様の命に依り幸助お迎ひに参りました。筑前の藤四郎殿も、小寺幸兵衛殿も、兄の喜八も来てをります。只今入口をお開け申します』

といふ内に、一人が一刀を引抜いて、牢の締りを打破り、

『珍しや野村の刀自、拙者は元筑前の多田の庄藏でござる。早く是へお出なされ』

次々と知人の名を云はれ、夢かと思ひながら遣出して参りますのを、幸助は手を取つて助け起し、己れの背に負つて、

『サア皆様参りませう。お話し船の中にて緩りとなさいませぬ』

四人の者が周圍を圍み、波打際へ参りますと、船の中にも一人待つてをりました。

『藤四郎殿はどうなされた』

『まだお歸りがございませぬ』

『それでは合圖をしなければなるまい』

と云つてをりますと、此方は藤四郎、島守の詰所へ来て、種々雑談をしてをりました處へ、手

代が一人飛で来て、

『タ、大變でございます。曲者が忍び入つて、望東尼を連出しました。早くお出で下さい』
それを聞て飯田嘉右衛門。

『スワ一大事』

と、刀の柄を握りながら駆出しました。扱は首尾能く行つたかと藤四郎、同じく馳て濱邊へ参りますと、既に一同は船に乗つてをります。

『その船待て、大切の囚人を盗み出すとは憎い奴、野村望東尼を返せ』
と呼はるのを、後より來た藤四郎が後からドーンと突けば砂濱へコロコロと轉りました。その間に船へ跳り込み、

『サア早く船を出せ』

『心得た』

と棹を突張り、又櫂を押して、岸を離れて参ります。起上つた島田嘉右衛門、憎い奴めと、豫て用意の五十目の抱へ大筒に弾丸をこめ、船を目掛けて撃つた筈だが、慌て撃つたる事ゆゑ、弾丸は遙か向ふへ飛びました。それを見た船中の人々、ドツと聲を揚げて笑ひました。
高杉晋作は、瘦衰へた望東尼の顔を見て、思はず目をうるました。

『望東尼様、先年受けたご恩の程は、晋作少しも忘れてはをりません。それにしても飛だご災難でした』

『高杉さん、ご無事なお顔を見て、もとも此上の喜びはありません。又此度は貴所様のお盡力で九死に一生を得まして、何とお禮を申上げて宜いやら』

望東尼も嬉し涙に暮てをります。

『是からは何事もお考へなさらす、吞氣にお暮しなさるやう』

『有難う存じます』

晋作は馬關に一軒の家を求め、女中を一人附けて、望東尼を勞り住まはせました。

高杉等正義派大勝利の結果、恭順黨、所謂俗論黨が退却したので、幕府の申附けには長州更に應じない。そこで幕府に於ては、再び長州征伐の兵を起す事になり。尾張大納言を總督として諸藩の兵を従へ、長州をさして押して参りました。

然し此の時は前と違つて、薩長の間に聯合が纏つてゐるし、諸藩の内にも、幕府の命令に従はず、出兵しない處もあります。

然し幕府は何と云つても八百萬石で、譜代の諸侯も多い事ゆゑ、その勢ひは却々盛ん、殊に大船四隻で久我沖へ乗込んで來て、大島郡の久我へ上陸をして、その邊を守つてゐた百姓軍を追散

し、大島郡一帯を占領して終つた。それを聞いた晋作は、丙寅丸といふ小蒸汽船にて幕府の軍艦を急襲し、大勝利を得て、遂に大島郡を回復した。

此の戦ひに始まつて、陸に海に、長州兵は連戦連勝、殊に土佐の坂本龍馬が應援に来て、海軍を引受けてくれたから、晋作は陸戦に専念する事が出来た。

七月二日、海峡を渡つて大里を攻め落し、小倉城に迫る計畫を定め、奇兵隊その他が三道から進みました。小倉は非常に要害の城で、尋常では是を攻め落す事は容易でなかつたのですが、小倉城内に内輪もめが出来た結果、城を焼て立退いたから、手を濡さずに小倉城を占領する事が出来ました。その他藝州口、石州口、何れも長州兵の勝利となり、慶應二年の十二月に、遂に幕府方の大敗となつて、此の戦ひは終りました。

此の長州大勝利の影には、薩長聯合の効果があつた譯で、土佐の坂本龍馬と、中岡慎太郎の功績が認められるのですが、爰に氣の毒なのは、筑前の月形、早川等の入々、最初勤皇黨であつた加藤司書が、いつか月形、早川等との間に溝を生じ、桑名その他の幕藩に近付き、遂に佐幕派となり、幕府の威勢を笠に被て、藩主を恐喝し、慶應元年六月、同藩の志士二百餘人を一網の下に召捕つて終ひました。是が爲に折角月形、早川等は、薩長聯合の事に盡力しながら、遂にその成

高杉の最期

功を見ずに終りました。

處が慶應二年の秋頃から、晋作がふと風邪の氣味で寝たのが、いつまでも熱が下らない。そこで名醫に診て貰ふと、是が肺病である事が分かりました。その後病勢は益々加はるばかりなので、馬關櫻山の麓に家を建て、其處で養生をする事になり、おうのと望東尼が付き切つて介抱をしてをります。

井上聞多や、伊藤俊輔、佐世八十郎や福田勝平などが代るく来ては力を付けてくれるが病氣は益々重るばかりでございます。

此の頃晋作は、孝といふ事を頻りに考へるやうになりました。考へて見れば自分は若い頃から家を外にして、随分両親に心配を掛け、不孝であつた。今斯うして病の床に倒れ、苦勞を掛けるのは不孝も甚だしい。せめては少しでも安心をされるやうにと、三日にあげず父の小忠太宛に手紙を書いてをります。病氣も段々快くなる様子ゆゑ、ご安心下さいと云つてやるから、萩の本宅の方では、全く快い方に向つてゐるとばかり思つてをりました。妻の雅子にも折々手紙を書く、夫婦になつて以來、一つに暮したのはホンの僅であつた。さうして両親の介抱をさせ、子供の養育

を任してゐる。氣の毒だといふ心持で書いてをります。

晋作は急に繪の稽古を始めました。それは長年の懸案が、まだ却々成功の足許へも届かない。是からだ、是から一踏張りやうと思つてゐる處へ此の病氣、考へるとジリ／＼する。そこでその昂奮を押へる爲に、繪の稽古をしてをります。又詩を作り、歌を詠む、それには宜い對手があるうのと交替で、毎日枕許に座つて看病をしてくれる望東尼は歌の達人だ。平尾山莊にゐた頃も、能く合作して興じた事などがあつた。そこで折々晋作が上の句を詠んで見せると、直ぐに望東尼が下の句を附けた。その内の一つにこんなのがあります。

面白き事もなき世に面白く

高杉

住みなすものは心なりけり

望東

その内にも病勢は益々つゝのる。櫻山の草庵では何かに不便であるので、林屋といふ豪家の座敷を借て其處へ引移りましたが、時々吐血を致し、目に見えて衰へて來るやうです。

そこで望東尼と、うのが相談の上、晋作には内緒で、萩の本宅の方へ知らせました。

驚いて雅子が看病の爲やつて参りました。晋作は斯うして愛妻と、愛妾と、さうして望東尼、是は又不思議な縁で、互ひに助け助けられて、實の母か姉のやうにも思つてをります。此の三人の女性から手厚い看護を受けたのはせめてもの仕合せでございます。

庭の櫻の見事なのに目を喜ばし、此の頃はもう繪を描く力もありませんので、歌など作り、望東尼に認めて貰ひますが、その歌の題となつた櫻も散り始め、又散り盡した四月も半ば頃、俄然病氣の悪化が認められて來ました。そこで萩から父の小忠太と母のみちもやつて参りました。晋作は兩親の手を取つて、繰返し／＼、是までの不孝を詫びました。兩親は涙にむせびましたが、ウ逆も助からぬと決心をした母が、

『晋作、何か云ひのこす事はなにかい』

と優しく尋ねますと、

『あと／＼の事を宜しく』

と云つたきりでございます。井上や伊藤が見舞に來ると、

『頼むぞ、跡を確りやつてくれ』

と、そればかり繰返してをりましたが、遂に慶應三年の四月十四日、眠るが如き終りを告げました。享年二十九歳、一家近親は固より、一落寂として聲なく、同志又是を傳へ聞いて、號泣いたさぬ者はございません。

晋作の遺骸は同志一同が集つて相談の上、長門厚狹郡吉田村の清水山に葬りました。此處は奇兵隊本營のあつた因みの土地でございます。

高杉晋作

おうのは頭を剃り、尼となつて、名を梅處と改め、その麓に東行庵といふ庵を立て、朝な夕な香華を手向けてその一生を送りました。

妻雅子は、その後も舅姑に孝養を盡し、両親を見送つての後は、晋作の遺子の養育に生涯を捧げて貞女の鑑とうたはれました。

望東尼は、晋作の歿後は、酷く落膽して、三田尻の荒井といふ人の家に引取られてをりました。病を得て、毛利侯より侍醫をお遣はしになる事三度、衣類、菓子などを頂戴して面目を施しました。

花浦の松の葉白く置く霜の消ゆれば哀れ一さかりなり

といふ辭世を残して、慶應元年十一月六日、享年六十二歳にて歿しました。

明治二十一年五月、晋作は靖國神社に合祀され、更に二十四年四月八日、贈位正四位のご沙汰がございました。

嗚呼維新大業の闘士高杉晋作、その成業を見ずして早世いたしましたのは、返すくも惜むべき事でございますが、その終生の大偉業は、永久に傳はり残る事でございます。

高杉晋作 談講切讀

昭和十七年五月十八日印刷
昭和十七年五月廿五日發行

著者 桃川東燕
東京市神田區神保町一ノ三〇

發行者 大谷徳之助
東京市神田區猿樂町二ノ一三

印刷者 岩見雄司
東京市神田區猿樂町二ノ一三

印刷所 岩見印刷所
東京市神田區神保町一ノ三〇

發行所 天佑書房
振替東京三三〇七番

(日本出版文化協會登録第一九〇五〇番)

定價 四拾五錢

東京市神田區路二ノ九
配給元 日本出版株式會社

終

¥.45